

教育形態の違い（統合教育と分離教育）が聴覚障害者の体力や運動能力に与える影響

（課題番号 14580072）

平成14年度～平成16年度科学研究費補助金（基盤研究C）
研究成果報告書

平成17年3月

研究代表者 及川 力（筑波技術短期大学障害者高等教育センター）
研究分担者 橋本 有紀（筑波技術短期大学障害者高等教育センター）
齊藤まゆみ（筑波大学大学院人間総合科学研究科）
稲垣 敦（大分県立看護科学大学）

はしがき

わが国の聴覚障害教育においては、昭和40年代からの補聴器の普及、早期教育の実施によって、他の障害に先んじて統合教育が進んできたとされている。しかしながら、現在まで30有余年、聴覚障害児童・生徒の統合教育をめぐる議論があつたにもかかわらず、体格や体力・運動能力をめぐる議論はひとつも議論されてこなかったように思われる。

一方、1994年のサラマンカ声明以来、国際的にも国内的にも、障害児が通常の学校、通常の学級で教育を受けようとする潮流が、近年急速に広まりつつある。聴覚障害教育においても、聾学校とほぼ同数の、あるいは聾学校以上の数の聴覚障害児童・生徒が通常の学校で学習するようになってきている。

従来、聴覚障害児童・生徒の体格や体力・運動能力をめぐる議論は、聾学校の在籍者を対象として行なわれてきたが、現状はそれだけでは彼らの真の姿を正確に捉えることが不十分であることを示唆しているように思われる。このようなことから、一度、通常の学校に在籍する聴覚障害児童・生徒の体格や体力・運動能力が、聾学校の在籍者より高いのかどうか確かめてみたいと考えていた。

幸い、平成14～16年度の科学研究費補助金を受けることにより、今回、初めて聾学校に加え、通常の学校に在籍する聴覚障害児童・生徒の体格や体力・運動能力に関する調査を行なうことができ、聾学校及び通常校に在籍する聴覚障害児童・生徒の実態の一端を明らかにすることができた。

通常校の児童・生徒のデータ数は必ずしも十分とは言えないが、本報告書が聴覚障害教育において身体の発育発達あるいは統合教育について考えるための資料として活用されることを期待したい。

研究代表者 及川 力
研究分担者 橋本 有紀
齊藤まゆみ
稲垣 敦

研究組織

研究代表者 及川 力 (筑波技術短期大学障害者高等教育センター)
研究分担者 橋本 有紀 (筑波技術短期大学障害者高等教育センター)
齊藤まゆみ (筑波大学大学院人間総合科学研究科)
稲垣 敦 (大分県立看護科学大学健康運動学講座)

交付決定額 (配分額)

(金額単位：千円)

	直接経費	間接経費	合計
平成14年度	500	0	500
平成15年度	500	0	500
平成16年度	500	0	500
総計	1,500	0	1,500

研究発表

及川 力・齊藤まゆみ・稲垣 敦 (2003) : 聴覚障害学生の体力・運動能力と出身学校の関係. 第24回医療体育研究会/アジア障害者体育スポーツ学会日本支部会第5回合同大会プログラム・抄録集, 44.

Chikara OIKAWA, Mayumi SAITO and Hideo NAKATA (2003) : Motor ability development of deaf children in Japan. 14th International Symposium on Adapted Physical Activity : 117-118.

及川 力・齊藤まゆみ・稲垣 敦 (2004) : 4～6歳の聴覚障害幼児の運動能力に関する横断的研究. 障害者スポーツ科学, 2 : 14-23.

及川 力・橋本有紀・齊藤まゆみ・稲垣 敦（2004）：教育形態の違いが聴覚障害者の形態、体力や運動能力に及ぼす影響－通常の小学校に在籍する聴覚障害児と聾学校小学部に在籍する聴覚障害児の比較－. 日本体育学会第55回大会号：604.

及川 力・齊藤まゆみ（2004）：教育歴による聴覚障害者の体力分析－小学校段階の聾学校在籍児と通常校在籍児の比較検討－. 第25回医療体育研究会/第8回アジア障害者体育・スポーツ学会日本支部会第6回合同大会プログラム・抄録集：44.

橋本有紀・及川 力・齊藤まゆみ・稲垣 敦（2004）：6歳から11歳の聴覚障害児の体格および体力・運動能力～聴覚障害児と健常児の比較～. 日本体育学会第55回大会号：605.

及川 力・橋本有紀・齊藤まゆみ・稲垣 敦（2005）：在籍した学校の違いが聴覚障害者の体力に及ぼす影響～聾学校卒業生と通常校卒業生、両校経験者の比較～. 障害者スポーツ科学、3：22-27.

目 次

はしがき

第1章	短期大学に在学する18歳の聴覚障害学生の体力・運動能力と出身学校との関係～聾学校卒業生と通常校卒業生、両校経験者の比較～	1
第2章	通常の小学校に在籍する聴覚障害児と聾学校小学部に在籍する聴覚障害児の体格、体力・運動能力	10
第3章	通常の中学校に在籍する聴覚障害生徒と聾学校中学部に在籍する聴覚障害生徒の体格、体力・運動能力	29
第4章	通常的高等学校に在籍する聴覚障害生徒と聾学校高等部に在籍する聴覚障害生徒の体格、体力・運動能力	39
第5章	聴覚障害児童・生徒と健常児童・生徒の体格、体力・運動能力	51
第6章	通常の学校における聴覚障害児童・生徒への支援	68

まとめにかえて

第1章 短期大学に在学する18歳の聴覚障害学生の体力・運動能力と出身学校との関係～聾学校卒業生と通常校卒業生、両校経験者の比較～

Ⅰ. 緒言

わが国において、現在、聴覚障害児が教育を受ける場としては、聾学校と通常の学校とがある。聾学校は現在も在籍生徒数の減少が進行し、教育活動に支障をきたしつつあることが報告されている（馬場2001）。この原因として出生率の低下とともに、聾学校から通常の学校へ転校する聴覚障害児が増加したことが馬場（2001）によって指摘されている。

わが国の聴覚障害児教育においては昭和40年代からの補聴器の普及、早期教育の実施によって他の障害に先んじて統合教育（インテグレーション）が進んできた（鷲尾2002）とされる。

統合教育下の聴覚障害児に関しては、言語発達、聴覚管理、発音指導、学力、生活指導、進路指導及び自我形成などの観点からの数多くの報告がある（馬場2001、川瀬1995、草山1994、宮野1988、大杉1999、武田1991、田中1990a、田中1990b）が、体格や体力に関する報告はまったく見当たらない。体格や体力などのいわゆる発育発達に関する側面は、統合教育の議題としては取り上げられてこなかった。従来行なわれてきた聴覚障害児の発育や発達に関する研究は、専ら聾学校に在籍する聴覚障害児だけを対象に行なわれてきたと言える。

しかしながら現在、義務教育段階だけを見ても、通常の学校には聾学校の児童・生徒数の約8割に相当する聴覚障害児が在籍する（特殊教育資料 2002）ことや統合教育の一層の進展が図られつつある現在の状況を考慮した時、聾学校のみならず通常の学校に在籍する聴覚障害児をも視野に入れた研究が非常に重要である。

今回、聴覚障害者のみを教育対象とするT技術短期大学生を取り上げ、学生が在籍した学校の違い（聾学校か通常の学校か）が聴覚障害者の体格や体力に及ぼす影響について検討することを試みた。継続的に統合教育を受けてきた聴覚障害者と、やはり継続的に聾学校教育を受けてきた聴覚障害者、あるいは統合教育と聾学校教育の双方の教育を受けてきた聴覚障害者の間での体格や体力面に関する検討をしておくことは、聴覚障害児の統合教育を検討する上で重要な知見を提供するのみならず、他の障害児の統合教育プログラムの検討にも有用な知見を提供すると思われる。

Ⅱ. 対象と方法

1 対象

対象はT技術短期大学聴覚障害関係学科に入学した時の年齢が、満18歳の男女の聴覚障害者とした。男子328名のうち、小学部から高等部まで継続的に聾学校に在籍した者130名、小学校から高等学校まで継続的に通常の学校に在籍した者120名、小学校から高等学校までの間に聾学校と通常の学校両方に在籍した経験のある者78名であった。また、同じく女子148名のうち、小学部から高等部まで継続的に聾学校に在籍した者41名、小学校から高等学校まで継続的に通常の学校に在籍した者80名、小学校から高等学校までの間に聾学校と通常の学校両方に在籍した経験のある者27名であった。対象者の特性は表1の通りである。

表1 対象者の特性

	男 子	女 子
n	328	148
身長 (cm)	170.3±5.9	157.5±5.4
体重 (kg)	62.2±8.3	51.8±6.6
聴力 (dBHL)	98.3±10.2	98.6±11.0

2 調査項目

対象者がT技術短期大学において1年次の第1学期（5月）に保健体育授業で実施していた、握力・背筋力（筋力）、立位体前屈（柔軟性）、垂直跳び（瞬発力）、サイドステップ（敏捷性）、12分間走（全身持久力）の体力テストおよび、50m走（走力）、立ち幅跳び（跳力）、ハンドボール投げ（投力）の基礎運動能力テストおよび身長、体重の身体計測値ならびに高等学校段階のスポーツ系クラブの加入状況を分析対

象とした。

3 研究方法と統計処理

1の対象に該当する対象者の各測定データを平成14年度から平成3年度まで、過去12年遡って収集した。次に、対象者を小学部、中学部、高等部いずれも聾学校に在籍した者（以下、聾学校群）、同じく小学校、中学校、高等学校いずれも通常の学校に在籍した者（以下、通常校群）及び小学校から高等学校までの間に聾学校、通常の学校両方の在籍経験のある者（以下、両経験群）の3群に分け、T技術短期大学への入学年度を共変量とする共分散分析および多重比較検定（LSD法）によって、性別、調査項目別に平均値の群間の差異を検討した。なお、有意水準は5%未満とした。

III. 結果

表2に男子の成績を示す。

共分散分析の結果（表3）、サイドステップと12分間走で学校種別の主効果が認められ、多重比較検定の結果、いずれも聾学校群の成績が通常校群及び両経験群を上回っていた。しかしながら、身長、体重はいずれも3群間に有意な差は認められなかった。

表2 学校種別による3群の成績の比較（男子）

	聾学校群	通常校群	両経験群
身長 (cm)	169.8±6.3	170.2±5.6	171.0±5.6
体重 (kg)	62.4±8.2	60.9±7.8	63.8±8.9
握力 (kg)	43.1±6.8	42.4±6.2	43.8±7.2
立位体前屈 (cm)	11.9±7.9	12.2±8.4	12.6±6.6
垂直跳び (cm)	58.3±7.8	58.2±8.0	57.9±8.8
背筋力 (kg)	140.3±27.8	135.9±30.4	142.8±30.0
サイドステップ (回)	48.5±5.9	46.2±5.5	46.9±5.5
12分間走 (m)	2625.4±301.5	2539.8±307.4	2500.9±275.7
50m走 (秒)	7.30±0.47	7.45±0.52	7.44±0.68
立ち幅跳び (cm)	225.0±21.1	223.9±21.4	223.7±21.1
ハンドボール投げ (m)	26.6±4.9	25.7±6.1	27.0±4.9

表3 共分散分析の結果（男子）

	身長	体重	握力	立位体前屈	垂直跳び	背筋力	サイドステップ	12分間走	50m走	立ち幅跳び	ハンドボール投げ
入学年度	NS	*	*	*	NS	*	NS	NS	NS	NS	NS
回帰係数		-0.39	-0.59	-0.39		-1.21	0.21				
学校種別	NS	NS	NS	NS	NS	NS	*	*	NS	NS	NS
多重比較							聾>通	聾>通 聾>両			

聾>通：聾学校群が通常校群を上回る。

聾>両：聾学校群が両経験群を上回る。

表4に女子の成績を示す。

共分散分析の結果（表5）、垂直跳び、サイドステップ、50m走、立ち幅跳び及びハンドボール投げで学校種別の主効果が認められ、多重比較検定の結果、いずれも聾学校群が通常校群及び両経験群を上回っていた。しかしながら、身長、体重はいずれも3群間に有意な差は認められなかった。

表4 学校種別による3群の成績の比較(女子)

	聾学校群	通常校群	両経験群
身長 (cm)	158.4±5.0	157.6±5.5	155.6±5.1
体重 (kg)	52.4±7.0	51.5±6.2	52.1±7.2
握力 (kg)	27.7±4.8	27.5±4.8	25.5±3.8
立位体前屈 (cm)	13.9±6.1	13.6±6.3	14.4±5.9
垂直跳び (cm)	43.2±6.1	41.9±5.6	38.7±5.1
背筋力 (kg)	89.9±19.8	84.8±18.0	83.6±20.3
サイドステップ (回)	42.9±3.2	39.6±3.1	41.0±3.4
12分間走 (m)	2084.4±260.6	2009.0±242.3	2093.6±237.9
50m走 (秒)	8.69±0.49	9.23±0.80	9.10±0.63
立ち幅跳び (m)	174.1±17.5	166.0±19.5	163.0±17.9
ハンドボール投げ (m)	17.5±3.3	15.2±3.5	15.9±3.9

表5 共分散分析の結果(女子)

	身長	体重	握力	立位体前屈	垂直跳び	背筋力	サイドステップ	12分間走	50m走	立ち幅跳び	ハンドボール投げ
入学年度	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS
学校種別	NS	NS	NS	NS	*	NS	*		*	*	*
多重比較					聾>両 通>両		聾>通 聾>両 両>通		聾>通 聾>両	聾>通 聾>両	聾>通

聾>通：聾学校群が通常校群を上回る。

聾>両：聾学校群が両経験群を上回る。

通>両：通常校群が両経験群を上回る。

両>通：両経験群が通常校群を上回る。

表6に、高等学校段階のスポーツ系クラブの加入状況を示す。

男子の場合、聾学校群、通常校群、両経験群の3群間に有意差が認められ $\{\chi^2(df=2) = 54.702, P < 0.05\}$ 、多重比較検定の結果、聾学校群(88.9%)は通常校群(43.6%)、両経験群(64.8%)に比べて加入割合が有意に高率であった。同様に、女子においても3群間に有意差が認められ $\{\chi^2(df=2) = 36.750, P < 0.05\}$ 、多重比較検定の結果、聾学校群(89.2%)は通常校群(30.7%)に比べて加入割合が有意に高かった。

表6 高等学校段階のスポーツ系クラブの加入状況(割合)

	男子			女子		
	聾学校群	通常校群	両経験群	聾学校群	通常校群	両経験群
所属有 (%)	88.9	43.6	64.8	89.2	30.7	68.0
所属無 (%)	11.1	56.4	35.2	10.8	69.3	32.0

IV. 考察

共分散分析の結果、全11項目のうち、男子ではサイドステップと12分間走の2項目、女子では垂直跳び、サイドステップ、50m走、立ち幅跳び及びハンドボール投げの5種目で学校種別の主効果が認められ、そのいずれにおいても聾学校群が他の群よりも優れていた。

聾学校群が優れていた背景としては、聾学校と通常の学校での運動実施状況の違いが推察される。

聾学校では生活全体を豊かにするものとしてクラブ活動が積極的にとらえられており、多くの生徒がスポーツ系クラブに加入して(長見 1993)活動していることが影響している可能性がある。大学入学時点の体

力に最も影響しているであろうと考えられる高等学校段階のスポーツ系クラブの加入状況では、男女共に聾学校群の割合が高く、これが聾学校に在籍している生徒の体力向上に大きな役割を果たしていることが推察される。とりわけ、女子において男子よりも有意差のある種目が多かった背景に、男子以上のスポーツ系クラブへの加入状況の差が考えられる。

また、聾学校と通常の学校における、聴覚障害児童・生徒を取り巻く教育環境の違いが、このような差を生じさせた可能性も考えられる。

草野（1994）は、「聾学校は少人数の集団なので、子どもひとりひとりの活動の機会も多い。これに対して、インテグレーションのクラスの場合は、ハンディキャップに対してある程度の配慮はあるものの、クラスにはハンディキャップを負っていない子どもの方が多いので、配慮の程度にも限界が出てくる。そして多人数のクラスになると、ハンディキャップを負う子どもが活躍する機会が相対的に少なくなる。このような運動環境の違いが、体力・運動能力に差を生じさせたと考えられる」ことを指摘している。

さらに、聾学校で教育を受けた聴覚障害生徒と通常の学校で教育を受けた聴覚障害生徒の運動成績を比較した Schmidt（1985）の研究では、聾学校で教育を受けた聴覚障害生徒の成績が、有意に優れていることが報告されている。通常の学校に在籍する聴覚障害生徒は、本来持っている能力を発揮することができる身体活動の機会を十分に与えられていないため、能力がないのではなく本来の能力が制限されていると考えられている。

一方、個別の測定項目について有意差が生じた原因については必ずしも明らかではないが、以下のようなことが考えられる。

サイドステップは男女共に有意であったが、この種目は正確な実施方法を知ることがよい成績につながると考えられ、聾学校では少人数できめ細かい指導が個々になされている一方、通常の学校ではそこまでの指導が十分なされていないことが推察される。

12分間走は体脂肪率との相関が高いが、本研究では男子の3群間に有意な差は見られず、別の要因が影響している可能性が考えられる。

また、女子は5項目で有意であったが、聾学校はかなり以前から生徒数が減少しており、そのため異学年合同授業や男女共修授業が幅広く行なわれてきている。小学部、中学部、高等部を通じて男女一緒に活動することが多く、このことが聾学校における女子の体力の向上に貢献している可能性が考えられる。

体格に差がみられなかったことについては、一般的に体格は栄養の影響が極めて強く、その程度は遺伝以上だと考えられる。聾学校と通常の学校で学ぶ聴覚障害者の間で栄養摂取状況が著しく異なることは考えにくいから、このような結果になったと考えられる。

今回の調査では、聾学校群が男子では11項目中2項目で有意に上回り、同じく女子では5項目で有意に上回ったのに対し、通常校群の成績が他の2群を上回る傾向または有意な項目は男女とも一つも認められなかった。これらの結果から、在籍した学校の違いによって聴覚障害者が体力面で影響を受けており、さらに、女子においてその傾向がより顕著であることが明らかとなった。

今後は、小学校、中学校あるいは高等学校のいつ頃から差が生じるようになるのか、また、その理由は何かを追求することや、在籍歴にとどまらずどのような統合（あるいは聾学校）教育を受けてきたのかという教育の実態について検討することなどが課題となるであろう。

【文献】

- 馬場 顕（2001）：インテグレーションあれこれーダビラ博士の講演を聞いてー。聴覚障害、56（12）：40-43。
- 川瀬いく子（1995）：中学校難聴学級の指導の実際。聴覚障害、50（10）：4-7。
- 草野勝彦（1994）：言語ハンディキャップ。ハンディキャップ教育・福祉事典Ⅱ巻、福村出版、東京、487-496。
- 草山真一（1994）：ある難聴児の諸能力の発達の縦断的調査。聴覚言語障害、23（4）：153-159。
- 宮野忠夫（1988）：インテグレーションを考える。聴覚障害、48（2）：4-7。
- 長見 真（1993）：生涯スポーツをめざしたろう学校における体育学習の現状。学校体育、46（8）：72-75。

- 大杉 豊（1999）：統合教育が筆者の自己像形成に及ぼした影響—ろう者としてのポジティブ・セルフ獲得の機会剥奪。SNEジャーナル、4(1)：125-138.
- Schmidt, S.(1985): Hearing impaired students in physical education. Adapted Physical Activity Quarterly, 2: 300-306.
- 武田 修（1991）：小学校における聴覚障害児の学校適応状況について—調査報告。ろう教育科学、33(2)：45-71.
- 田中容子（1990a）：通級制の諸問題と東京都通級制難聴学級の現状と課題。聴覚言語障害、19（4）：111-126.
- 田中容子（1990b）：難聴学級に在籍する聴覚障害児の諸能力の推移。聴覚言語障害、20(3)：95-107.
- 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課（2003）：特殊教育資料（平成14年度）。東京：4-57.
- 鷲尾純一（2002）：インテグレーション環境で学ぶ聴覚障害児・者への教育的支援。特殊教育学研究、39（4）：91-97.

第2章 通常の小学校に在籍する聴覚障害児と聾学校小学部に在籍する聴覚障害児の体格、体力・運動能力

I. 目的

短期大学において保健体育科目の授業をしていると、反復横とびのステップがまったくできない学生や立ち幅とびが1 m程度しか跳べない学生がいる反面、全国高等学校総合体育大会（インターハイ）等の全国レベルの大会に出場した経験のある学生までいて、保健体育科目といえども個人差は大きく、他の科目同様指導に難儀をする。そこでこういった体力や運動能力の差が生じるのはあくまで個人の特性なのか、あるいは学生が教育を受けてきた学校の種別（聾学校や通常の学校）が関係しているのか疑問に思い、調べてみることにした。

その結果は前章に記載の通り、男子では、サイドステップ（聾>通）、12分間走（聾>通、聾>両）で、また、女子では垂直とび（聾>両、通>両）、サイドステップ（聾>通、聾>両、両>通）、50m走（聾>通、聾>両）、立ち幅跳び（聾>通、聾>両）及びハンドボール投げ（聾>通）で、男女ともに小・中・高いずれも聾学校に在籍した者のグループが、他のグループを有意に上回っているという結果を得た。身長、体重に差はなかった。

これらの結果から、このような差は一体小・中・高どの段階から生じるのか、また、それはどのような背景によるのかという疑問を持ち、まず小学校段階の聴覚障害児の形態、体力、運動能力の調査を実施した。

II. 対象及び方法

1 対象

調査対象者は全国の聾学校小学部または通常の小学校に在籍している、聴覚障害以外に他の障害を併せ持たない聴覚障害児とした。対象となった児童総数は、聾学校男子559名、同女子400名、通常校男子102名、同女子98名であった。

表7 調査対象児童数

	男 子		女 子	
	聾学校	通常校	聾学校	通常校
6 歳	74	2	64	5
7 歳	71	8	63	9
8 歳	84	17	55	20
9 歳	94	28	64	22
10 歳	122	14	89	21
11 歳	114	33	65	21
合 計	559	102	400	98

2 研究方法と統計処理

平成15年度の秋に、全国の聾学校小学部92校及び難聴学級を設置している通常の小学校498校に調査票を送り、在籍している聴覚障害児の形態（身長、体重）、聴力（良耳平均聴力レベル）、体力（握力、上体起こし、長座体前屈、反復横とび、20mシャトルラン）、運動能力（50m走、立ち幅とび、ソフトボール投げ）、運動実施状況及び各学校における体育の年間授業時間数について回答を求めた。

対象者を聾学校に在籍する聴覚障害児（以下、聾学校群）と通常校に在籍する聴覚障害児（以下、通常校群）に分け、Mann-WhitonyのUテストによって、性別、年齢別、調査項目別に平均値の群間の差異を検討した。なお、有意水準は5%未満とした。

3 結果及び考察

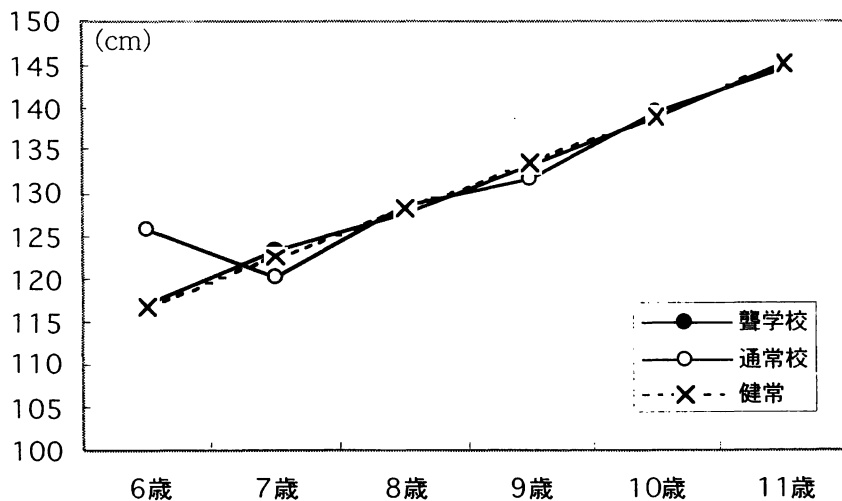
表8に男子の成績を示す。

表8 聾学校群と通常校群の体格・体力の年齢別平均値・標準偏差と有意差検定結果（男子）

項目	年齢	聾学校群			通常校群			有意差 検定結果
		\bar{X}	SD	N	\bar{X}	SD	N	
身長 (cm)	6歳	117.17	5.78	74	125.90	3.25	2	*
	7歳	123.61	5.65	71	120.16	4.77	8	NS
	8歳	127.81	6.11	84	128.58	5.34	16	NS
	9歳	133.30	7.05	94	131.72	6.08	28	NS
	10歳	139.13	7.64	122	139.69	8.99	14	NS
	11歳	145.33	9.36	114	144.64	7.11	30	NS
体重 (kg)	6歳	22.00	4.54	74	29.45	0.64	2	*
	7歳	24.69	4.68	71	21.76	2.16	8	*
	8歳	29.19	8.00	84	27.08	3.85	16	NS
	9歳	31.46	7.89	94	28.75	5.44	28	NS
	10歳	35.07	8.94	122	35.97	11.41	14	NS
	11歳	39.43	9.94	114	37.25	5.64	30	NS
聴力 (dBHL)	6歳	96.32	17.77	68	85.50	0.71	2	NS
	7歳	95.11	12.93	62	73.13	19.81	8	*
	8歳	94.26	22.33	79	81.61	26.42	17	*
	9歳	100.17	14.09	91	83.93	30.22	26	*
	10歳	98.22	15.42	112	86.70	25.17	14	*
	11歳	97.18	13.52	106	76.36	25.99	30	*
握力 (kg)	6歳	8.95	3.74	50	12.00	1.41	2	NS
	7歳	9.92	3.27	56	11.13	1.65	4	NS
	8歳	11.68	3.20	64	12.81	2.65	9	NS
	9歳	13.18	4.07	66	13.02	4.31	23	NS
	10歳	15.88	4.60	113	15.16	3.30	11	NS
	11歳	18.06	4.91	101	20.51	4.49	27	*
上体起こし (回)	6歳	10.39	6.32	49	5.50	3.54	2	NS
	7歳	13.15	4.66	53	14.00	3.65	4	NS
	8歳	13.79	6.00	63	14.89	5.40	9	NS
	9歳	16.53	5.99	64	14.76	4.59	21	NS
	10歳	17.89	5.73	105	17.44	3.40	9	NS
	11歳	18.32	5.70	96	19.83	6.20	24	NS

項目	年齢	聾学校群			通常校群			有意差 検定結果
		\bar{X}	SD	N	\bar{X}	SD	N	
長座体前屈 (cm)	6歳	27.96	6.63	51	25.00	7.07	2	NS
	7歳	27.09	7.35	55	24.20	1.92	5	NS
	8歳	29.41	8.09	59	28.44	6.23	9	NS
	9歳	30.15	6.99	66	28.68	7.96	25	NS
	10歳	31.75	7.11	107	30.64	8.56	11	NS
	11歳	34.42	8.61	99	30.06	8.93	25	NS
反復横とび (点)	6歳	24.45	5.85	58	28.00	14.14	2	NS
	7歳	27.31	6.95	58	28.00	7.35	4	NS
	8歳	30.61	7.66	64	31.67	11.35	9	NS
	9歳	32.21	7.61	70	31.85	7.96	26	NS
	10歳	37.23	8.40	109	34.82	8.24	11	NS
	11歳	36.75	7.83	97	41.62	8.10	26	*
20m シャトルラン (回)	6歳	12.60	8.97	30	17.50	13.44	2	NS
	7歳	14.96	7.63	27	13.00	3.16	4	NS
	8歳	21.05	14.08	38	29.50	17.95	8	NS
	9歳	28.13	14.45	30	29.42	17.13	19	NS
	10歳	29.99	16.35	70	33.78	14.71	9	NS
	11歳	37.96	18.34	68	46.96	22.61	22	NS
50m 走 (秒)	6歳	12.88	2.08	71	12.13	1.24	2	NS
	7歳	11.56	1.99	63	10.95	0.88	6	NS
	8歳	11.78	4.00	79	10.54	0.88	14	NS
	9歳	10.74	1.68	85	10.64	1.66	25	NS
	10歳	10.19	1.44	119	10.36	1.11	11	NS
	11歳	10.09	1.85	107	9.07	1.07	33	*
立ち幅とび (cm)	6歳	107.23	24.02	66	103.50	13.44	2	NS
	7歳	116.48	20.97	62	110.40	19.24	5	NS
	8歳	124.96	25.67	74	121.92	20.34	12	NS
	9歳	135.72	17.16	83	133.16	22.50	25	NS
	10歳	145.66	29.82	115	130.18	30.33	11	NS
	11歳	155.12	31.52	103	162.87	25.35	31	NS

項目	年齢	聾学校群			通常校群			有意差 検定結果
		\bar{X}	SD	N	\bar{X}	SD	N	
ソフトボール投げ (m)	6歳	7.74	3.13	57	7.00	4.24	2	NS
	7歳	9.46	4.72	55	7.75	2.75	4	NS
	8歳	11.61	4.44	75	13.33	3.37	12	NS
	9歳	16.03	6.86	77	18.25	6.67	22	NS
	10歳	18.19	7.67	114	19.50	6.65	10	NS
	11歳	22.42	8.83	102	26.25	8.91	28	*
合計点 (点)	6歳	27.21	9.31	29	28.00	12.73	2	NS
	7歳	32.80	6.86	25	32.50	4.43	4	NS
	8歳	37.30	8.62	37	39.00	10.11	8	NS
	9歳	44.50	8.64	28	41.18	10.72	17	NS
	10歳	45.70	9.79	67	45.75	10.73	8	NS
	11歳	52.52	10.46	68	56.48	12.07	21	NS



* $p < 0.05$

図1 加齢に伴う身長の変化 (小学校男子)

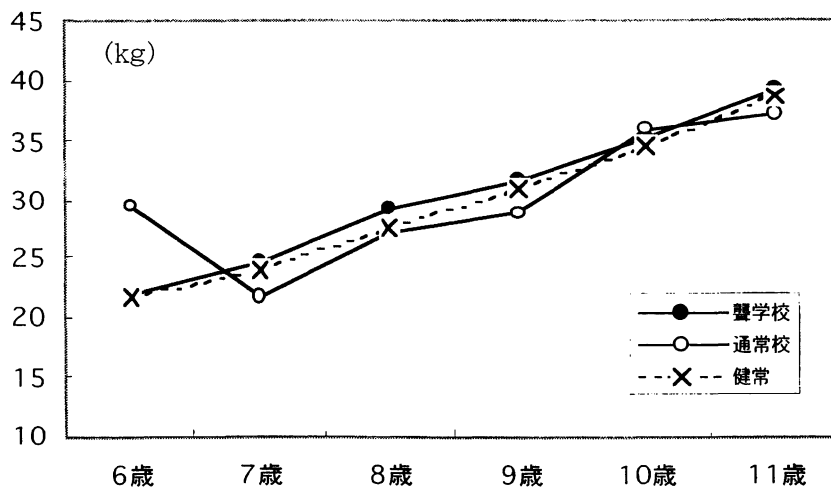


図2 加齢に伴う体重の変化 (小学校男子)

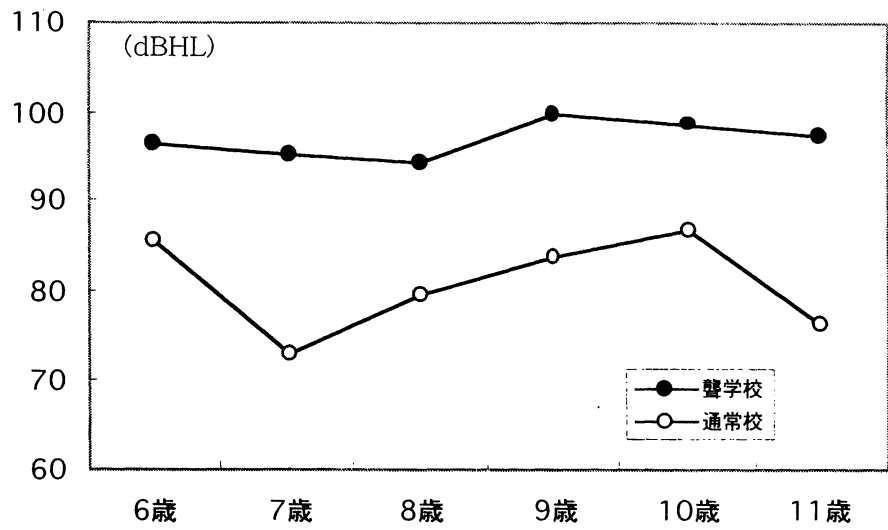


図3 加齢に伴う聴力の変化 (小学校男子)

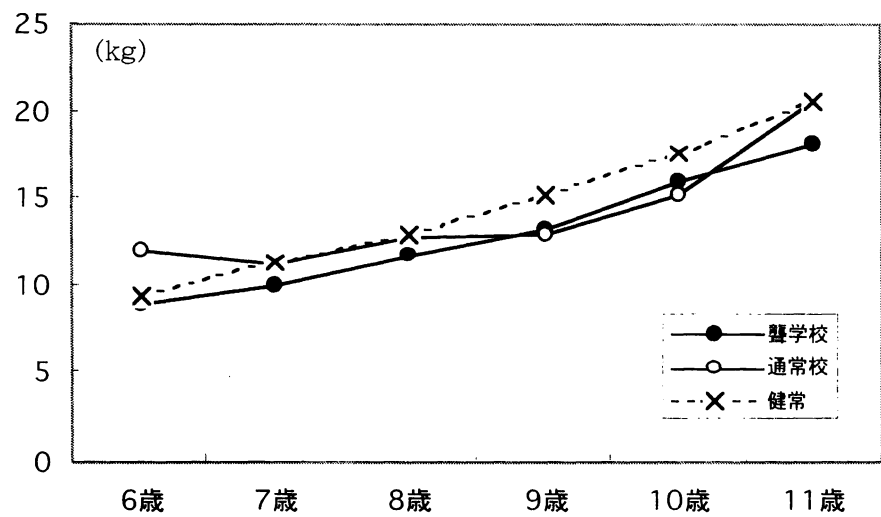


図4 加齢に伴う握力の変化 (小学校男子)

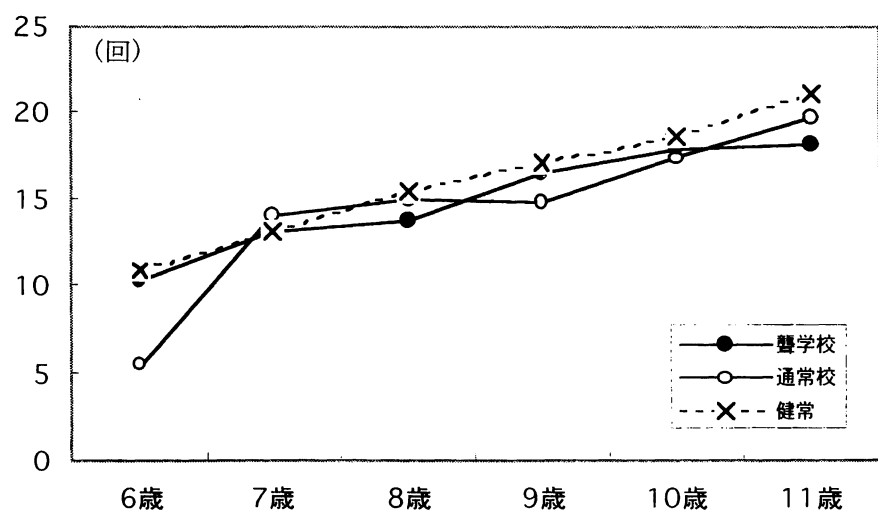


図5 加齢に伴う上体起こしの変化 (小学校男子)

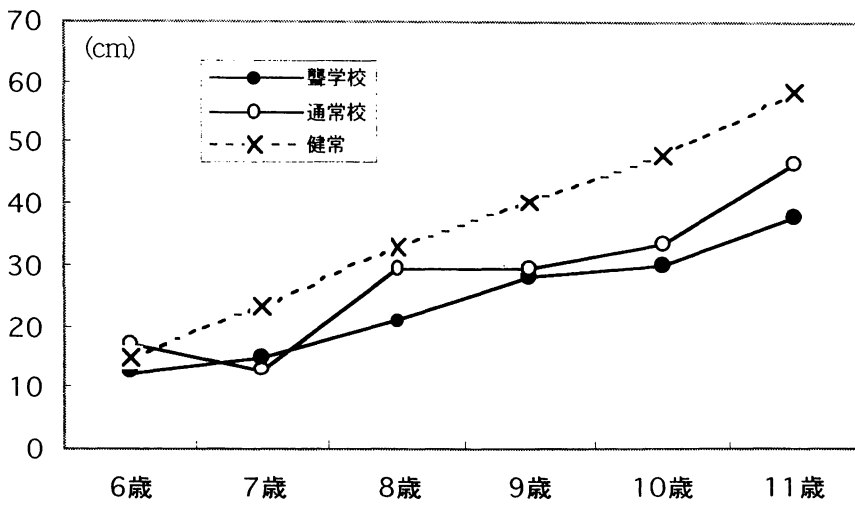


図6 加齢に伴う長座体前屈の変化（小学校男子）

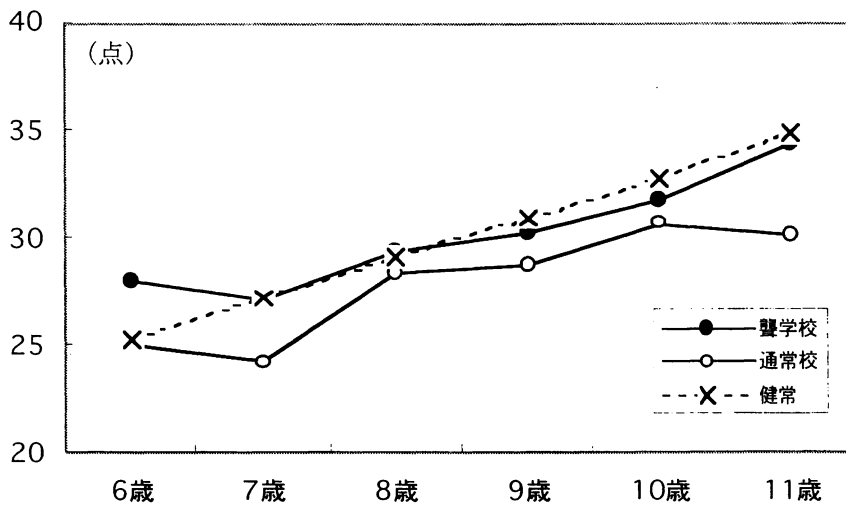


図7 加齢に伴う反復横とびの変化（小学校男子）

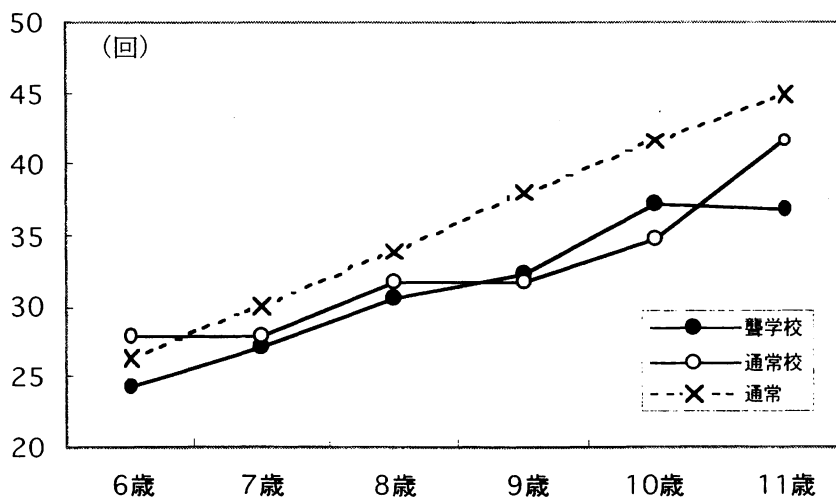


図8 加齢に伴う20mシャトルランの変化（小学校男子）

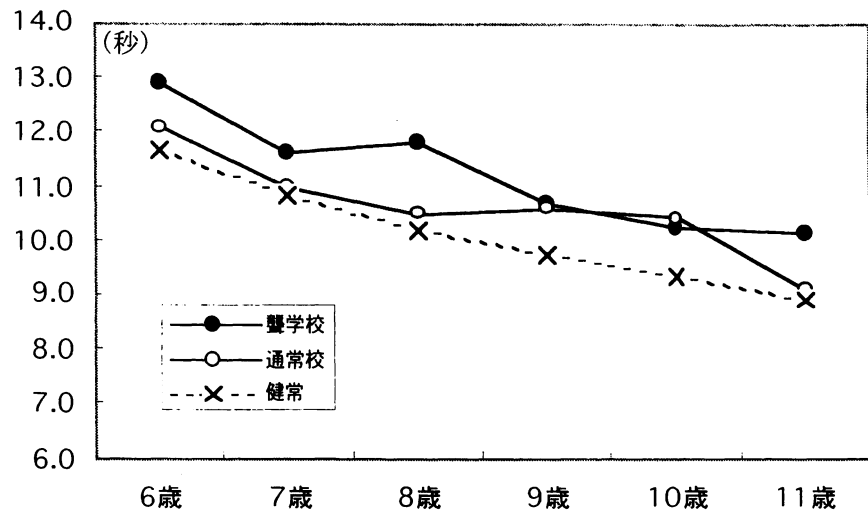


図9 加齢に伴う50m走の変化 (小学校男子)

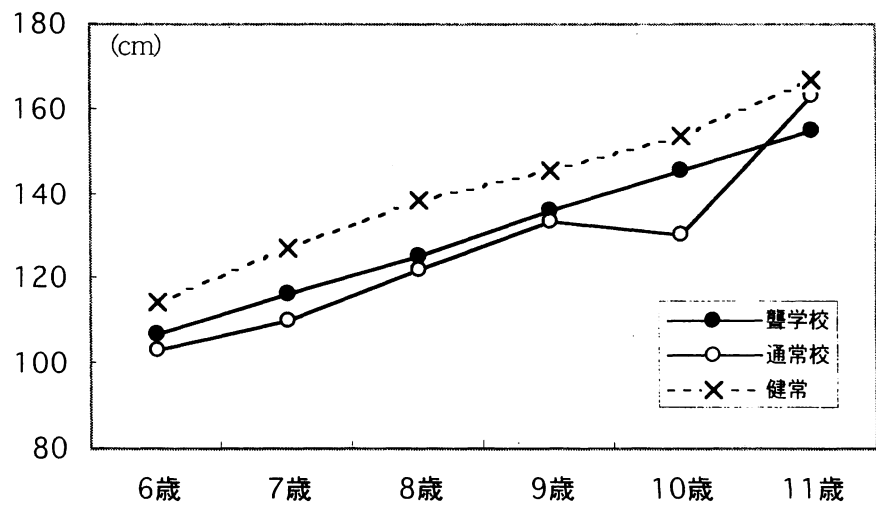


図10 加齢に伴う立ち幅とびの変化 (小学校男子)

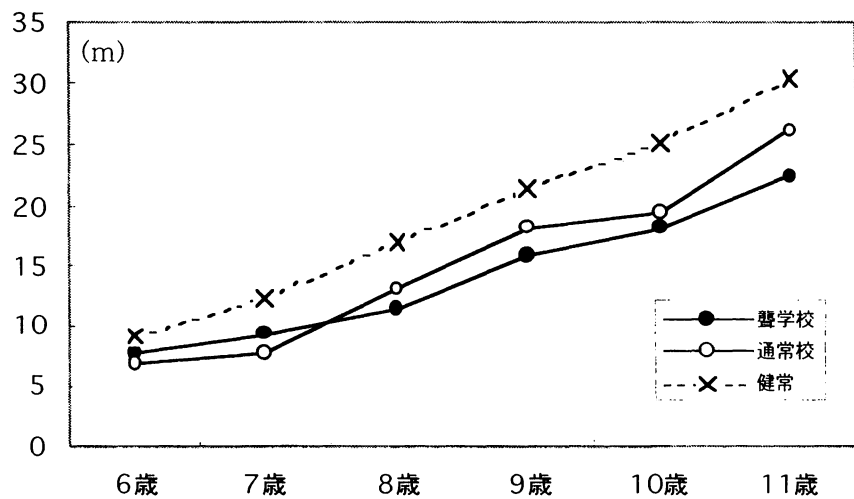


図11 加齢に伴うソフトボール投げの変化 (小学校男子)

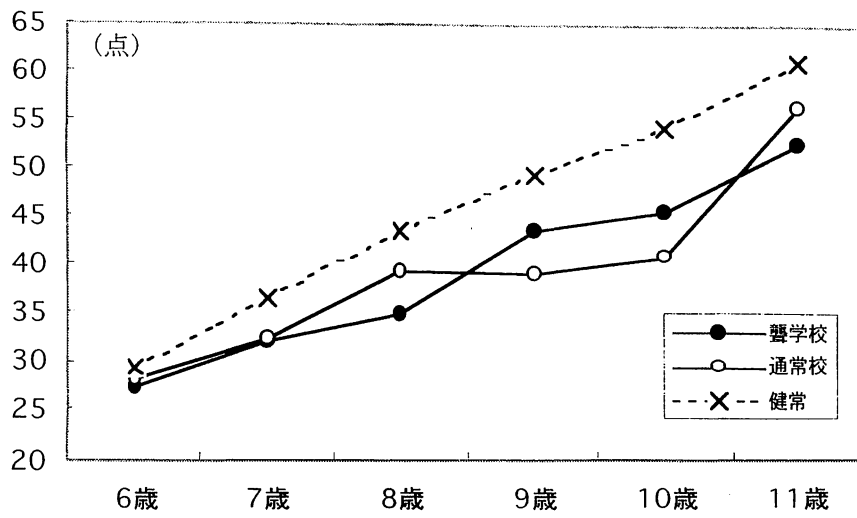


図12 加齢に伴う新体力テスト合計点の変化 (小学校男子)

表9に女子の成績を示す。

表9 聾学校群と通常校群の体格・体力の年齢別平均値・標準偏差と有意差検定結果（女子）

項目	年齢	聾学校群			通常校群			有意差 検定結果
		\bar{X}	SD	N	\bar{X}	SD	N	
身長 (cm)	6歳	116.00	5.36	64	110.26	3.24	5	*
	7歳	120.50	8.55	63	126.14	5.39	7	NS
	8歳	126.57	7.69	55	125.29	8.13	20	NS
	9歳	130.66	6.24	64	133.32	7.52	22	NS
	10歳	139.16	8.99	89	137.79	8.17	20	NS
	11歳	145.92	8.24	65	149.85	5.94	19	NS
体重 (kg)	6歳	21.02	4.13	64	18.86	4.08	5	NS
	7歳	23.55	5.30	63	25.54	2.68	7	NS
	8歳	26.64	5.96	55	27.24	7.00	20	NS
	9歳	27.81	6.11	64	30.51	8.25	22	NS
	10歳	34.62	9.63	89	33.55	8.44	20	NS
	11歳	40.29	8.80	65	41.74	6.66	19	NS
聴力 (dBHL)	6歳	98.36	18.04	56	84.00	20.05	5	*
	7歳	100.63	19.06	57	82.03	18.72	9	*
	8歳	96.59	18.06	49	86.28	18.66	20	*
	9歳	99.80	15.29	58	81.48	21.75	22	*
	10歳	96.92	18.04	83	83.77	18.87	20	*
	11歳	101.00	17.04	62	85.11	19.10	21	*
握力 (kg)	6歳	8.19	2.76	51	7.25	2.06	4	NS
	7歳	9.48	3.28	46	10.83	2.14	6	NS
	8歳	10.18	3.97	47	9.90	3.00	10	NS
	9歳	11.91	4.09	47	11.90	3.51	10	NS
	10歳	14.06	4.46	77	16.00	4.53	20	NS
	11歳	17.14	4.89	56	20.02	4.18	21	*
上体起こし (回)	6歳	9.00	5.53	51	9.00	1.73	3	NS
	7歳	10.47	6.34	45	14.00	5.29	7	NS
	8歳	12.52	5.72	44	12.70	6.20	10	NS
	9歳	13.94	6.46	46	16.22	5.02	9	NS
	10歳	15.66	6.29	73	16.00	5.18	20	NS
	11歳	15.55	6.03	49	20.21	9.27	19	*

項目	年齢	聾学校群			通常校群			有意差 検定結果
		\bar{X}	SD	N	\bar{X}	SD	N	
長座体前屈 (cm)	6歳	27.67	9.45	51	23.50	5.45	4	NS
	7歳	27.66	7.31	44	24.71	8.85	7	NS
	8歳	31.50	9.52	44	30.10	5.70	10	NS
	9歳	29.06	8.86	48	30.07	13.08	14	NS
	10歳	32.36	9.26	75	32.19	5.89	21	NS
	11歳	36.15	10.27	55	36.75	12.46	20	NS
反復横とび (点)	6歳	23.17	6.56	52	19.67	3.79	3	NS
	7歳	23.80	8.23	44	25.00	5.93	6	NS
	8歳	28.21	6.84	48	26.33	12.42	9	NS
	9歳	31.35	7.31	51	31.15	7.36	13	NS
	10歳	32.71	6.37	72	34.00	7.53	20	NS
	11歳	34.50	8.36	50	41.58	6.37	19	*
20m シャトルラン (回)	6歳	9.93	4.36	29	10.33	7.02	3	NS
	7歳	15.20	10.28	25	14.33	4.23	6	NS
	8歳	14.70	8.80	23	24.44	14.56	9	NS
	9歳	22.64	12.84	28	29.00	15.28	9	NS
	10歳	20.25	9.79	40	36.90	15.17	20	*
	11歳	26.89	15.47	26	46.39	16.14	18	*
50m 走 (秒)	6歳	13.24	2.02	60	14.10	3.50	5	NS
	7歳	12.71	3.87	58	11.86	1.94	7	NS
	8歳	12.41	5.68	49	11.46	1.19	15	NS
	9歳	11.39	2.31	60	10.45	1.42	17	*
	10歳	10.71	1.63	85	9.92	0.82	21	*
	11歳	10.43	2.32	59	8.96	0.43	21	*
立ち幅とび (cm)	6歳	98.33	24.11	55	77.80	43.95	5	NS
	7歳	107.92	30.59	52	116.63	11.19	8	NS
	8歳	118.45	26.47	51	118.57	24.95	14	NS
	9歳	116.98	29.11	53	136.33	22.32	12	NS
	10歳	131.69	24.43	74	139.20	16.57	20	NS
	11歳	148.85	32.78	58	153.74	22.90	19	NS

項 目	年 齢	聾 学 校 群			通 常 校 群			有意差 検定結果
		\bar{X}	SD	N	\bar{X}	SD	N	
ソフトボール投げ (m)	6 歳	5.46	1.92	52	4.50	1.73	4	NS
	7 歳	6.80	3.70	46	6.86	2.67	7	NS
	8 歳	8.06	2.94	50	8.36	2.59	14	NS
	9 歳	9.65	3.90	51	11.82	4.12	11	NS
	10 歳	13.53	6.49	75	12.20	3.89	20	NS
	11 歳	15.70	6.31	54	18.68	6.24	19	NS
合計点 (点)	6 歳	26.30	7.60	30	21.33	2.31	3	NS
	7 歳	31.43	10.95	21	34.17	6.15	6	NS
	8 歳	34.17	10.81	23	40.38	9.36	8	NS
	9 歳	40.04	11.14	25	48.89	9.44	9	NS
	10 歳	44.08	10.51	38	49.94	7.38	18	NS
	11 歳	51.79	12.79	24	62.41	7.18	17	*

* $p < 0.05$

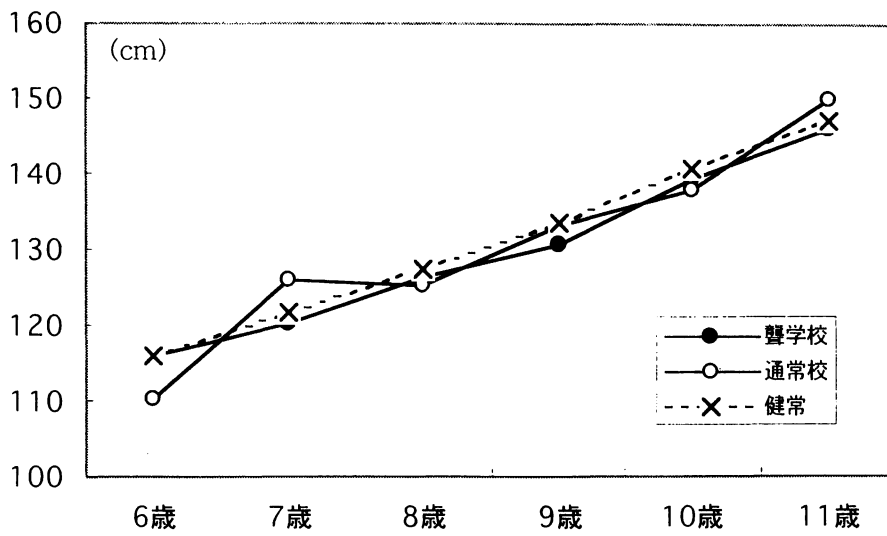


図13 加齢に伴う身長の変化 (小学校女子)

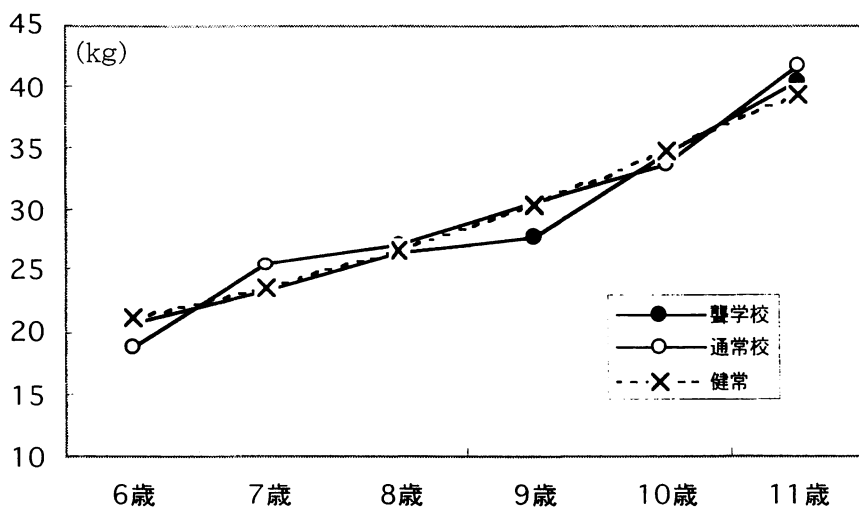


図14 加齢に伴う体重の変化 (小学校女子)

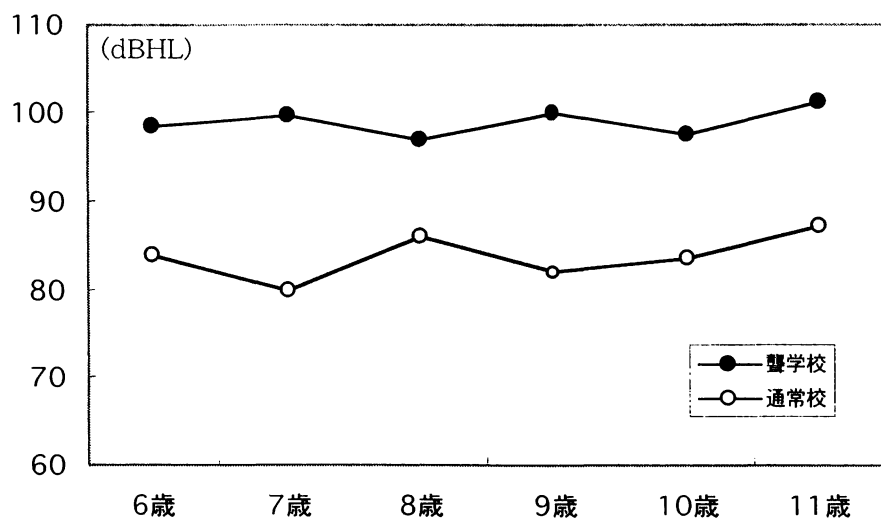


図15 加齢に伴う聴力の変化 (小学校女子)

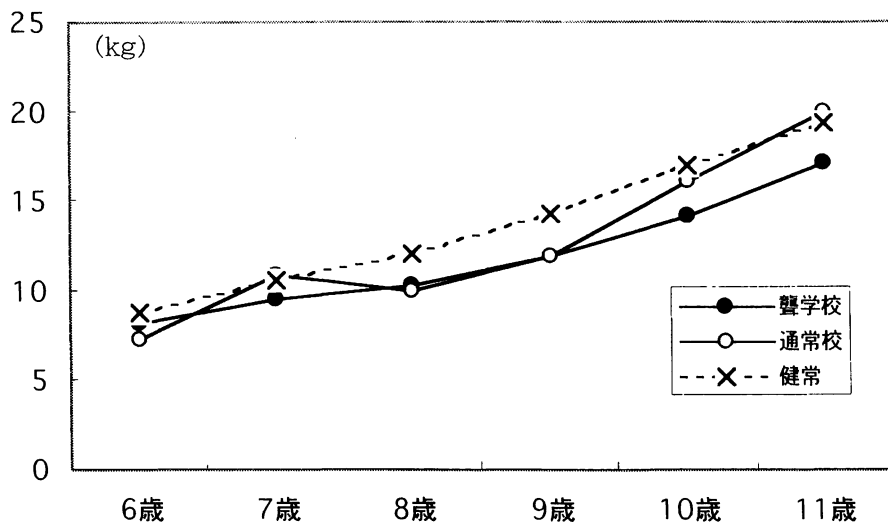


図16 加齢に伴う握力の変化 (小学校女子)

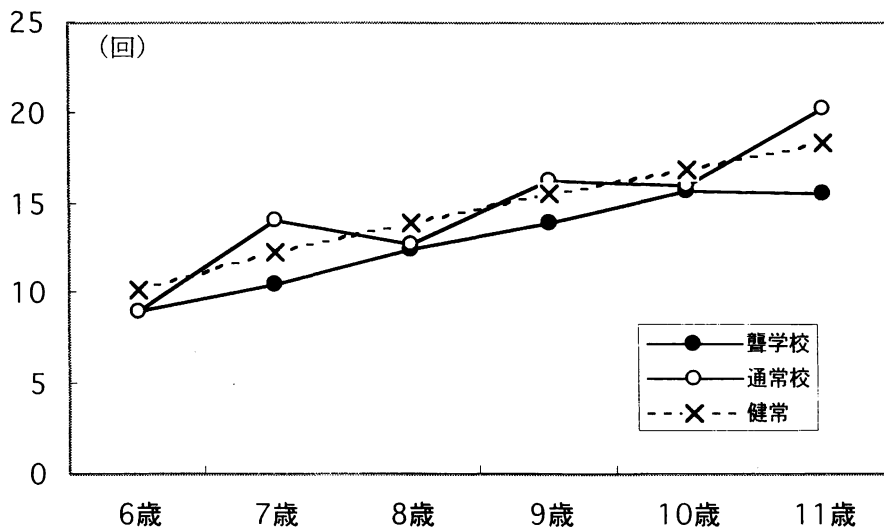


図17 加齢に伴う上体起こしの変化 (小学校女子)

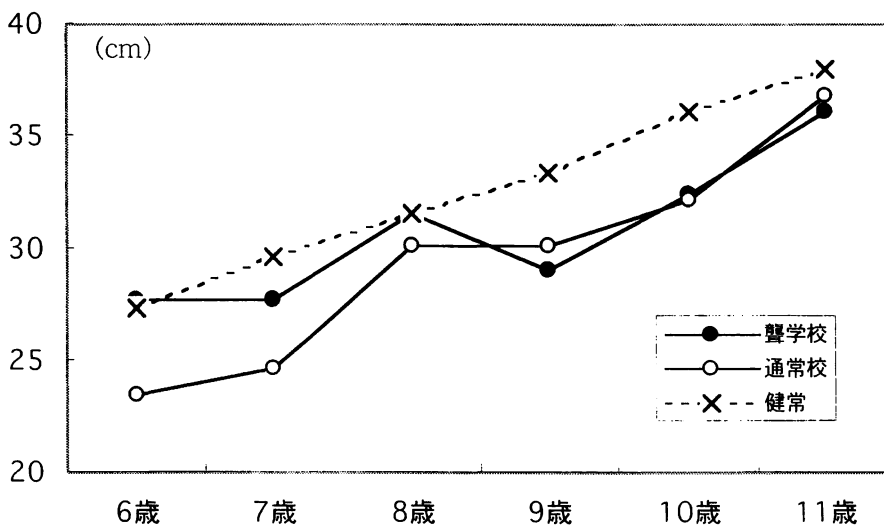


図18 加齢に伴う長座体前屈の変化 (小学校女子)

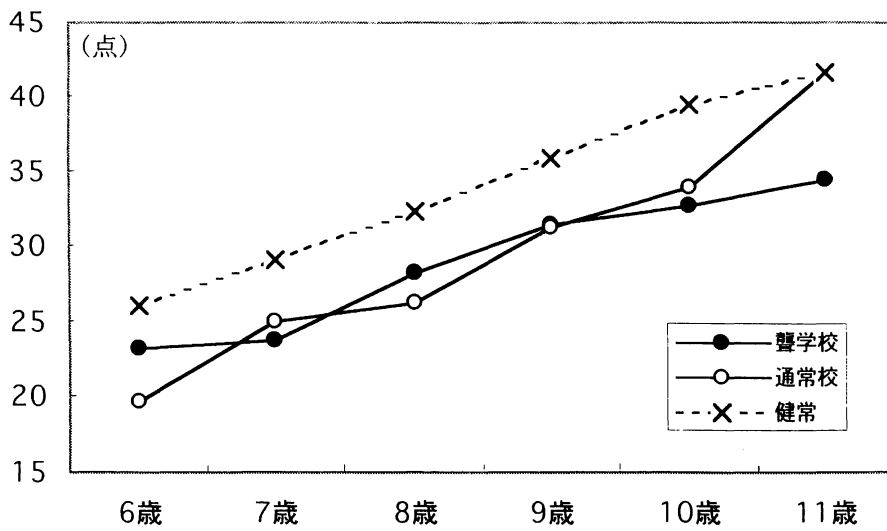


図19 加齢に伴う反復横とびの変化 (小学校女子)

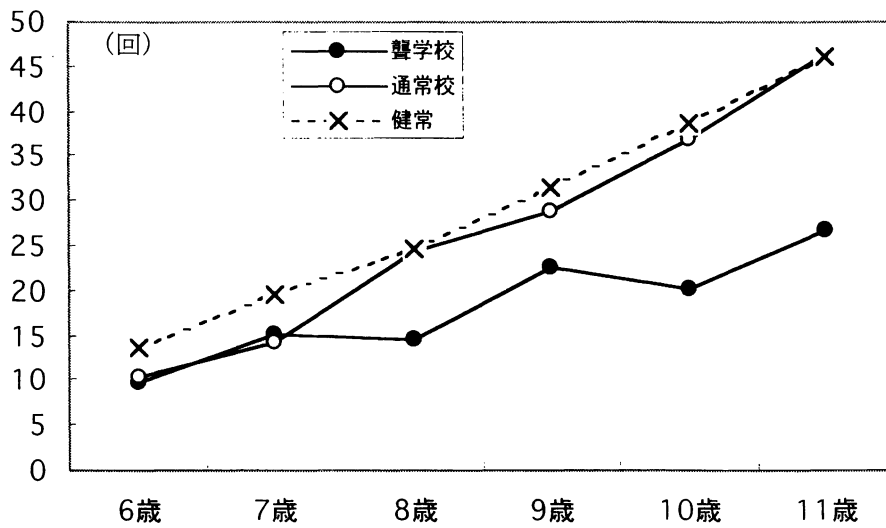


図20 加齢に伴う20mシャトルランの変化 (小学校女子)

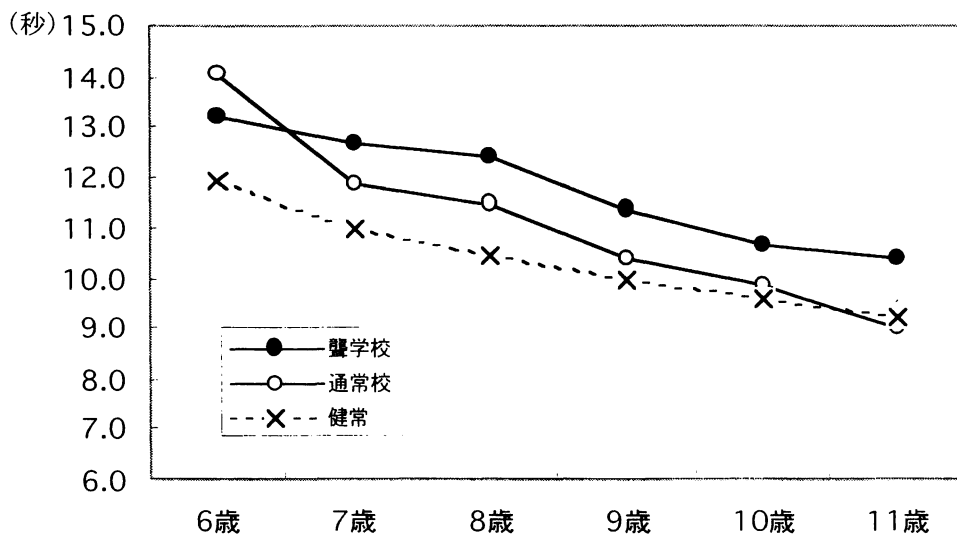


図21 加齢に伴う50m走の変化 (小学校女子)

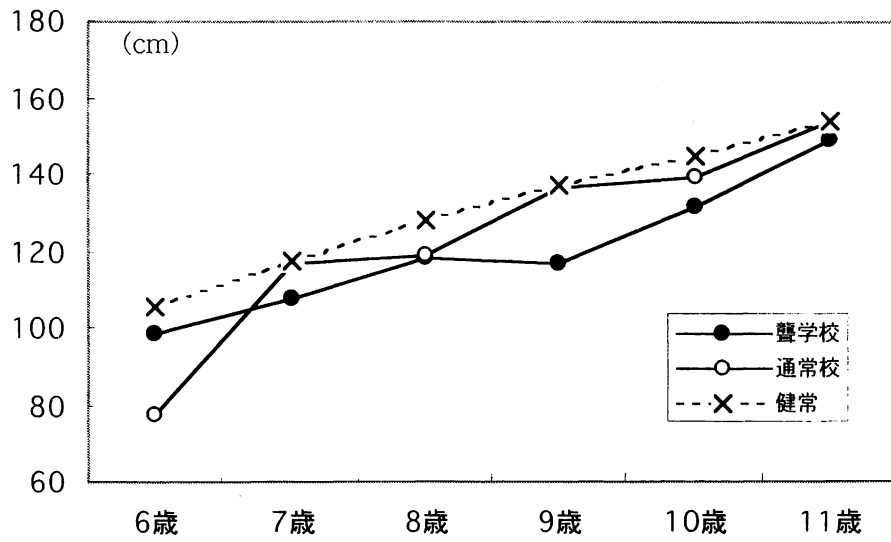


図 22 加齢に伴う立ち幅とびの変化 (小学校女子)

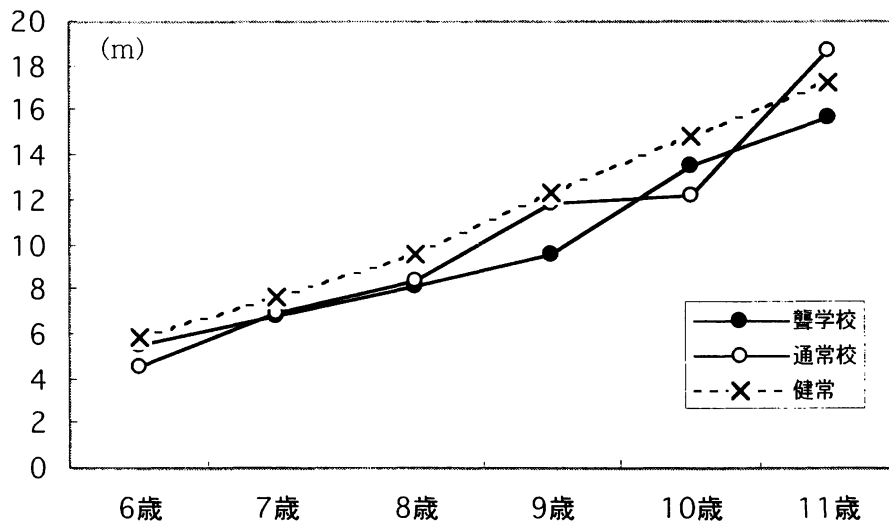


図 23 加齢に伴うソフトボール投げの変化 (小学校女子)

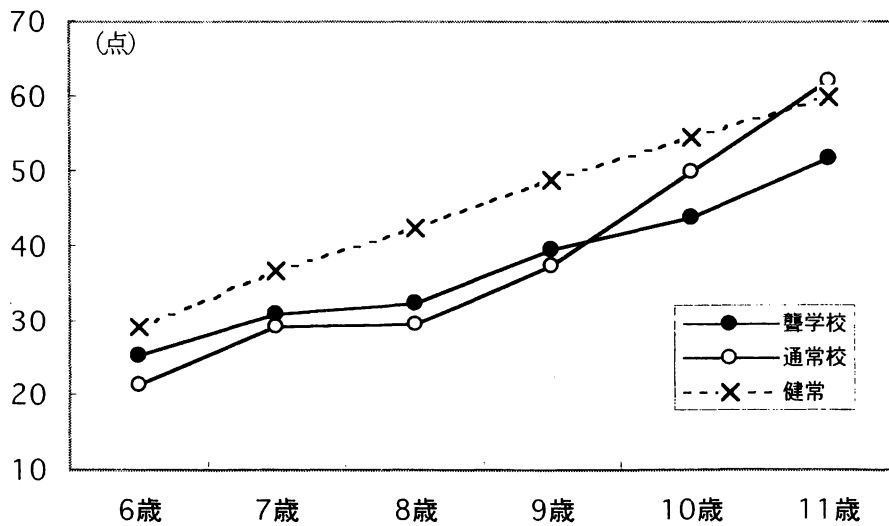


図 24 加齢に伴う新体カテスト合計点の変化 (小学校女子)

全体を把握するため、有意差検定結果の一覧表を表10に示す。表10によると、身長、体重、聴力を除いて小学校高学年で有意差が生じる項目が多く、そのいずれにおいても通常校群が聾学校群を上回っていた。

表10 有意差検定結果一覧表

年齢(歳)	性別	身長 (cm)	体重 (kg)	聴力 (dBHL)	握力 (kg)	上体起こし (回)	長座体前屈 (cm)	反復横とび (回)	20mシャトルラン (回)	50m走 (秒)	立ち幅とび (cm)	ソフトボール投げ (m)	合計点(点)
6歳	男子	*	†	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS
	女子	†	NS	*	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS
7歳	男子	NS	NS	*	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS
	女子	NS	NS	*	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS
8歳	男子	NS	NS	*	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS
	女子	NS	NS	*	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS
9歳	男子	NS	NS	*	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS
	女子	NS	NS	*	NS	NS	NS	NS	NS	*	NS	NS	NS
10歳	男子	NS	NS	*	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS
	女子	NS	NS	*	NS	NS	NS	NS	*	*	NS	NS	NS
11歳	男子	NS	NS	*	*	NS	NS	*	NS	*	NS	*	NS
	女子	NS	NS	*	*	*	NS	*	*	*	NS	NS	*

*p<0.05 通常校群が聾学校群を上回る。

†p<0.05 聾学校群が通常校群を上回る。

一方、体育の年間授業時間数（表11）では3年（8歳）（ $p < 0.05$ ）、5年（10歳）（ $p < 0.05$ ）及び6年（11歳）（ $p < 0.05$ ）において、聾学校より通常校が有意に多く、また、運動部・クラブの加入割合（表12）も男子9歳 { χ^2 (df=1) = 5.05, $p < 0.05$ }、11歳 { χ^2 (df=1) = 3.96, $p < 0.05$ }、女子10歳 { χ^2 (df=1) = 6.20, $p < 0.05$ }、11歳 { χ^2 (df=1) = 4.06, $p < 0.05$ } において、いずれも男女共に聾学校より通常校が高かった。

主に高学年で有意差が生じた原因として、年間授業時間数及び運動部・クラブの加入割合の違いが考えられる。また、年間授業時間数が少ない理由としては、聾学校では通常の学校にはない科目として、個々の児童が自立を目指し、障害に基づく種々の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養うための科目として、「自立活動」の時間が設けられているために、体育の時間数が縮小されているのではないかということが考えられる。しかしながら、学習指導要領（1999）によって、小学部又は中学部の各学年の自立活動に充てる授業時数は、児童又は生徒の障害の状態に応じて、適切に定めるものとしてされていることから、学校によって自立活動の時間数が異なり、この差が体育の時間数に影響した可能性がある。

また、聾学校において運動部・クラブの加入割合が低い理由としては、大都市周辺を除いて通常、聾学校は各県に1、2校しかなく、当然通学時間が長くなるため、放課後に運動やスポーツをする時間が取りにくいこと、また居住している地域に帰っても、地域には遊び仲間がいないことやコミュニケーションの難しさなどから、さまざまな運動やスポーツのためのクラブに参加しにくいことが推察される。

表11 体育の授業時間数の比較

学年	学校種別	対象学校数	平均時間数	標準偏差	有意差検定
1年	聾学校	14	84.3	16.9	NS
	通常校	11	88.9	7.7	
2年	聾学校	44	85.6	16.5	NS
	通常校	16	85.5	10.9	
3年	聾学校	49	84.0	18.7	*
	通常校	36	91.4	7.5	
4年	聾学校	45	84.3	16.8	NS
	通常校	34	90.2	7.7	
5年	聾学校	48	83.4	13.8	*
	通常校	33	89.0	9.1	
6年	聾学校	47	82.9	13.6	*
	通常校	45	87.7	13.4	

表 12 小学校段階における運動実施状況（男子）

年齢	学校 種別	クラブ加入状況		運 動 の 程 度				運 動 時 間			
		加入	非加入	ほとんど毎日	ときどき	ときたま	しない	30分未満	30~1未満	1以上2未満	2時間以上
6 歳	聾学校	22 (31.0)	49 (69.0)	21 (30.4)	12 (17.4)	14 (20.3)	22 (31.9)	24 (51.1)	14 (29.8)	7 (14.9)	2 (4.3)
	通常校	1 (50.0)	1 (50.0)	1 (50.0)	1 (50.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (50.0)	0 (50.0)	1 (0.0)	0 (0.0)
7 歳	聾学校	22 (39.3)	34 (60.7)	12 (19.0)	31 (49.2)	8 (12.7)	12 (19.0)	12 (24.5)	19 (38.8)	13 (26.5)	5 (10.2)
	通常校	1 (12.5)	7 (87.5)	2 (25.0)	2 (25.0)	1 (12.5)	3 (37.5)	1 (20.0)	2 (40.0)	2 (40.0)	0 (0.0)
8 歳	聾学校	20 (26.7)	55 (73.3)	22 (28.6)	27 (35.1)	15 (19.5)	13 (16.9)	17 (26.6)	25 (39.1)	16 (25.0)	6 (9.4)
	通常校	7 (43.8)	9 (56.2)	9 (50.0)	5 (27.8)	2 (11.1)	2 (11.1)	4 (25.0)	8 (50.0)	2 (12.5)	2 (12.5)
9 歳	聾学校	26 (30.6)	59 (69.4)	22 (24.4)	38 (42.2)	15 (16.7)	15 (16.7)	23 (31.5)	30 (41.1)	13 (17.8)	7 (9.6)
	通常校	15 (55.6)	12 (44.4)	10 (34.5)	14 (48.3)	3 (10.3)	2 (6.9)	5 (18.5)	6 (22.2)	11 (40.7)	5 (18.5)
10 歳	聾学校	51 (45.9)	60 (54.1)	35 (31.5)	38 (34.2)	19 (17.1)	19 (17.1)	22 (23.9)	37 (40.2)	22 (23.9)	11 (12.0)
	通常校	5 (35.7)	9 (64.3)	2 (14.3)	6 (42.9)	2 (14.3)	4 (28.6)	2 (20.0)	4 (40.0)	3 (30.0)	1 (10.0)
11 歳	聾学校	36 (25.5)	71 (74.5)	44 (39.6)	28 (25.2)	8 (7.2)	31 (27.9)	23 (28.8)	34 (42.5)	17 (21.3)	6 (7.5)
	通常校	17 (53.1)	15 (46.9)	10 (32.3)	16 (51.6)	3 (9.7)	2 (6.5)	5 (17.2)	8 (27.6)	9 (31.0)	7 (24.1)

上段：標本数、下段：（割合）

表 13 小学校段階における運動実施状況（女子）

年齢	学校 種別	クラブ加入状況		運 動 の 程 度				運 動 時 間			
		加入	非加入	ほとんど毎日	ときどき	ときたま	しない	30分未満	30~1未満	1以上2未満	2時間以上
6 歳	聾学校	13 (23.2)	43 (76.8)	9 (16.4)	19 (34.5)	12 (21.8)	15 (27.3)	24 (60.0)	10 (25.0)	6 (15.0)	0 (0.0)
	通常校	0 (0.0)	6 (100.0)	1 (16.7)	0 (0.0)	2 (33.3)	3 (50.0)	2 (66.7)	1 (33.3)	0 (0.0)	0 (0.0)
7 歳	聾学校	8 (15.1)	45 (84.9)	13 (21.7)	24 (40.0)	7 (11.7)	16 (26.7)	14 (31.1)	19 (42.2)	11 (24.4)	1 (2.2)
	通常校	3 (37.5)	5 (62.5)	2 (22.2)	2 (22.2)	2 (22.2)	3 (33.3)	3 (50.0)	2 (33.3)	1 (16.7)	0 (0.0)
8 歳	聾学校	15 (27.3)	40 (72.7)	16 (30.8)	12 (23.1)	14 (26.9)	10 (19.2)	19 (45.2)	15 (35.7)	7 (16.7)	1 (2.4)
	通常校	8 (42.1)	11 (57.9)	4 (19.0)	10 (47.6)	1 (4.8)	6 (28.6)	4 (26.7)	9 (60.0)	2 (13.3)	0 (0.0)
9 歳	聾学校	18 (32.1)	38 (67.9)	12 (20.7)	20 (34.5)	9 (15.5)	17 (29.3)	16 (39.0)	18 (43.9)	7 (17.1)	0 (0.0)
	通常校	6 (31.6)	13 (68.4)	6 (30.0)	4 (20.0)	4 (20.0)	6 (30.0)	4 (26.7)	8 (53.3)	2 (13.3)	1 (6.7)
10 歳	聾学校	26 (31.7)	56 (68.3)	17 (20.2)	25 (29.8)	10 (11.9)	32 (38.1)	18 (36.0)	18 (36.0)	10 (20.0)	4 (8.0)
	通常校	13 (65.0)	7 (35.0)	9 (42.9)	6 (28.6)	1 (4.8)	5 (23.8)	1 (6.3)	5 (31.3)	6 (37.5)	4 (25.0)
11 歳	聾学校	14 (25.5)	41 (74.5)	22 (36.7)	22 (36.7)	4 (6.7)	12 (20.0)	22 (45.8)	18 (37.5)	7 (14.6)	1 (2.1)
	通常校	10 (50.0)	10 (50.0)	5 (25.0)	7 (35.0)	3 (15.0)	5 (25.0)	3 (18.8)	4 (25.0)	6 (37.5)	3 (18.8)

上段：標本数、下段：（割合）

【参考文献】

盲学校、聾学校及び養護学校幼稚部教育要領小学部・中学部学習指導要領高等部学習指導要領（1999）独立行政法人国立印刷局。

及川 力・齊藤まゆみ・稲垣 敦（2003）：聴覚障害学生の体力・運動能力と出身学校の関係。第24回医療体育研究会/アジア障害者体育スポーツ学会日本支部会第5回合同大会プログラム・抄録集、44。

第3章 通常の中学校に在籍する聴覚障害生徒と聾学校中学部に在籍する聴覚障害生徒の体格、体力・運動能力

I. 目的

平成15年度に実施した全国の聾学校小学部及び難聴学級を設置している通常の小学校への調査では、身長、体重、聴力を除いて小学校高学年で有意差が生じる項目が多く、そのいずれにおいても通常校群が聾学校群を上回っているという結果を得た。

そこで平成16年度には、中学部段階の聴覚障害生徒の形態、体力、運動能力の実態を明らかにする目的で、以下の調査を実施した。

II. 対象及び方法

1 対象

調査対象者は全国の聾学校中学部または通常の中学校に在籍している、聴覚障害以外に他の障害を併せ持たない聴覚障害生徒とした。対象となった生徒総数は、聾学校男子290名、同女子199名、通常校男子36名、同女子43名であった。

表14 調査対象生徒数

	男 子		女 子	
	聾学校	通常校	聾学校	通常校
12 歳	83	4	50	11
13 歳	104	16	74	14
14 歳	103	16	75	18
合 計	290	36	199	43

2 研究方法と統計処理

平成16年度の夏（9月～12月）に、全国の聾学校中学部90校及び難聴学級を設置している通常の中学校191校に調査票を送り、在籍している聴覚障害児の形態（身長、体重）、聴力（良耳平均聴力レベル）、体力（握力、上体起こし、長座体前屈、反復横とび、20mシャトルランまたは持久走）、運動能力（50m走、立ち幅とび、ハンドボール投げ）、運動実施状況及び各学校における体育の年間授業時間数について回答を求めた。

対象者を聾学校に在籍する聴覚障害生徒（以下、聾学校群）と通常校に在籍する聴覚障害生徒（以下、通常校群）に分け、Mann-WhitonyのUテストによって、性別、年齢別、調査項目別に平均値の群間の差異を検討した。なお、有意水準は5%未満とした。

3 結果

表15に男子の成績を示す。

表 15 聾学校群と通常校群の体格・体力の年齢別平均値・標準偏差と有意差検定結果（男子）

項目	年齢	聾学校群			通常校群			有意差 検定結果
		\bar{X}	SD	N	\bar{X}	SD	N	
身長 (cm)	12 歳	151.13	9.71	82	146.08	16.72	4	NS
	13 歳	158.65	8.01	104	156.00	7.65	16	NS
	14 歳	162.87	8.42	103	162.85	6.08	14	NS
体重 (kg)	12 歳	43.46	9.81	82	39.60	11.13	4	NS
	13 歳	50.98	11.32	104	45.59	9.33	16	NS
	14 歳	53.80	12.27	103	53.45	8.82	14	NS
聴力 (dBHL)	12 歳	98.07	12.32	81	91.45	8.41	4	NS
	13 歳	98.89	15.36	100	88.02	12.98	14	*
	14 歳	95.54	19.42	100	85.23	19.75	13	NS
握力 (kg)	12 歳	21.98	7.56	81	21.00	8.29	4	NS
	13 歳	27.73	8.02	100	27.50	7.74	16	NS
	14 歳	31.84	8.86	101	31.13	7.65	15	NS
上体起こし (回)	12 歳	20.90	6.10	78	16.75	4.57	4	NS
	13 歳	23.05	6.63	99	24.50	4.99	16	NS
	14 歳	25.31	7.39	88	25.80	7.32	15	NS
長座体前屈 (cm)	12 歳	37.25	7.76	79	33.50	13.08	4	NS
	13 歳	37.92	9.18	97	36.75	10.04	16	NS
	14 歳	39.94	10.73	89	44.33	11.27	15	NS
反復横とび (点)	12 歳	40.10	8.35	82	41.75	6.02	4	NS
	13 歳	44.93	8.96	98	43.38	5.67	16	NS
	14 歳	45.79	10.29	100	43.60	13.03	15	NS
20m シャトルラン (回)	12 歳	42.04	18.42	26	33.00	16.82	3	NS
	13 歳	47.74	23.57	34	74.57	20.96	7	*
	14 歳	73.13	25.34	24	69.75	13.00	4	NS
持久走 (秒)	12 歳	513.58	134.45	45	440.00	0.00	1	NS
	13 歳	455.94	110.83	54	379.75	52.86	8	*
	14 歳	430.36	99.04	64	408.89	110.55	9	NS
50m 走 (秒)	12 歳	9.75	2.34	79	10.23	2.09	4	NS
	13 歳	9.08	2.22	96	8.81	3.08	16	NS
	14 歳	8.36	1.43	95	8.17	1.27	14	NS

項目	年齢	聾学校群			通常校群			有意差 検定結果
		\bar{X}	SD	N	\bar{X}	SD	N	
立ち幅とび (cm)	12歳	163.41	32.27	79	154.50	32.73	4	NS
	13歳	177.31	41.00	97	181.75	34.28	16	NS
	14歳	193.81	31.42	91	199.57	34.03	14	NS
ハンドボール投げ (m)	12歳	14.38	4.91	72	16.50	2.38	4	NS
	13歳	16.61	5.75	95	18.33	4.89	15	NS
	14歳	19.98	6.53	86	20.40	8.58	15	NS
合計点 (点)	12歳	26.38	8.37	63	23.00	11.17	4	NS
	13歳	31.95	10.63	81	36.71	9.97	14	NS
	14歳	38.70	13.57	75	42.25	14.22	12	NS

* $p < 0.05$

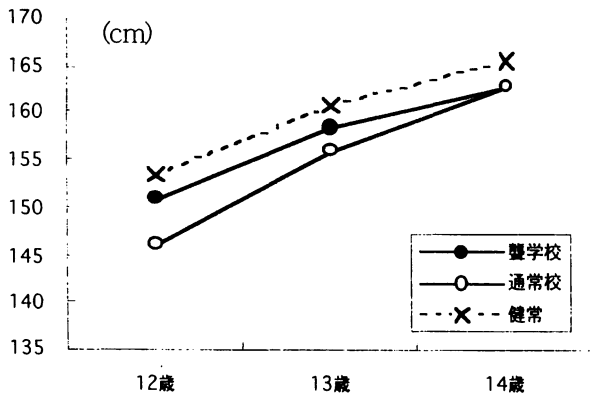


図25 加齢に伴う身長の変化 (中学校男子)

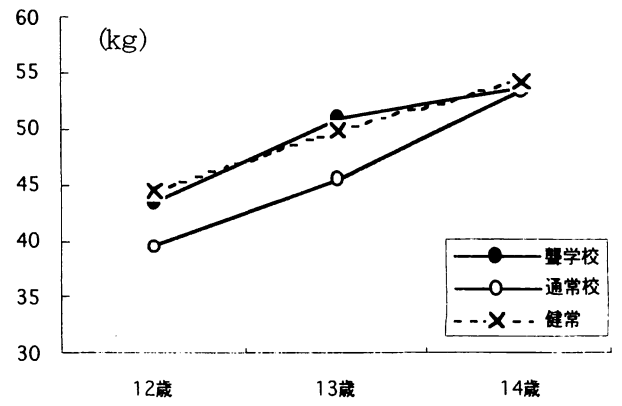


図26 加齢に伴う体重の変化 (中学校男子)

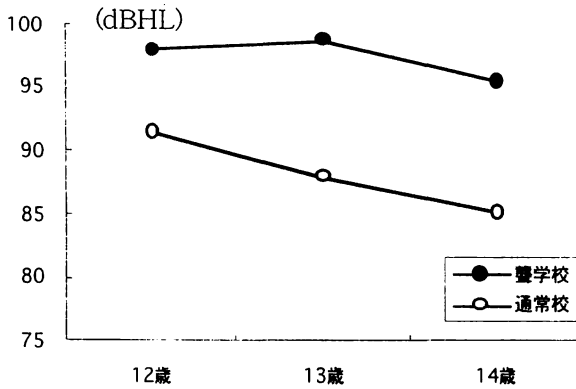


図27 加齢に伴う聴力の変化 (中学校男子)

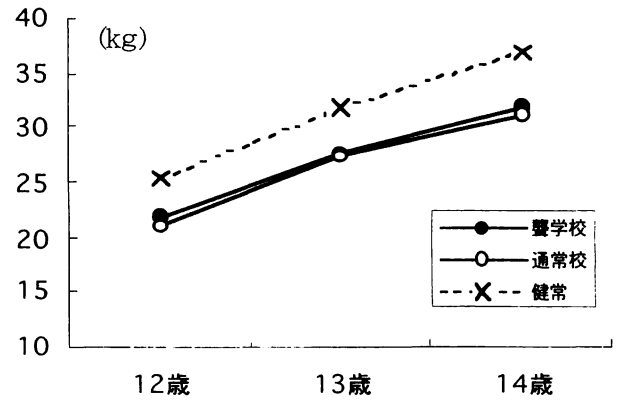


図28 加齢に伴う握力の変化 (中学校男子)

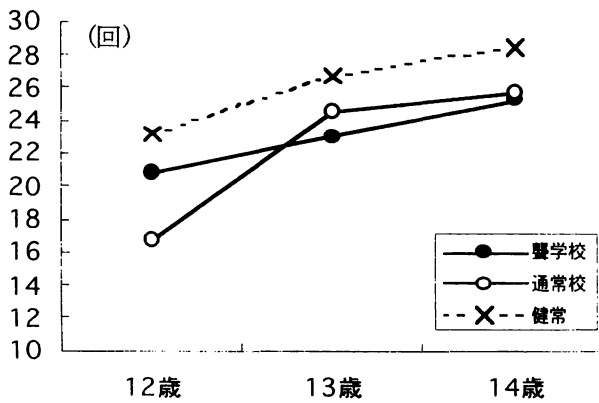


図29 加齢に伴う上体起こしの変化 (中学校男子)

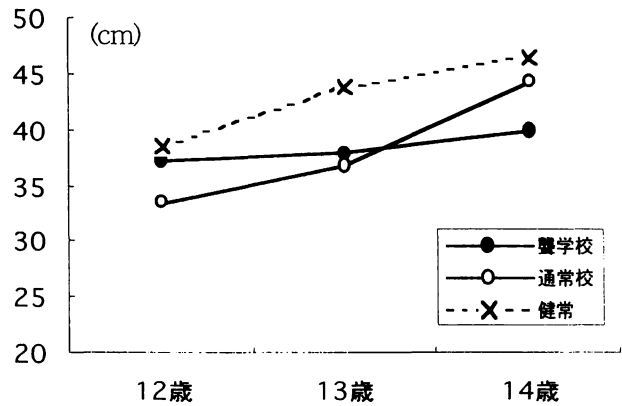


図30 加齢に伴う長座体前屈の変化 (中学校男子)

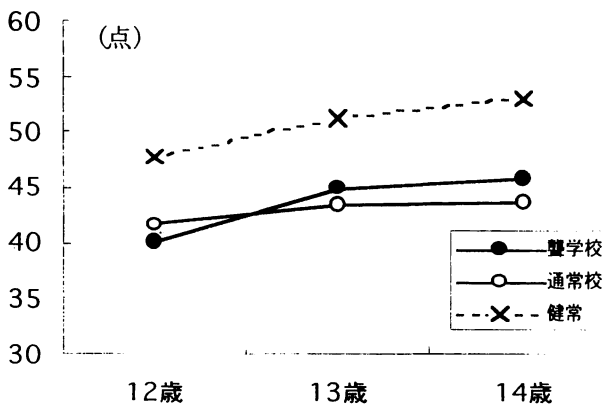


図31 加齢に伴う反復横とびの変化 (中学校男子)

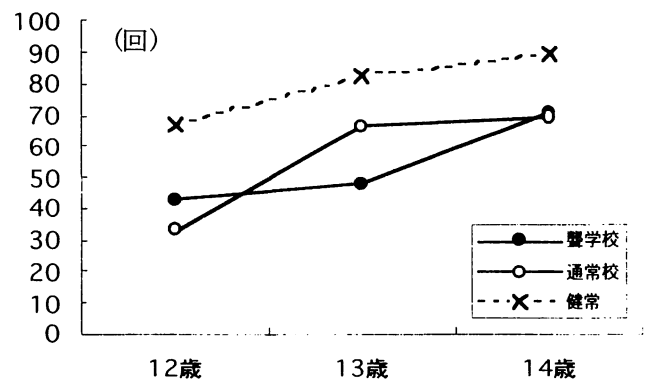


図32 加齢に伴う20mシャトルランの変化 (中学校男子)

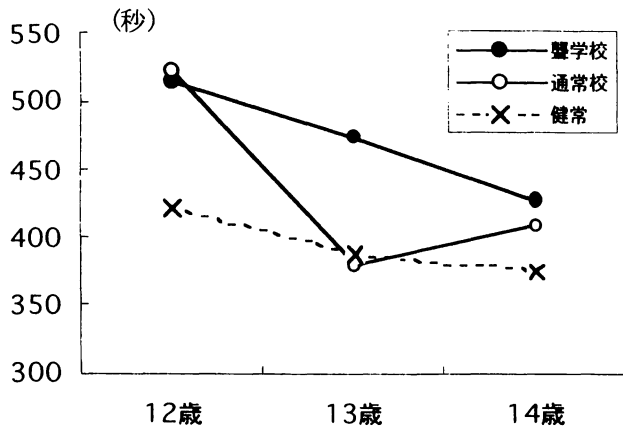


図33 加齢に伴う持久走の変化 (中学校男子)

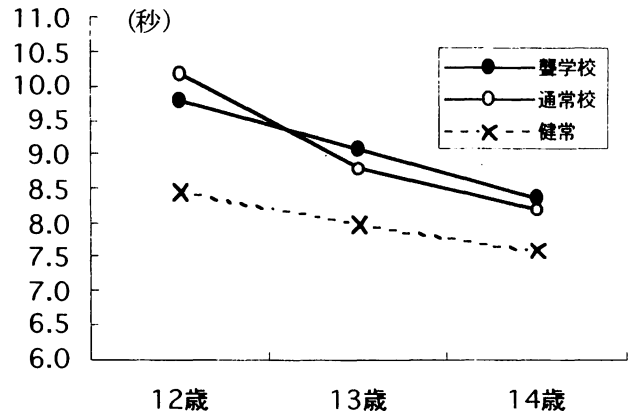


図34 加齢に伴う50m走の変化 (中学校男子)

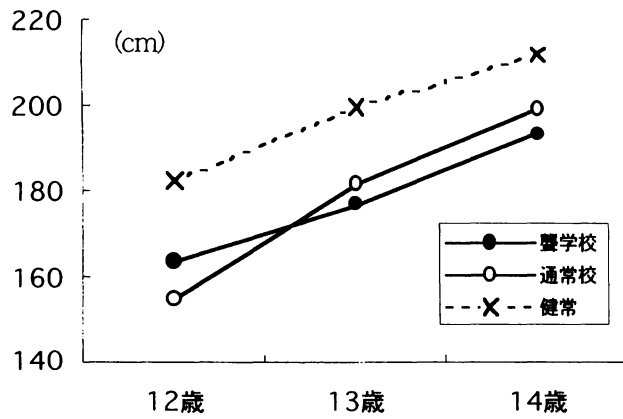


図35 加齢に伴う立ち幅とびの変化 (中学校男子)

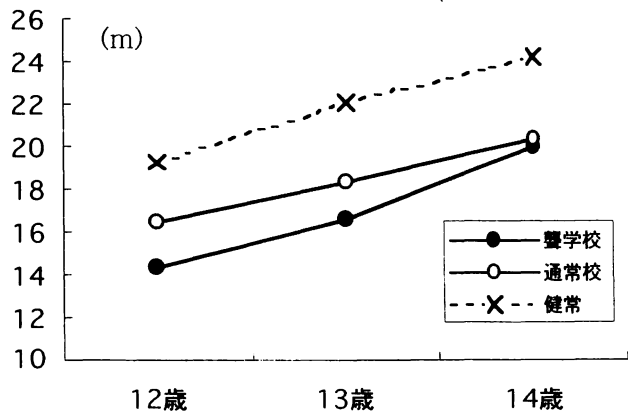


図36 加齢に伴うハンドボール投げの変化 (中学校男子)

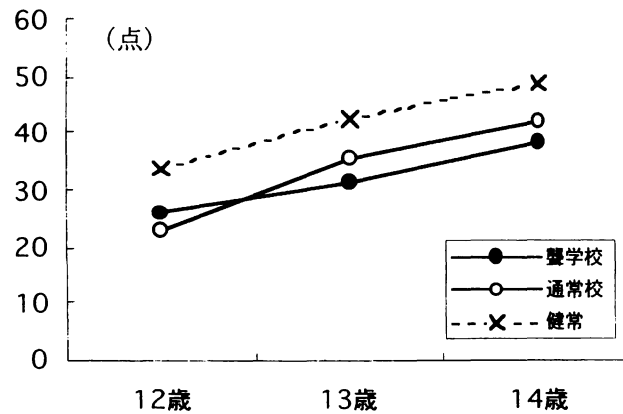


図37 加齢に伴う新体カテスト合計点の変化 (中学校男子)

表16に女子の成績を示す。

表16 聾学校群と通常校群の体格・体力の年齢別平均値・標準偏差と有意差検定結果（女子）

項目	年齢	聾学校群			通常校群			有意差 検定結果
		\bar{X}	SD	N	\bar{X}	SD	N	
身長 (cm)	12歳	148.44	7.13	50	152.77	4.59	10	NS
	13歳	151.77	8.35	74	153.63	3.98	14	NS
	14歳	155.60	7.91	74	158.58	5.96	18	NS
体重 (kg)	12歳	42.29	8.10	50	50.01	14.21	10	NS
	13歳	46.45	9.61	74	42.75	5.28	13	NS
	14歳	52.56	12.91	73	52.70	9.73	18	NS
聴力 (dBHL)	12歳	96.06	19.69	47	88.22	19.21	9	NS
	13歳	99.02	16.39	72	87.27	17.18	13	*
	14歳	100.35	19.25	73	83.50	17.24	16	*
握力 (kg)	12歳	18.76	5.24	45	21.60	2.84	10	NS
	13歳	20.80	6.87	73	24.21	3.98	14	NS
	14歳	24.90	6.52	72	27.78	5.41	18	NS
上体起こし (回)	12歳	16.33	5.78	40	18.70	4.76	10	NS
	13歳	19.87	5.90	70	20.46	4.67	13	NS
	14歳	21.14	6.12	65	21.61	3.74	18	NS
長座体前屈 (cm)	12歳	37.59	10.09	44	40.80	15.10	10	NS
	13歳	37.51	11.25	70	43.21	10.84	14	NS
	14歳	40.92	10.97	63	48.88	6.98	17	*
反復横とび (点)	12歳	34.31	8.71	42	41.20	8.44	10	NS
	13歳	37.79	8.47	72	38.85	6.27	13	NS
	14歳	41.63	6.82	67	44.72	6.58	18	NS
20m シャトルラン (回)	12歳	27.15	10.62	13	43.25	17.65	4	NS
	13歳	27.80	10.23	20	34.38	11.54	8	NS
	14歳	37.00	18.18	16	52.90	19.35	10	NS
持久走 (秒)	12歳	382.96	86.55	25	299.33	35.34	6	*
	13歳	332.60	64.96	40	315.80	72.32	5	NS
	14歳	349.84	104.26	43	299.00	43.77	8	NS
50m走 (秒)	12歳	10.41	1.85	44	9.66	0.85	10	NS
	13歳	10.34	2.06	65	9.48	1.16	14	NS
	14歳	9.29	1.08	61	8.64	0.67	18	*

項目	年齢	聾学校群			通常校群			有意差 検定結果
		\bar{X}	SD	N	\bar{X}	SD	N	
立ち幅とび (cm)	12歳	144.00	32.31	42	156.90	26.09	10	NS
	13歳	142.86	28.74	70	160.43	24.29	14	NS
	14歳	156.82	26.62	62	176.67	25.02	18	*
ハンドボール投げ (m)	12歳	10.34	3.92	35	13.70	3.30	10	NS
	13歳	10.81	4.33	62	11.46	4.33	13	NS
	14歳	13.05	3.74	60	14.17	3.96	18	NS
合計点 (点)	12歳	32.29	12.41	24	39.11	12.46	9	NS
	13歳	35.30	12.60	53	42.30	11.84	10	NS
	14歳	44.97	12.82	39	51.71	11.18	17	*

* $p < 0.05$

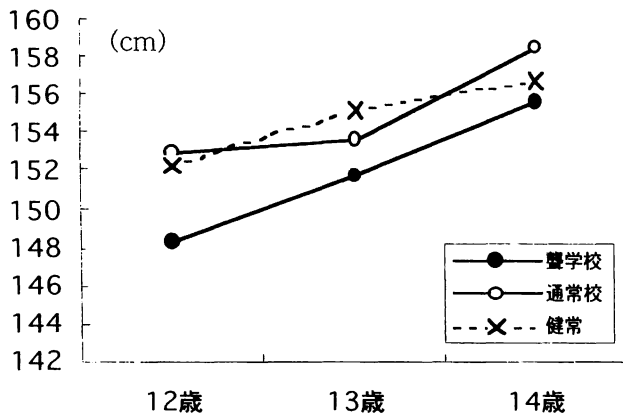


図38 加齢に伴う身長の変化 (中学校女子)

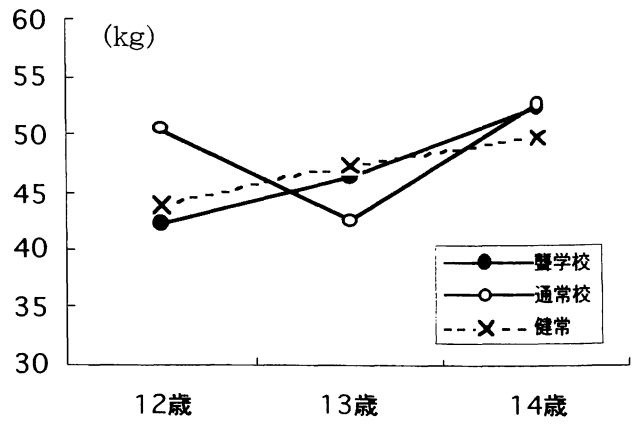


図39 加齢に伴う体重の変化 (中学校女子)

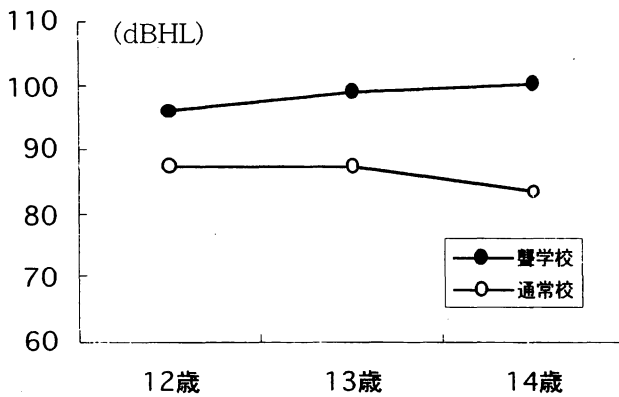


図40 加齢に伴う聴力の変化 (中学校女子)

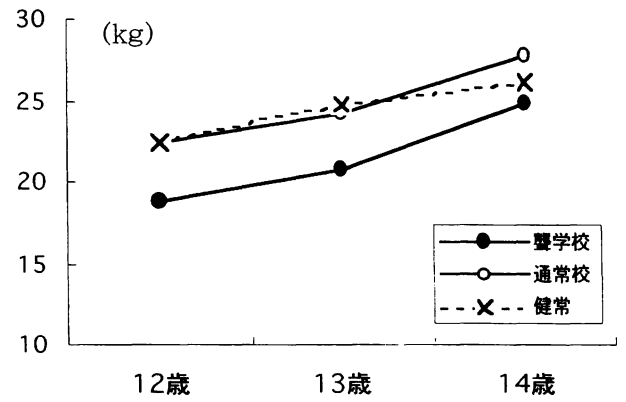


図41 加齢に伴う握力の変化 (中学校女子)

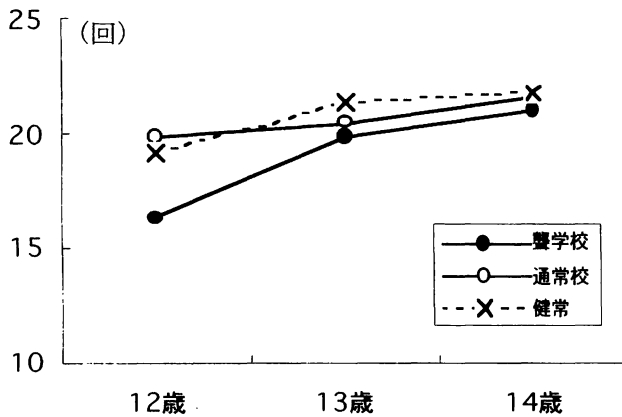


図42 加齢に伴う上体起こしの変化 (中学校女子)

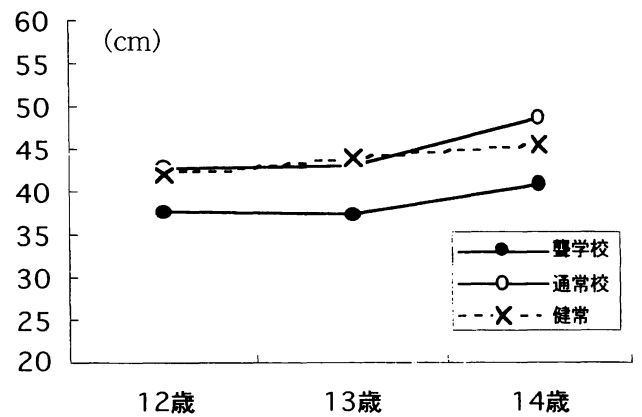


図43 加齢に伴う長座体前屈の変化 (中学校女子)

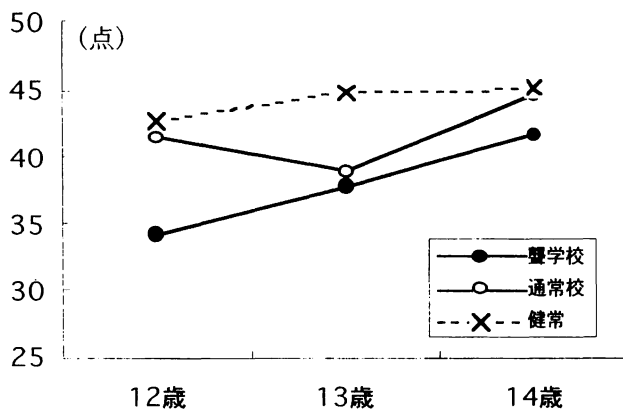


図44 加齢に伴う反復横とびの変化 (中学校女子)

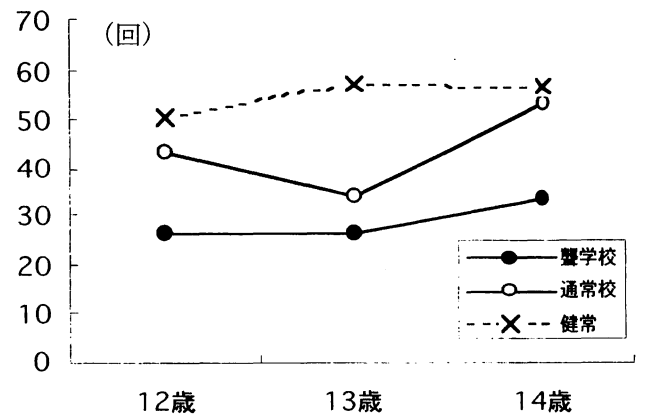


図45 加齢に伴う20m シャトルランの変化 (中学校女子)

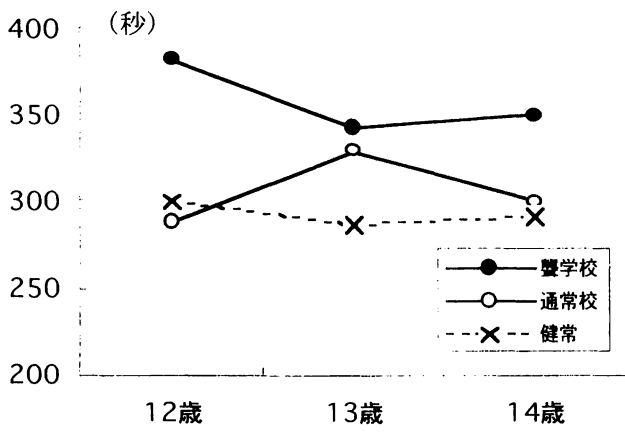


図46 加齢に伴う持久走の変化 (中学校女子)

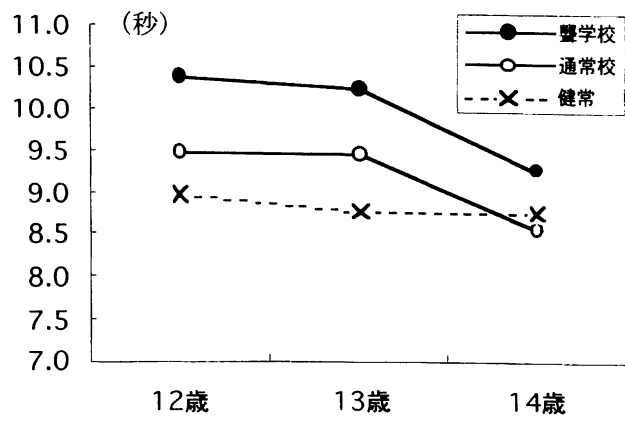


図47 加齢に伴う50m走の変化 (中学校女子)

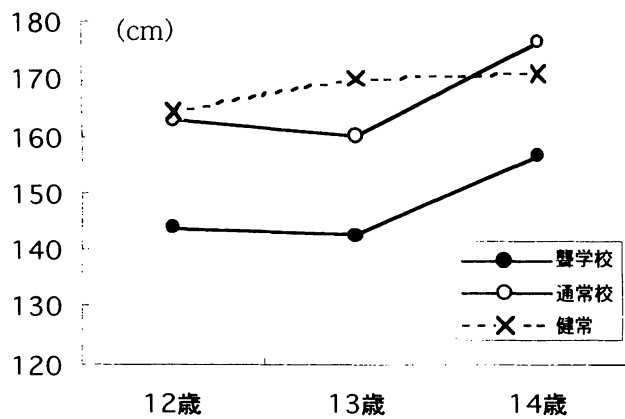


図48 加齢に伴う立ち幅とびの変化 (中学校女子)

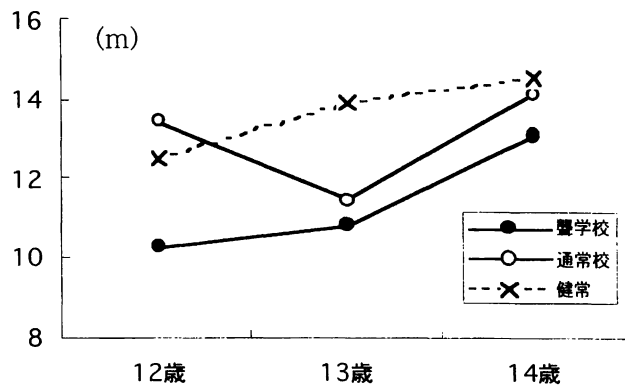


図49 加齢に伴うハンドボール投げの変化 (中学校女子)

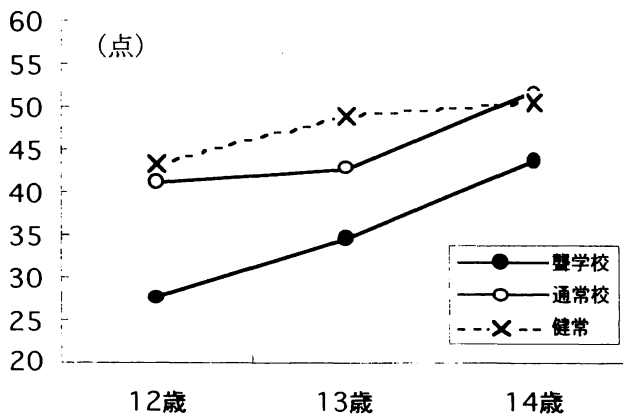


図50 加齢に伴う新体カテスト合計点の変化 (中学校女子)

また、全体を把握するための資料として、有意差検定結果の一覧表を表17に示す。

表17によると、男子では13歳で聴力を除く2項目（20mシャトルラン及び持久走。ともに全身持久力。）に有意差が認められたが、12歳及び14歳では有意差のある項目は一つも認められなかった。

また、女子では14歳で聴力を除く4項目（長座体前屈、50m走、立ち幅とび及び合計点）に有意差が認められた他には、12歳で1項目（持久走）、13歳1項目（聴力）有意差が認められたのみであった。

体育の年間授業時間数は、3学年とも通常校が多い傾向ではあったが有意差はなかった。

さらに、運動部・クラブの加入割合では、14歳男子で聾学校群が通常校群より有意に高率であった{ χ^2 (df=1) = 6.23, $p < 0.05$ }が、調査した13項目には有意差を生じた項目はなく、運動部・クラブの加入割合は、体格や体力に影響を与えていなかった。男子のその他の年齢及び女子では、有意差は一切認められなかった。

表17 有意差検定結果一覧表

年齢(歳)	性別	身長(cm)	体重(kg)	聴力(DBHL)	握力(kg)	上体起こし(回)	長座体前屈(cm)	反復横とび(回)	20mシャトルラン(回)	持久走(秒)	50m走(秒)	立ち幅とび(cm)	ハンドボール投げ(m)	合計点(点)
12歳	男子	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS
	女子	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	*	NS	NS	NS	NS
13歳	男子	NS	NS	*	NS	NS	NS	NS	*	*	NS	NS	NS	NS
	女子	NS	NS	*	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS
14歳	男子	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS
	女子	NS	NS	*	NS	NS	*	NS	NS	NS	*	*	NS	*

* $p < 0.05$ 通常校群が聾学校群を上回る。

表18 体育の授業時間数の比較

学年	学校種別	対象学校数	平均時間数	標準偏差	有意差検定
1年	聾学校	42	84.5	16.56	NS
	通常校	16	89.7	5.45	
2年	聾学校	42	86.3	16.38	NS
	通常校	23	92.1	13.56	
3年	聾学校	44	85.2	16.51	NS
	通常校	25	87.4	7.54	

表19 中学校段階における運動実施状況（男子）

年齢	学校 種別	クラブ加入状況		運 動 の 程 度				運 動 時 間			
		加入	非加入	ほとんど毎日	ときどき	ときたま	しない	30分未満	30～1未満	1以上2未満	2時間以上
12歳	聾学校	75 (93.8)	5 (6.3)	71 (85.5)	6 (7.2)	2 (2.4)	4 (4.8)	2 (2.5)	15 (19.0)	41 (51.9)	21 (26.6)
	通常校	3 (75.0)	1 (25.0)	3 (75.0)	1 (25.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (25.0)	0 (0.0)	2 (50.0)	0 (25.0)
13歳	聾学校	86 (89.6)	10 (10.4)	88 (85.4)	11 (10.7)	1 (1.0)	3 (2.9)	5 (5.0)	14 (13.9)	66 (65.3)	16 (15.8)
	通常校	14 (93.3)	1 (6.7)	14 (87.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (12.5)	0 (0.0)	1 (7.1)	9 (64.3)	4 (28.6)
14歳	聾学校	72 (83.7)	14 (16.3)	76 (75.2)	20 (19.8)	1 (1.0)	4 (4.0)	1 (1.0)	21 (21.4)	63 (64.3)	13 (13.3)
	通常校	9 (56.3)	7 (43.8)	6 (37.5)	2 (12.5)	3 (18.8)	5 (31.3)	4 (44.4)	1 (11.1)	2 (22.2)	2 (22.2)

上段：標本数、下段：（割合）

表20 中学校段階における運動実施状況（女子）

年齢	学校 種別	クラブ加入状況		運 動 の 程 度				運 動 時 間			
		加入	非加入	ほとんど毎日	ときどき	ときたま	しない	30分未満	30～1未満	1以上2未満	2時間以上
12歳	聾学校	40 (83.3)	8 (16.7)	36 (72.0)	8 (16.0)	6 (12.0)	0 (0.0)	4 (8.0)	8 (16.0)	27 (54.0)	11 (22.0)
	通常校	9 (81.8)	2 (18.2)	9 (81.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (18.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	7 (77.8)	2 (22.2)
13歳	聾学校	56 (82.7)	12 (17.6)	55 (74.3)	13 (17.6)	0 (0.0)	6 (8.1)	4 (5.9)	17 (25.0)	37 (54.4)	10 (14.7)
	通常校	11 (78.6)	3 (21.4)	6 (42.9)	4 (28.6)	1 (7.1)	3 (21.4)	3 (23.1)	1 (7.7)	5 (38.5)	4 (30.8)
14歳	聾学校	55 (78.6)	15 (21.4)	46 (62.2)	11 (14.9)	8 (10.8)	9 (12.2)	10 (15.4)	9 (13.8)	35 (53.8)	11 (16.9)
	通常校	9 (56.3)	7 (43.8)	8 (44.4)	3 (16.7)	0 (0.0)	7 (38.9)	2 (18.2)	2 (18.2)	5 (45.5)	2 (18.2)

上段：標本数、下段：（割合）

【参考文献】

及川 力・橋本有紀・齊藤まゆみ・稲垣 敦（2004）：教育形態の違いが聴覚障害者の形態、体力や運動能力に及ぼす影響－通常の小学校に在籍する聴覚障害児と聾学校小学部に在籍する聴覚障害児の比較－. 日本体育学会第55回大会号：604.

及川 力・齊藤まゆみ（2004）：教育歴による聴覚障害者の体力分析－小学校段階の聾学校在籍児と通常校在籍児の比較検討－. 第25回医療体育研究会/第8回アジア障害者体育・スポーツ学会日本支部会第6回合同大会プログラム・抄録集：44.

橋本有紀・及川 力・齊藤まゆみ・稲垣 敦（2004）：6歳から11歳の聴覚障害児の体格および体力・運動能力～聴覚障害児と健常児の比較～. 日本体育学会第55回大会号：605.

第4章 通常の高等学校に在籍する聴覚障害生徒と聾学校高等部に在籍する聴覚障害生徒の体格、体力・運動能力

I. 目的

平成16年度に実施した全国の聾学校中学部及び難聴学級を設置している通常の中学校の調査では、女子の14歳で有意差が認められた項目が多い（長座体前屈、50m走、立ち幅とび及び合計点。ただし聴力を除く。）という結果を得た。

そこで、中学部段階に引き続き高等部段階の聴覚障害生徒の形態、体力、運動能力の実態を明らかにする目的で、以下の調査を実施した。

II. 対象及び方法

1 対象

調査対象者は全国の聾学校高等部または通常の高専に在籍している、聴覚障害以外に他の障害を併せ持たない聴覚障害生徒とした。対象となった生徒総数は、聾学校男子407名、同女子316名、通常校男子16名、同女子15名であった。

表21 調査対象生徒数

	男子		女子	
	聾学校	通常校	聾学校	通常校
15歳	126	6	95	8
16歳	164	7	139	3
17歳	117	3	82	4
合計	407	16	316	15

2 研究方法と統計処理

平成16年度の夏に、全国の聾学校高等部69校及び「全国難聴児を持つ親の会」34支部に調査票を送り、在籍（あるいは加盟）している聴覚障害生徒の形態（身長、体重）、聴力（良耳平均聴力レベル）、体力（握力、上体起こし、長座体前屈、反復横とび、20mシャトルランまたは持久走）、運動能力（50m走、立ち幅とび、ハンドボール投げ）、運動実施状況及び各学校における体育の年間授業時間数について回答を求めた。

「全国難聴児を持つ親の会」の各支部から該当する聴覚障害生徒宛に調査票を郵送してもらい、会員であり本調査に同意した場合にのみ、調査票を聴覚障害生徒が在籍する高等学校に持参し、クラス担任等に内容を記載してもらった後、調査者へ返送してもらうという手続きを取った。なお、「全国難聴児を持つ親の会」とは本研究に関して、共同研究の形を取ったことを付記しておく。

対象者を聾学校に在籍する聴覚障害生徒（以下、聾学校群）と通常校に在籍する聴覚障害生徒（以下、通常校群）に分け、Mann-WhitonyのUテストによって、性別、年齢別、調査項目別に平均値の群間の差異を検討した。なお、有意水準は5%未満とした。

3 結果

表22に男子の成績を示す。

表 22 聾学校群と通常校群の体格・体力の年齢別平均値・標準偏差と有意差検定結果（男子）

項 目	年 齢	聾 学 校 群			通 常 校 群			有 意 差 検 定 結 果
		\bar{X}	SD	N	\bar{X}	SD	N	
身長 (cm)	15 歳	165.94	7.36	120	170.47	3.46	6	NS
	16 歳	167.43	6.99	154	168.80	9.42	7	NS
	17 歳	168.10	6.57	107	179.00	11.14	3	NS
体重 (kg)	15 歳	56.38	12.47	119	53.25	3.63	6	NS
	16 歳	56.92	11.03	154	56.21	7.17	7	NS
	17 歳	59.14	11.37	107	70.00	4.36	3	*
聴力 (dBHL)	15 歳	95.52	15.76	117	100.83	22.00	6	NS
	16 歳	98.23	14.35	148	91.54	18.24	7	NS
	17 歳	97.81	15.44	98	100.00	14.14	2	NS
握力 (kg)	15 歳	33.71	8.44	117	36.00	2.10	6	NS
	16 歳	35.34	7.98	155	41.83	10.89	6	NS
	17 歳	39.06	8.36	114	42.67	3.51	3	NS
上体起こし (回)	15 歳	24.69	5.65	104	27.40	2.41	5	NS
	16 歳	25.90	5.40	133	29.80	6.06	5	NS
	17 歳	28.22	6.54	90	36.00	4.36	3	*
長座体前屈 (cm)	15 歳	40.83	10.52	112	45.60	9.02	5	NS
	16 歳	41.01	10.48	146	56.50	11.52	6	*
	17 歳	45.56	10.18	103	54.00	15.87	3	NS
反復横とび (点)	15 歳	47.20	8.37	117	52.40	3.58	5	NS
	16 歳	48.23	8.85	147	55.17	10.52	6	NS
	17 歳	50.92	10.77	112	54.67	9.02	3	NS
20m シャトルラン (回)	15 歳	65.00	28.19	29	83.33	5.86	3	NS
	16 歳	76.79	30.83	33	93.00	6.36	5	NS
	17 歳	87.20	30.05	25	89.50	4.95	2	NS
持久走 (秒)	15 歳	420.83	95.71	75	368.00	0.00	1	NS
	16 歳	399.50	90.28	101	326.00	28.28	2	NS
	17 歳	402.97	94.17	69	339.00	0.00	1	NS
50m 走 (秒)	15 歳	8.08	1.28	114	8.18	1.09	4	NS
	16 歳	7.73	0.97	149	7.10	0.39	7	*
	17 歳	7.51	1.24	110	6.93	0.25	3	NS

項目	年齢	聾学校群			通常校群			有意差 検定結果
		\bar{X}	SD	N	\bar{X}	SD	N	
立ち幅とび (cm)	15歳	198.83	34.61	110	225.20	7.73	5	*
	16歳	207.45	27.89	129	216.86	32.90	7	NS
	17歳	218.89	27.53	92	238.67	16.29	3	NS
ハンドボール投げ (m)	15歳	20.47	6.65	112	24.25	3.30	4	NS
	16歳	20.88	6.06	136	26.83	7.31	6	NS
	17歳	24.10	6.79	99	28.33	1.53	3	NS
合計点 (点)	15歳	39.39	11.78	94	47.50	3.00	4	NS
	16歳	42.93	11.42	121	55.80	13.88	5	NS
	17歳	50.66	11.47	76	59.33	5.13	3	NS

* $p < 0.05$

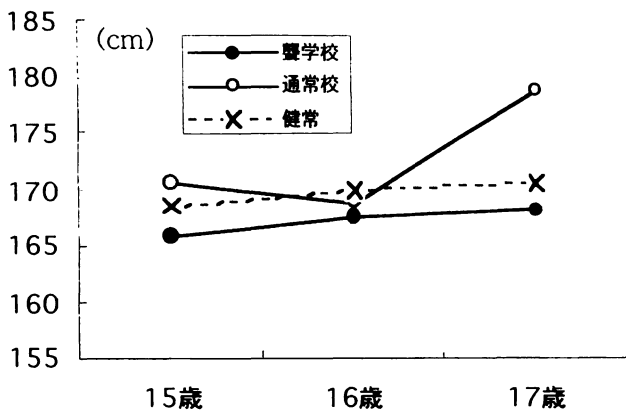


図51 加齢に伴う身長の変化 (高校男子)

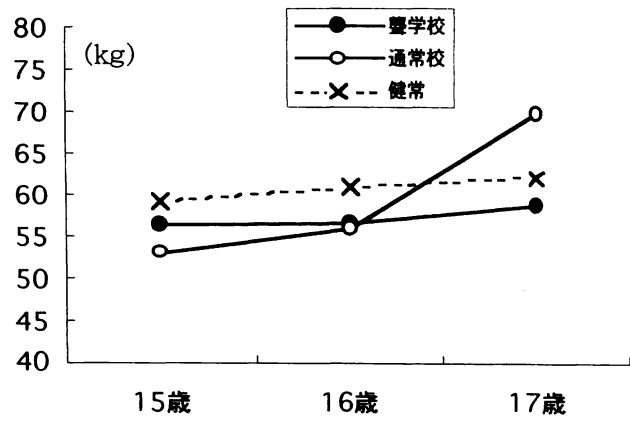


図52 加齢に伴う体重の変化 (高校男子)

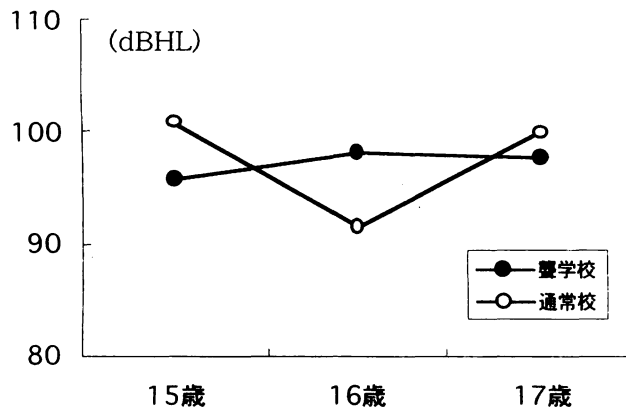


図53 加齢に伴う聴力の変化 (高校男子)

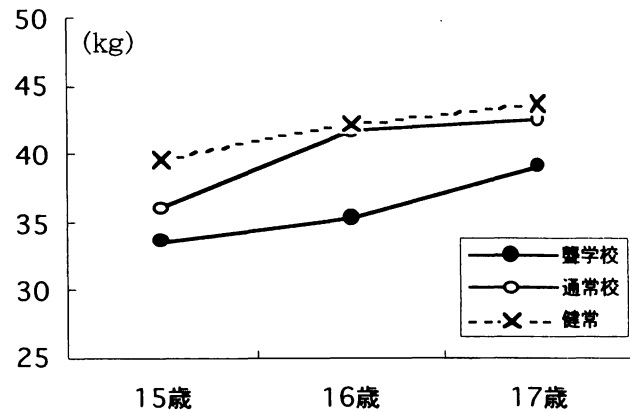


図54 加齢に伴う握力の変化 (高校男子)

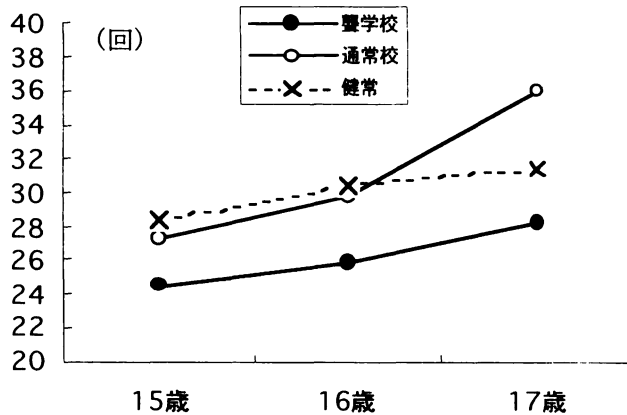


図55 加齢に伴う上体起こしの変化 (高校男子)

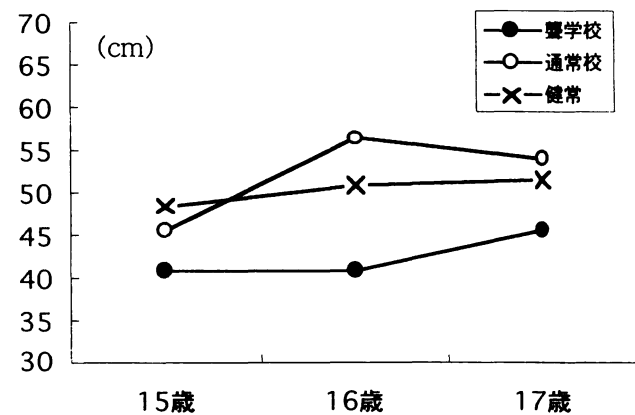


図56 加齢に伴う長座体前屈の変化 (高校男子)

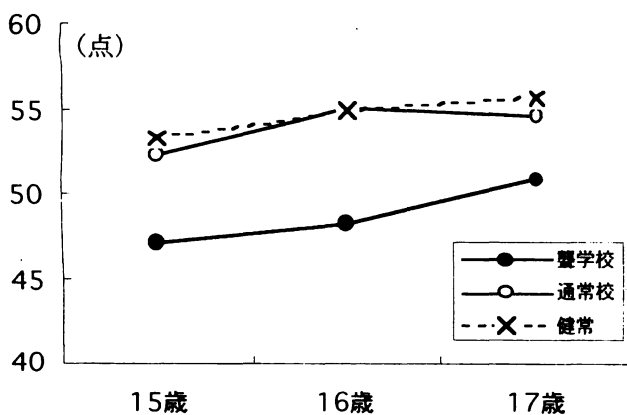


図57 加齢に伴う反復横とびの変化 (高校男子)

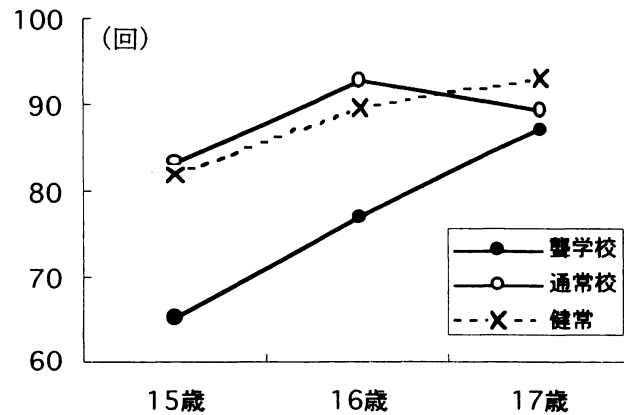


図58 加齢に伴う20mシャトルランの変化 (高校男子)

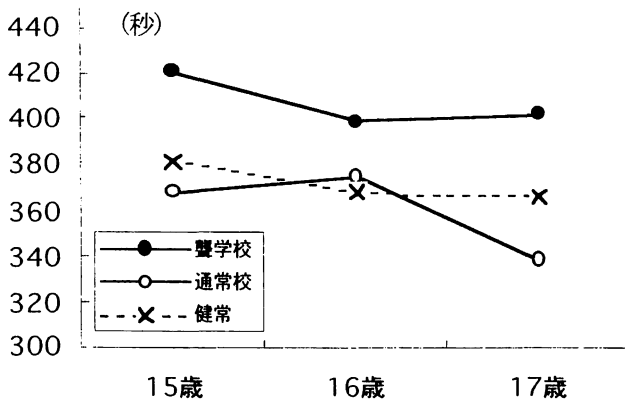


図59 加齢に伴う持久走の変化 (高校男子)

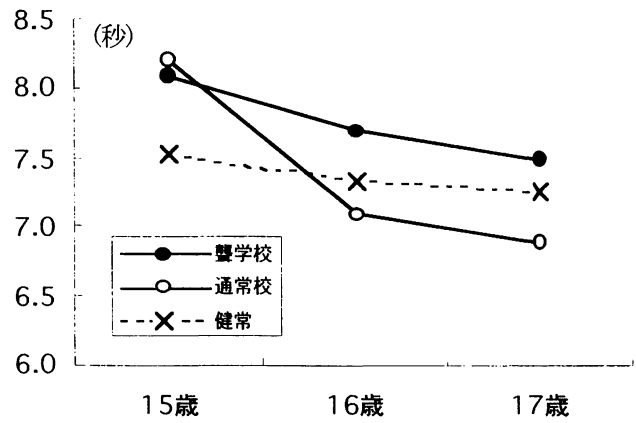


図60 加齢に伴う50m走の変化 (高校男子)

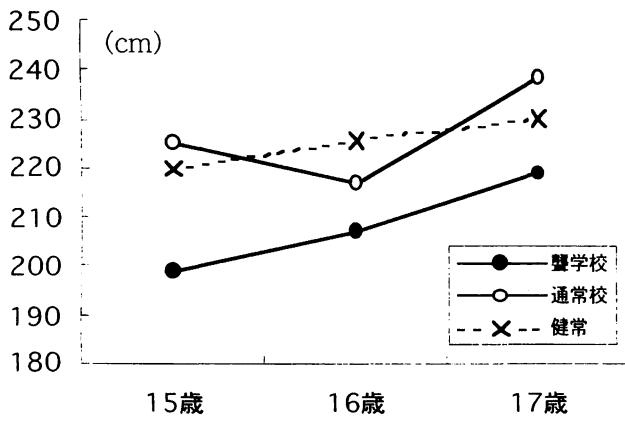


図61 加齢に伴う立ち幅とびの変化 (高校男子)

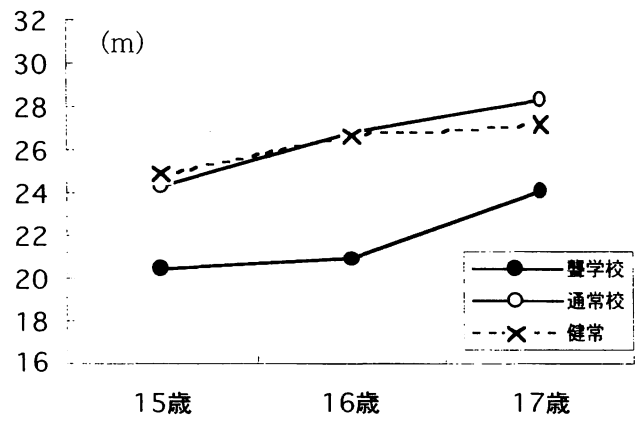


図62 加齢に伴うハンドボール投げの変化 (高校男子)

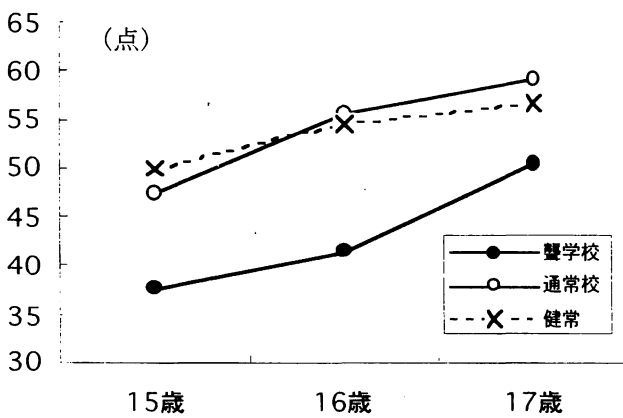


図63 加齢に伴う新体力テスト合計点の変化 (高校男子)

表 23 に女子の成績を示す。

表 23 聾学校群と通常校群の体格・体力の年齢別平均値・標準偏差と有意差検定結果（女子）

項 目	年 齢	聾 学 校 群			通 常 校 群			有 意 差 検 定 結 果
		\bar{X}	S D	N	\bar{X}	S D	N	
身長 (cm)	15 歳	153.22	15.02	88	159.21	6.13	7	NS
	16 歳	154.41	6.40	125	156.93	3.49	3	NS
	17 歳	154.43	7.34	75	157.20	2.79	4	NS
体重 (kg)	15 歳	51.96	10.20	87	51.97	7.52	7	NS
	16 歳	50.14	8.25	122	51.20	5.63	3	NS
	17 歳	50.18	9.41	74	47.05	4.75	4	NS
聴力 (dBHL)	15 歳	96.68	18.61	84	100.17	10.07	6	NS
	16 歳	97.76	16.21	120	83.33	30.14	3	NS
	17 歳	101.04	16.03	69	87.29	8.76	3	NS
握力 (kg)	15 歳	24.51	5.21	90	24.13	5.74	8	NS
	16 歳	23.95	4.80	137	27.50	3.54	2	NS
	17 歳	23.12	6.10	81	23.75	4.57	4	NS
上体起こし (回)	15 歳	20.17	5.47	82	18.00	5.88	8	NS
	16 歳	21.48	5.87	122	21.50	2.12	2	NS
	17 歳	22.01	6.45	70	22.00	9.06	4	NS
長座体前屈 (cm)	15 歳	42.31	11.23	86	43.00	16.21	8	NS
	16 歳	42.29	10.25	131	48.50	4.95	2	NS
	17 歳	43.55	11.80	77	40.50	7.14	4	NS
反復横とび (点)	15 歳	41.31	8.22	86	42.00	4.93	8	NS
	16 歳	41.70	7.69	130	43.50	4.95	2	NS
	17 歳	42.51	8.21	78	44.25	9.54	4	NS
20m シャトルラン (回)	15 歳	33.25	15.15	20	42.00	16.26	6	NS
	16 歳	47.28	20.61	29	—	—	—	—
	17 歳	38.23	12.70	22	42.00	0.00	1	NS
持久走 (秒)	15 歳	340.30	64.96	56	313.50	62.93	2	NS
	16 歳	329.47	66.38	79	292.50	30.41	2	NS
	17 歳	324.55	53.80	42	302.00	54.62	3	NS
50m 走 (秒)	15 歳	9.35	1.47	82	9.13	1.13	7	NS
	16 歳	9.24	1.06	123	8.57	0.49	3	NS
	17 歳	9.31	1.23	77	8.58	0.53	4	NS

項 目	年齢	聾 学 校 群			通 常 校 群			有意差 検定結果
		\bar{X}	SD	N	\bar{X}	SD	N	
立ち幅とび (cm)	15 歳	156.17	24.89	81	165.00	37.49	8	NS
	16 歳	157.07	27.95	118	170.67	9.02	3	NS
	17 歳	159.06	27.65	72	187.00	23.07	3	NS
ハンドボール投げ (m)	15 歳	13.70	4.59	80	12.63	3.34	8	NS
	16 歳	14.07	4.63	123	11.00	2.83	2	NS
	17 歳	14.51	4.41	74	14.50	4.20	4	NS
合計点 (点)	15 歳	41.90	12.91	69	44.71	13.78	7	NS
	16 歳	43.61	12.44	99	49.00	4.24	2	NS
	17 歳	43.90	12.77	57	55.33	9.71	3	NS

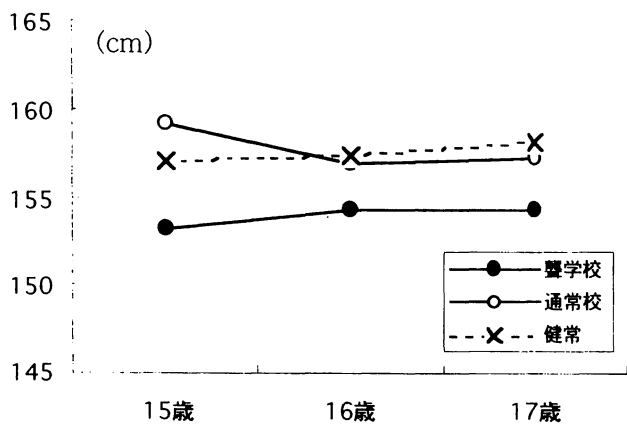


図64 加齢に伴う身長の変化 (高校女子)

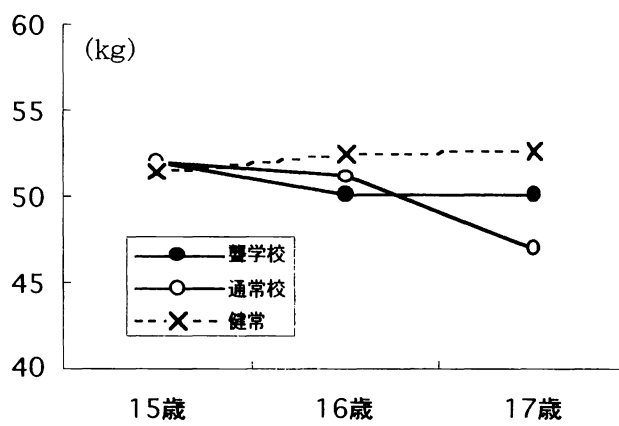


図65 加齢に伴う体重の変化 (高校女子)

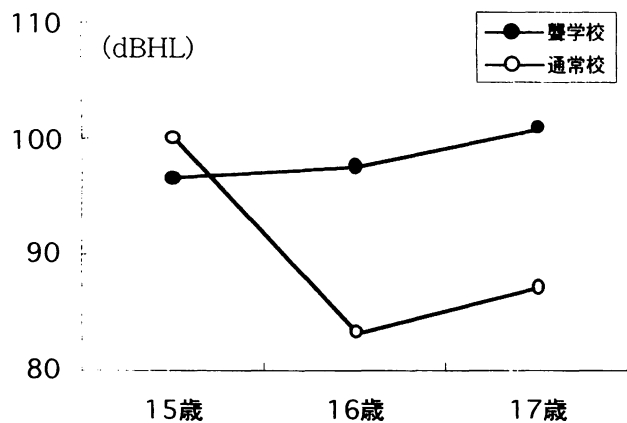


図66 加齢に伴う聴力の変化 (高校女子)

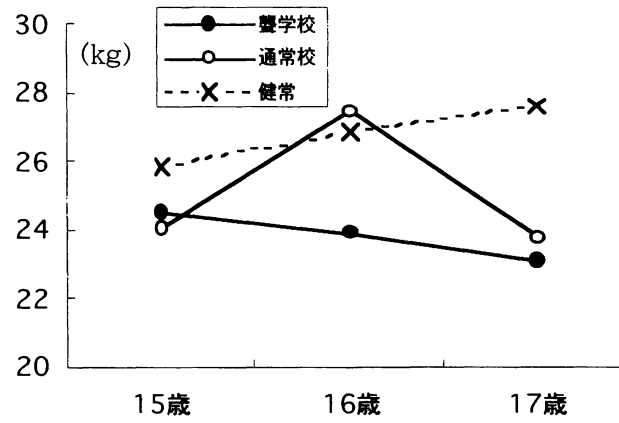


図67 加齢に伴う握力の変化 (高校女子)

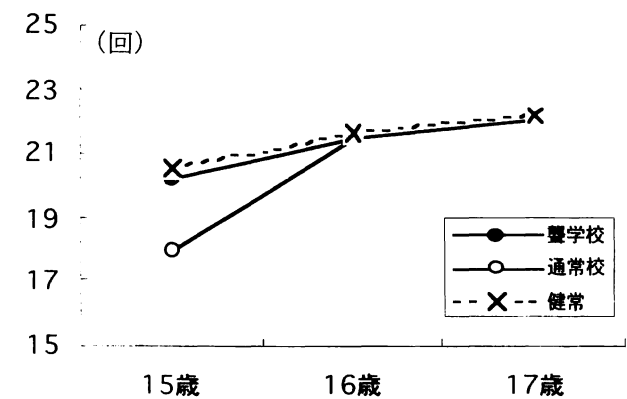


図68 加齢に伴う上体起こしの変化 (高校女子)

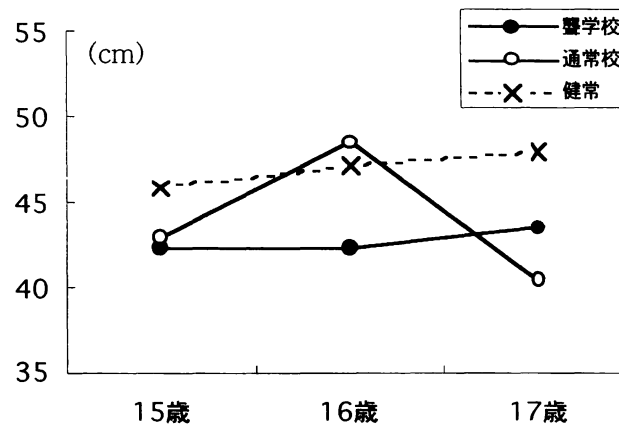


図69 加齢に伴う長座体前屈の変化 (高校女子)

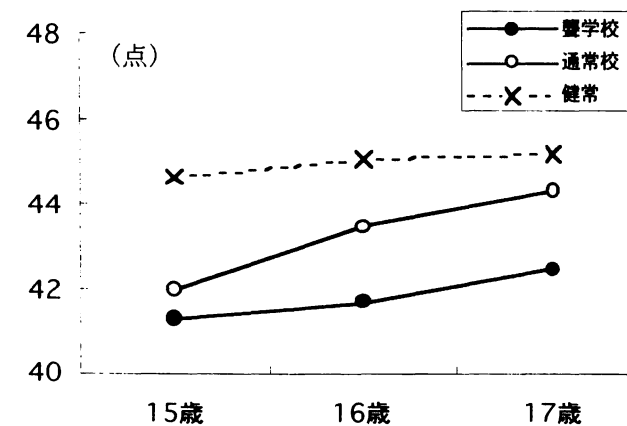


図70 加齢に伴う反復横とびの変化 (高校女子)

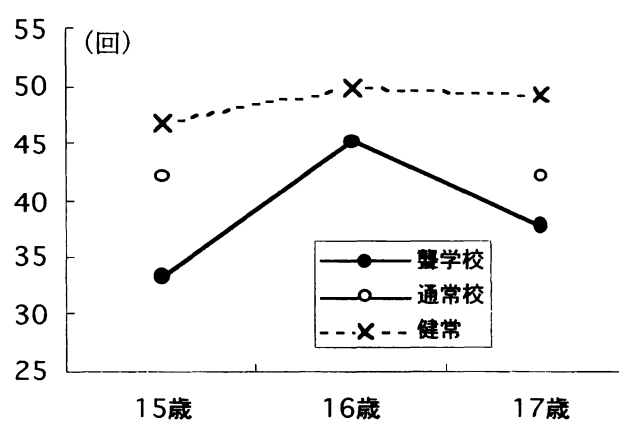


図71 加齢に伴う20mシャトルランの変化 (高校女子)

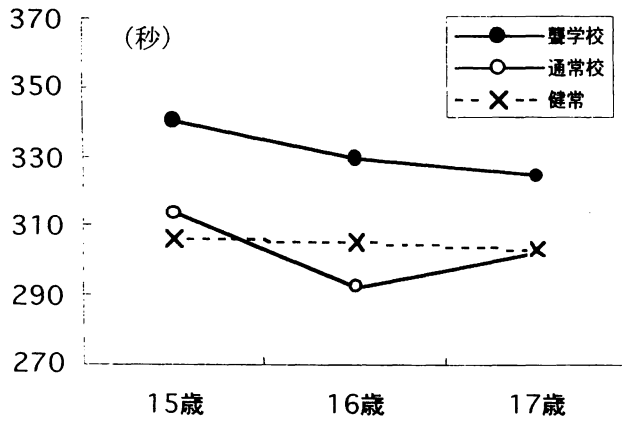


図72 加齢に伴う持久走の変化 (高校女子)

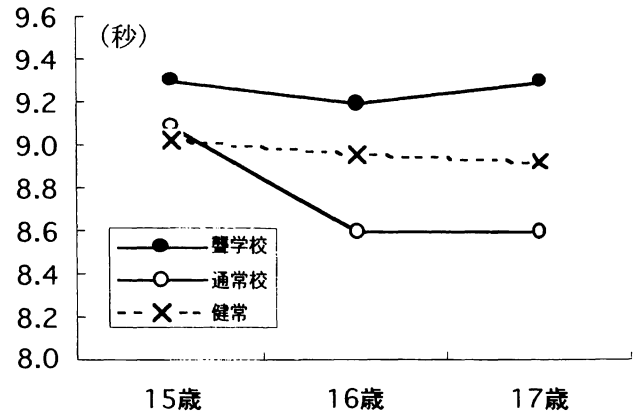


図73 加齢に伴う50m走の変化 (高校女子)

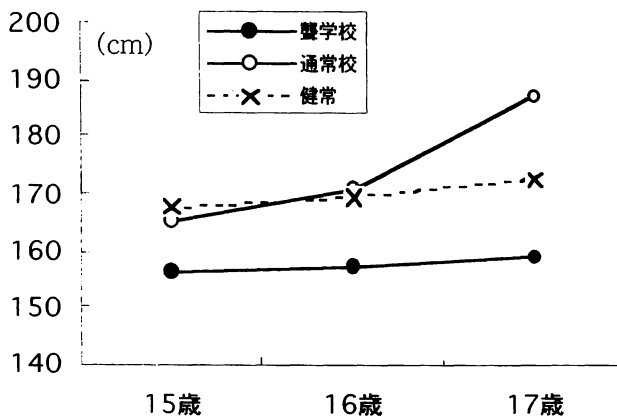


図74 加齢に伴う立ち幅とびの変化 (高校女子)

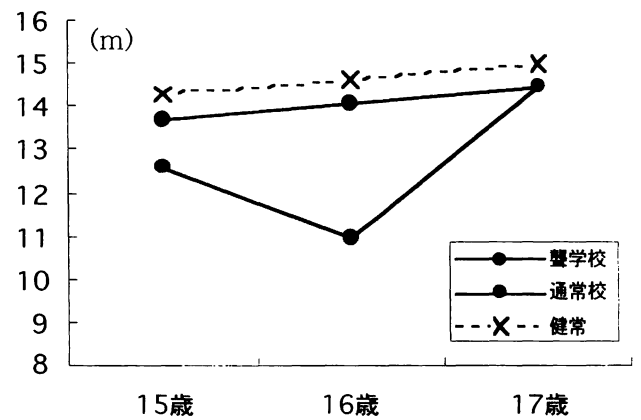


図75 加齢に伴うハンドボール投げの変化 (高校女子)

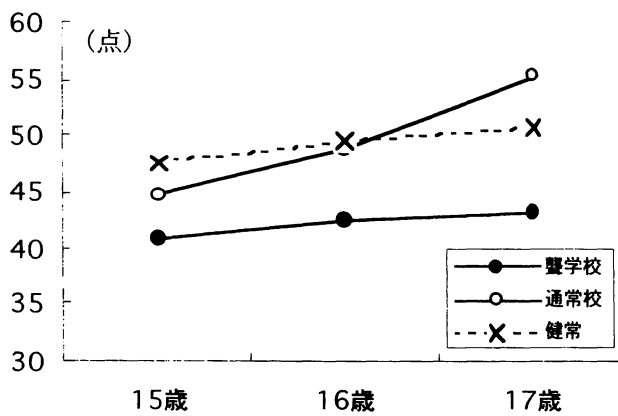


図76 加齢に伴う新体テスト合計点の変化 (高校女子)

また、全体を把握するため、有意差検定結果の一覧表を表 24 に示す。

表 24 によると、男子では 15 歳で 4 項目（体重、上体起こし、長座体前屈及び立ち幅とび）、16 歳で 50m 走に有意差が認められたが、17 歳では全項目で有意差は認められなかった。

また、女子ではすべての年齢において、全項目有意差は認められなかった。

さらに、体育の年間授業時間数及び男女の運動部・クラブの加入割合には、両群間で一切有意差は認められなかった。

表 24 有意差検定結果一覧表

年齢(歳)	性別	身長 (cm)	体重 (kg)	聴力 (DBHL)	握力 (kg)	上体起こし (回)	長座体前屈 (cm)	反復横とび (回)	20m シャトルラン (回)	持久走 (秒)	50m 走 (秒)	立ち幅とび (cm)	ハンドボール投げ (m)	合計点 (点)
15 歳	男子	NS	*	NS	NS	*	*	NS	NS	NS	NS	*	NS	NS
	女子	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS
16 歳	男子	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	*	NS	NS	NS
	女子	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	—	NS	NS	NS	NS	NS
17 歳	男子	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS
	女子	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS	NS

* $p < 0.05$ 通常校群が聾学校群を上回る。

表 25 体育の授業時間数の比較

学年	学校種別	対象学校数	平均時間数	標準偏差	有意差検定
1 年	聾学校	32	86.2	18.14	NS
	通常校	15	95.8	21.95	
2 年	聾学校	33	83.6	17.70	NS
	通常校	12	98.0	41.43	
3 年	聾学校	32	88.5	19.76	NS
	通常校	4	87.5	20.21	

表 26 高等学校段階における運動実施状況（男子）

年齢	学校 種別	クラブ加入状況		運 動 の 程 度				運 動 時 間			
		加入	非加入	ほとんど毎日	ときどき	ときたま	しない	30分未満	30～1未満	1以上2未満	2時間以上
15 歳	聾学校	101 (85.6)	17 (14.4)	101 (78.9)	9 (7.0)	11 (8.6)	7 (5.5)	6 (4.9)	17 (13.8)	74 (60.2)	26 (21.1)
	通常校	3 (50.0)	3 (50.0)	3 (50.0)	1 (16.7)	1 (16.7)	1 (16.7)	1 (20.0)	1 (20.0)	2 (40.0)	1 (20.0)
16 歳	聾学校	126 (82.9)	26 (17.1)	121 (77.6)	18 (11.5)	6 (3.8)	11 (7.1)	18 (11.7)	10 (6.5)	83 (53.9)	43 (27.9)
	通常校	5 (71.4)	2 (28.6)	4 (57.1)	2 (28.6)	0 (0.0)	1 (14.3)	1 (16.7)	1 (16.7)	1 (16.7)	3 (50.0)
17 歳	聾学校	94 (84.7)	17 (15.3)	77 (67.5)	18 (15.8)	12 (10.5)	7 (6.1)	7 (6.5)	22 (20.4)	57 (52.8)	22 (20.4)
	通常校	2 (66.7)	1 (33.3)	2 (66.7)	1 (33.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (33.3)	2 (66.7)

上段：標本数、下段：（割合）

表 27 高等学校段階における運動実施状況（女子）

年齢	学校 種別	クラブ加入状況		運 動 の 程 度				運 動 時 間			
		加入	非加入	ほとんど毎日	ときどき	ときたま	しない	30分未満	30～1未満	1以上2未満	2時間以上
15 歳	聾学校	70 (89.7)	8 (10.3)	63 (68.5)	16 (17.4)	6 (6.5)	7 (7.6)	2 (2.3)	13 (15.1)	56 (65.1)	15 (17.4)
	通常校	5 (71.4)	2 (28.6)	5 (62.5)	1 (12.5)	0 (0.0)	2 (25.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	6 (100.0)	0 (0.0)
16 歳	聾学校	95 (75.4)	31 (24.6)	88 (65.7)	14 (10.4)	11 (8.2)	21 (15.7)	18 (14.8)	10 (8.2)	67 (54.9)	27 (22.1)
	通常校	1 (33.3)	2 (66.7)	1 (33.3)	0 (0.0)	1 (33.3)	1 (33.3)	1 (50.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (50.0)
17 歳	聾学校	47 (63.5)	27 (36.5)	40 (50.6)	14 (17.7)	9 (11.4)	16 (20.3)	14 (20.6)	7 (10.3)	34 (50.0)	13 (19.1)
	通常校	1 (25.0)	3 (75.0)	1 (25.0)	0 (0.0)	1 (25.0)	2 (50.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (33.3)	2 (66.7)

上段：標本数、下段：（割合）

【参考文献】

及川 力・橋本有紀・齊藤まゆみ・稲垣 敦（2004）：教育形態の違いが聴覚障害者の形態、体力や運動能力に及ぼす影響－通常の小学校に在籍する聴覚障害児と聾学校小学部に在籍する聴覚障害児の比較－. 日本体育学会第55回大会号：604.

及川 力・齊藤まゆみ（2004）：教育歴による聴覚障害者の体力分析－小学校段階の聾学校在籍児と通常校在籍児の比較検討－. 第25回医療体育研究会/第8回アジア障害者体育・スポーツ学会日本支部会第6回合同大会プログラム・抄録集：44.

橋本有紀・及川 力・齊藤まゆみ・稲垣 敦（2004）：6歳から11歳の聴覚障害児の体格および体力・運動能力～聴覚障害児と健常児の比較～. 日本体育学会第55回大会号：605.

第5章 聴覚障害児童・生徒と健常児童・生徒の体格、体力・運動能力

I. 目的

10～17歳の聴覚障害児童・生徒の体格、体力・運動能力については、過去3回ほぼ10年毎に聾学校に対して調査が行なわれている（奥田体育賞会 1978；大河原ら 1985；大河原ら 1986；岡本 1994）。今回初めて聾学校及び通常の学校に在籍する聴覚障害児童・生徒の調査を行なったので、その概要を報告する。

II. 対象及び方法

1 対象

全国の聾学校小学部、中学部及び高等部に在籍する聴覚障害児童・生徒ならびに通常の小学校、中学校及び高等学校に在籍する聴覚障害児童・生徒を調査対象とした。対象となった児童・生徒総数は男子1,384名、女子1,055名、合計2,439名であった。

表28 調査対象児童・生徒数

年齢 性別	6 歳	7 歳	8 歳	9 歳	10 歳	11 歳	12 歳	13 歳	14 歳	15 歳	16 歳	17 歳	合 計
男 子	76	79	100	122	136	144	86	120	117	126	161	117	1384
女 子	69	70	75	86	109	84	60	88	92	98	139	85	1055
計	145	149	175	208	245	228	146	208	209	224	300	202	2439

2 研究方法と統計処理

小学校段階の調査については平成15年度の秋に、中学校及び高等学校段階の調査については平成16年度に実施した（学校数及び児童・生徒数については該当する章を参照のこと）。

調査項目は体格（身長、体重）、聴力（良耳平均聴力レベル）、体力（握力、上体起こし、長座体前屈、反復横とび、20mシャトルラン）、運動能力（50m走、立ち幅とび、ソフトボール投げ）である。

健常児童・生徒を母集団、聴覚障害児童・生徒を標本とし、母分散が既知であるので正規分布による検定（z検定）によって、性別、年齢別、調査項目別に平均値の群間の差異を検討した。なお、有意水準は5%未満とした。

3 比較資料

「平成15年度 体力・運動能力調査報告書」（文部科学省 2004）を比較資料として使用した。

III. 結果

1 項目別の一般的傾向

調査の結果を表28（小学校段階）、表29（中学校段階）、表30（高等学校段階）及び図77～88に示す。テスト項目別にみた一般的傾向は、以下の通りである。

（1）身長

健常児童・生徒では12歳頃から男女の差が拡大するが、それは聴覚障害児童・生徒でも同様であった。また、健常児童・生徒の場合は9～11歳で女兒が男児を上回るのに対し、聴覚障害児童・生徒では女兒が男児を上回るのは11歳のみであった。

男女とも健常児童・生徒とほとんど同じような発育の傾向を示していた。

（2）体重

健常児童・生徒では12歳頃から男女の差が拡大するが、それは聴覚障害児童・生徒でもほぼ同様であった。また、健常児童・生徒の場合は10、11歳で女兒が男児を上回るのに対し、聴覚障害児童・生徒では女

児が男児を上回るのは11、12歳であった。

男子健常児童・生徒及び男子聴覚障害児童・生徒が17歳までゆるやかに上昇していくのに対し、女子聴覚障害児童・生徒の場合は14歳をピークに17歳まで下降していた。

（握力）

筋力の指標である握力は、健常児童・生徒の場合、すべての年齢段階で男子が女子より高い水準を示している。聴覚障害児童・生徒においてもそれは同様であった。

健常児童・生徒では12歳頃から男女の差が拡大する傾向が見られるが、それは聴覚障害児童・生徒でもほぼ同様であった。

男子は健常児童・生徒及び聴覚障害児童・生徒ともに、17歳頃まで急激な向上傾向を示す。一方、女子の場合、健常児童・生徒では緩やかな向上傾向を示すののに対して、聴覚障害児童・生徒では14歳頃から緩やかな低下傾向を示した。

（上体起こし）

筋力・筋持久力の指標である上体起こしは、健常児童・生徒の場合、すべての年齢段階で男子が女子より高い水準を示している。聴覚障害児童・生徒においてもそれは同様であった。

男子の場合、健常児童・生徒では16歳頃まで顕著な向上傾向を示し、17歳頃にピークに達している。一方、聴覚障害児童・生徒では17歳まで顕著な向上傾向が続いている。

女子の場合は、健常児童・生徒及び聴覚障害児童・生徒ともに、14歳頃にピークに達し、以後は横ばい状態を示している。

（長座体前屈）

柔軟性の指標である長座体前屈は、男女差が最も小さいテスト項目とされる。

女子の場合、健常児童・生徒では6歳から女子が男子よりもやや高い水準を示したまま、14歳頃まで直線的な向上傾向を示し、17歳頃にピークに達する。聴覚障害児童・生徒では14歳くらいまで緩やかな向上傾向が続いた後、ほぼ横ばい傾向を示す。

男子の場合、健常児童・生徒では11歳頃まで直線的な向上傾向を示し、14歳から女子よりやや高い値となり17歳でピークに達する。聴覚障害児童・生徒はおおむね女子よりやや低い値ながら緩やかな向上傾向を示して16歳まで向上し、17歳で女子より高い値となる。

（反復横とび）

敏捷性の指標である反復横とびは、健常児童・生徒の場合、すべての年齢段階で男子が女子より高い水準を示している。聴覚障害児童・生徒においてもそれは同様であった。

男子の場合、健常児童・生徒では14歳頃まで急激な向上傾向を示し、その後も緩やかな向上を続けている。聴覚障害児童・生徒では17歳まで直線的な向上傾向を示す。

女子の場合、健常児童・生徒では11歳頃まで急激な向上傾向を示し、以降は横ばい状態を示す。聴覚障害児童・生徒では健常児童・生徒より低い値ではあるものの、ほぼ同様の傾向を示す。

（20mシャトルラン）

全身持久力の指標である20mシャトルランは、健常児童・生徒の場合、すべての年齢段階で男子が女子より高い水準を示している。聴覚障害児童・生徒においてもそれはほぼ同様であった。

健常児童・生徒の場合、男子は14歳、女子は13歳で迎えるピークまで急激な向上傾向を示しているが、その後の数年間は、男子はやや持続、女子では緩やかに低下する傾向を示す。

聴覚障害児童・生徒の場合、男子は健常児童・生徒より値は低いものの17歳までおおむね向上する傾向を示すが、女子については11歳くらいまでは向上傾向を示すものの、その後は凹凸が激しく明確な傾向が見られない。

(持久走)

健常児童・生徒の場合、12歳から17歳まで男女ともにほとんど向上は見られない。

聴覚障害児童・生徒の場合、男子はほとんど向上が見られないが、女子は緩やかな向上傾向が見られる。

(50m走)

スピード及び走能力の指標である50m走は、健常児童・生徒の場合、6歳から11歳までは、男子がわずかに高い水準を示したまま、男女ともに直線的な向上傾向を示している。しかし、男子はその後も17歳頃まで向上傾向が続くが、女子では向上傾向が鈍りはじめ、14歳でピークを迎えた後、緩やかな低下傾向を示している。そのため、12歳以降にその差は拡大する傾向にある。

聴覚障害児童・生徒の場合、男子では17歳まで向上傾向が続くが、女子では14歳くらいから横ばい状態となるため、差が拡大する傾向にある。

(立ち幅とび)

筋パワー（瞬発力）及び跳能力の指標である立ち幅とびは、健常児童・生徒の場合、すべての年齢段階で男子が女子より高い水準を示している。

男子は、14歳頃まで顕著な向上傾向を示し、その後も緩やかな向上傾向を続けている。

女子は、14歳頃ピークに達し、その後は横ばい傾向を示す。

聴覚障害児童・生徒の場合、男子は健常児童・生徒より値は低いものの直線的な向上傾向を示すのに対して、女子は11歳くらいからほぼ横ばい状態を示す。

(ボール投げ)

筋パワー（瞬発力）、投能力及び巧緻性の指標であるソフトボール投げは、健常児童・生徒の場合、6歳からすでに男子が女子よりも高い水準を示し、男女ともに直線的で著しい向上傾向を示すが、その後、加齢に伴ってその差はさらに拡大する傾向にある。

ハンドボール投げにおいても、健常児童・生徒の場合、男女とも17歳でピークを迎えるまで向上傾向は続くが、男子に比べ女子の向上傾向が非常に緩やかであるため、その差はソフトボール投げに引き続き拡大する傾向にある。

聴覚障害児童・生徒の場合、ソフトボール投げは男女ともに直線的で著しい向上傾向を示す。ソフトボール投げにおいても向上傾向は続くが、男子に比べ女子の向上傾向が非常に緩やかであるため、その差はソフトボール投げに引き続き拡大する傾向にある。

(合計点)

新体力テストの合計点からみた6歳から11歳の体力水準は、健常児童・生徒の場合、男女とも加齢に伴い急激でほぼ直線的な向上傾向を示している。この傾向は14歳頃まで続くが、その後、男子では17歳まで向上傾向を示すのに対して、女子ではほぼ停滞傾向を示している。

聴覚障害児童・生徒の場合、男女とも健常児童・生徒より値は低いものの加齢に伴い急激な向上傾向を示す。この傾向は14歳頃まで続くが、その後、男子では17歳まで向上傾向を示すのに対して、女子ではほぼ停滞傾向を示している。

2 健常児童・生徒との比較による検討

聴覚障害児童・生徒の新体力テスト合計点は、男女とも6歳から17歳までのすべての年齢において、健常児童・生徒のそれに対し有意に低い値を示したことから、彼らの体力・運動能力は健常児童・生徒に比べて劣っているといえることができる。

合計点以外にも男女とも全年齢区分で有意に低かったのは、反復横とび（敏捷性）、持久走（全身持久力。12歳以上）及び50m走（走力）がある。

また、立ち幅とび（跳力）は女子は全年齢区分で、男子は1年齢区分以外はすべて有意に低かった。

20mシャトルランは、男女ともに1年齢区分を除きすべて有意に低かった。

逆に、全年齢区分を通じて比較的有意差が認められなかった項目としては、体重や身長があげられる。

体重は男子では14歳まで有意差が認められず、差が見られるのは15歳以上である。女子でも12歳まではほとんど有意差はなく、差が見られるようになるのは13歳以上である。

身長についても、男子は小学校の間は有意差が見られず、中学校以降になって差がひらいていくようになる。

なお、女子のボール投げと上体起こしも、ほぼ半分の年齢区分で有意差が見られていない。

全体的には、男子は体格は小学校までは健常児と変わらないが、中学校以降差が拡大する傾向にあり、体力・運動能力に関しては小学校、中学校、高等学校と差が拡大する傾向にある。

一方、女子については、体格は男子と同じ傾向であるが、体力・運動能力に関しては中学校以降も男子程健常生徒との差は大きくないようである。

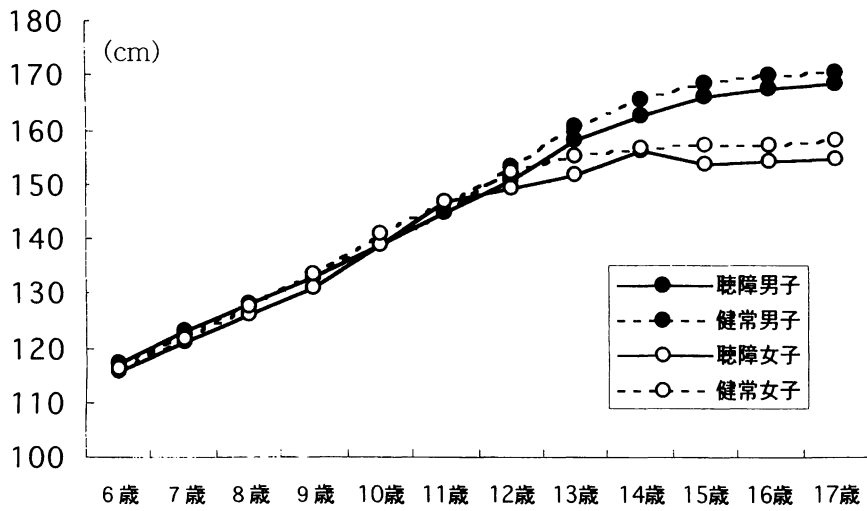


図 77 加齢に伴う身長の変化

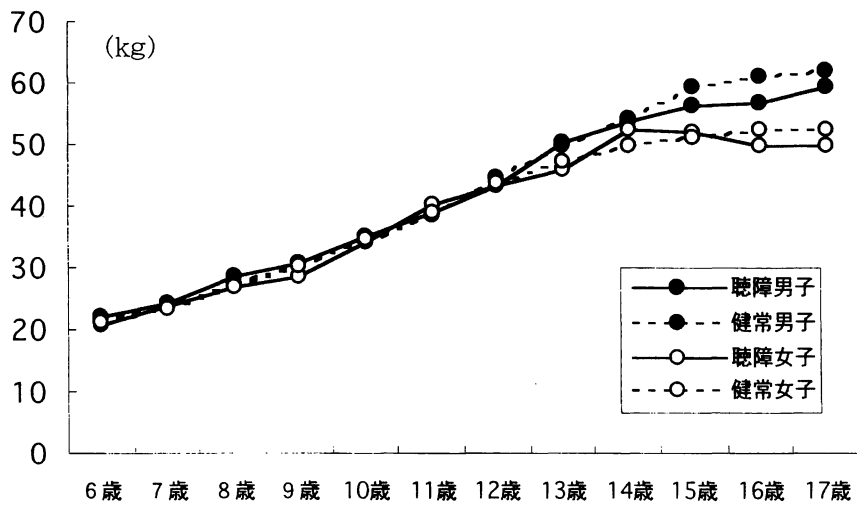


図 78 加齢に伴う体重の変化

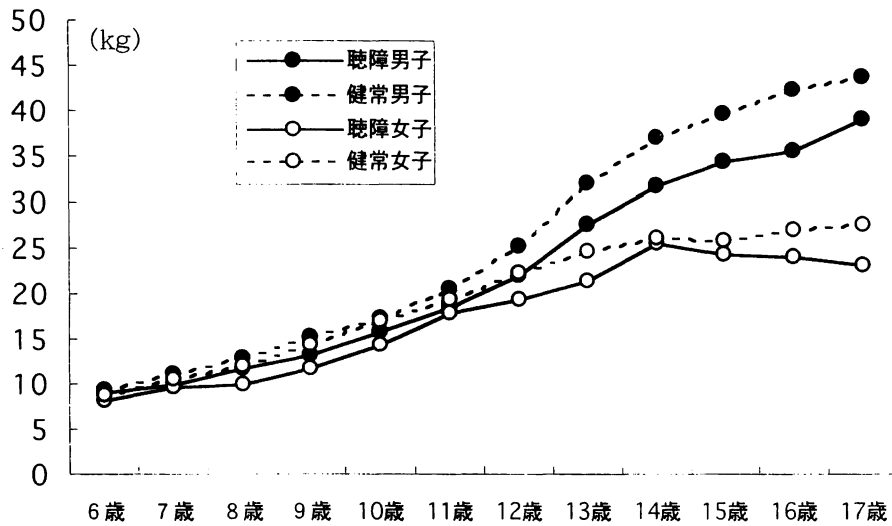


図 79 加齢に伴う握力の変化

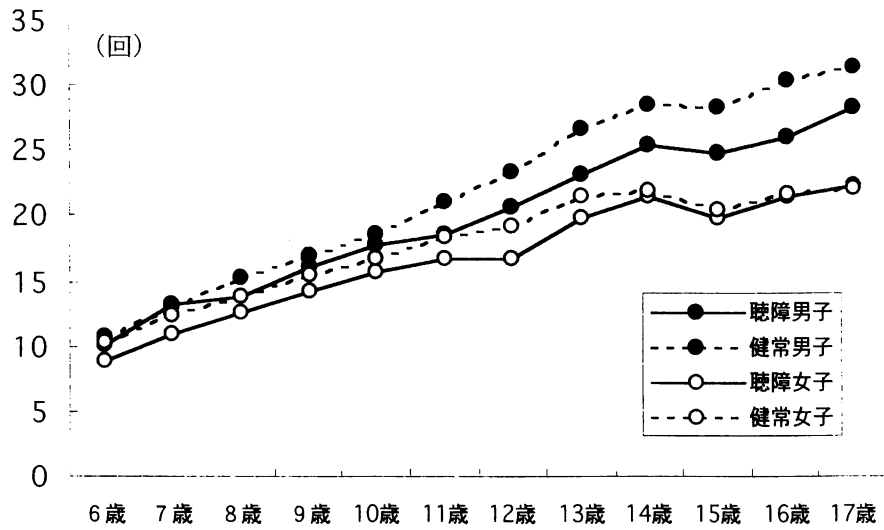


図 80 加齢に伴う上体起こしの変化

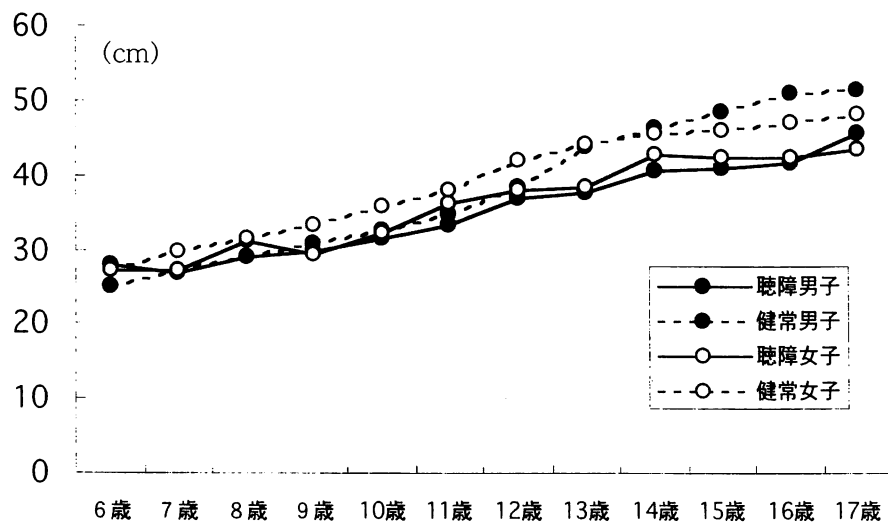


図 81 加齢に伴う長座体前屈の変化

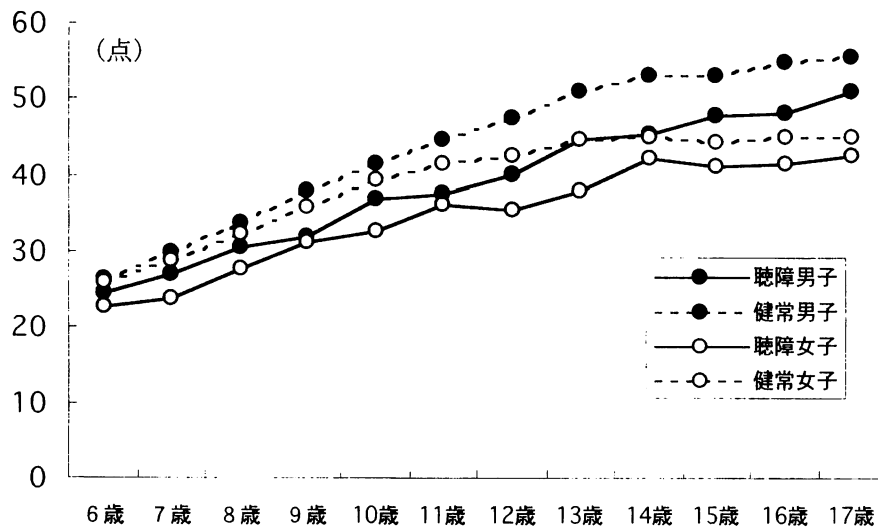


図 82 加齢に伴う反復横とびの変化

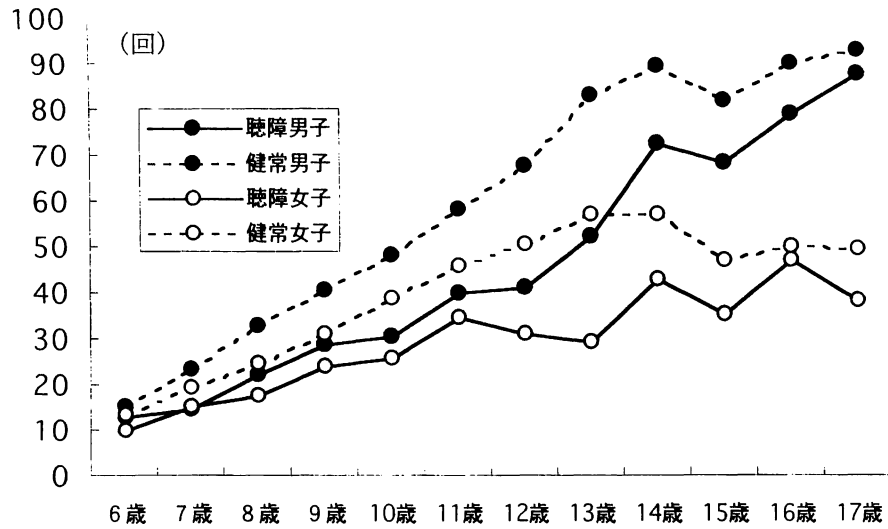


図 83 加齢に伴う 20m シャトルランの変化

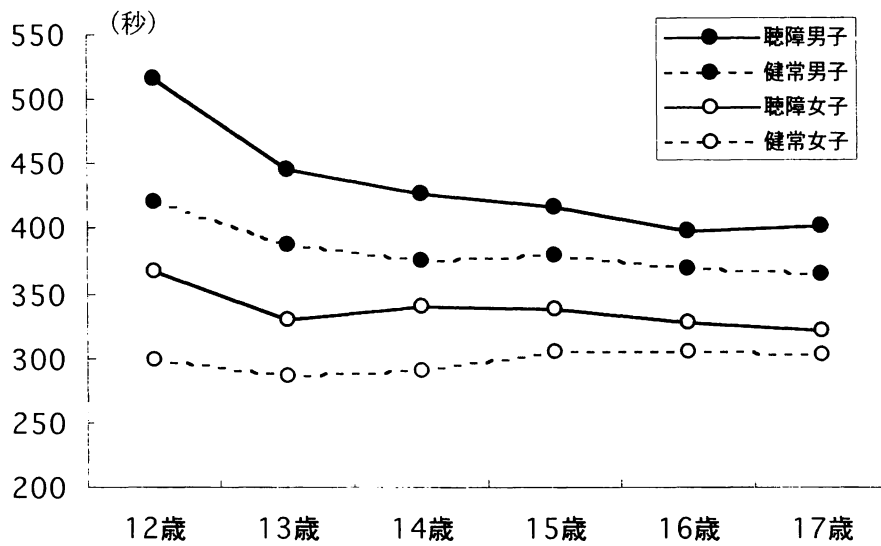


図 84 加齢に伴う持久走の変化

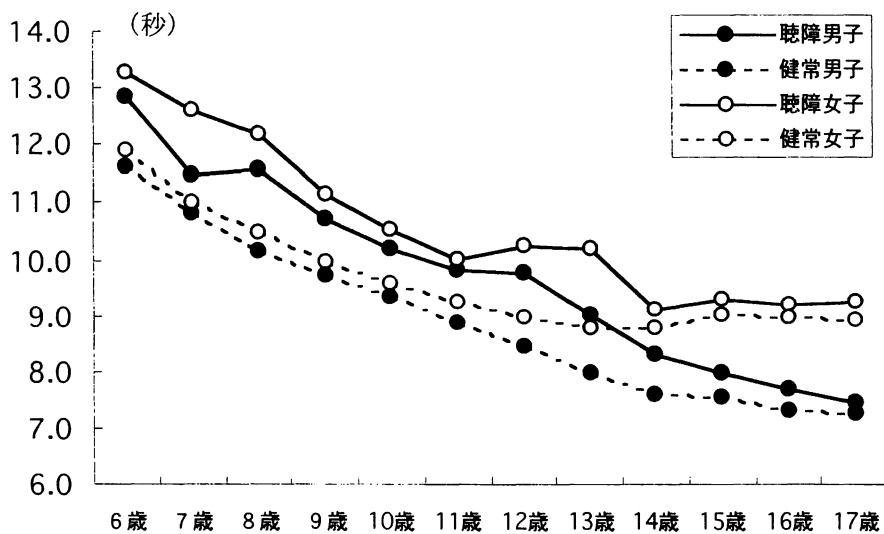


図 85 加齢に伴う 50m 走の変化

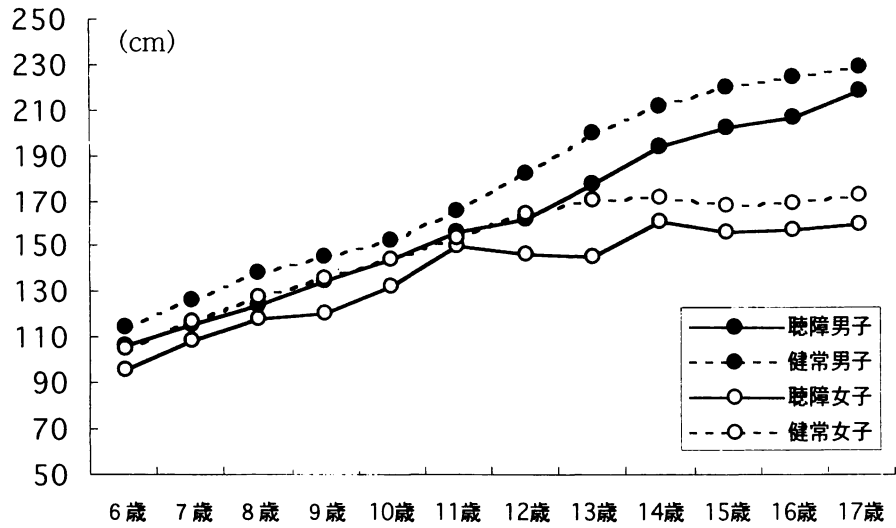


図 86 加齢に伴う立ち幅とびの変化

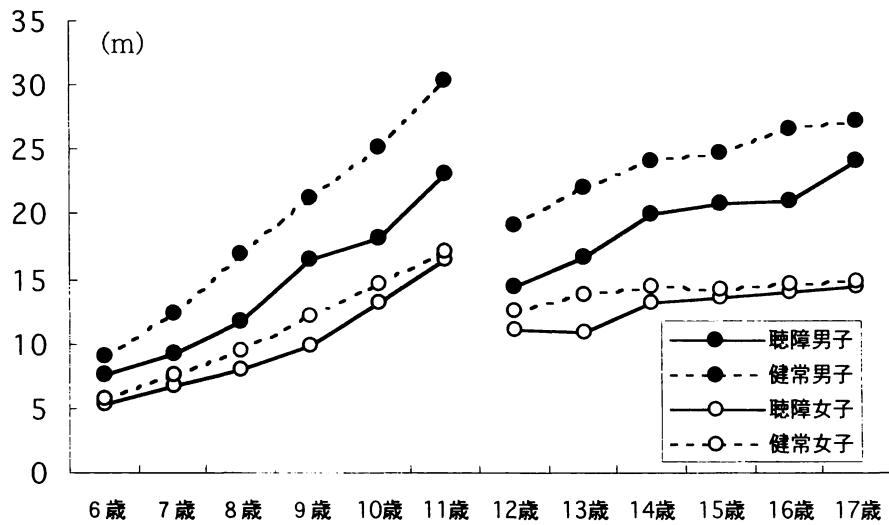


図 87 加齢に伴うボール投げの変化

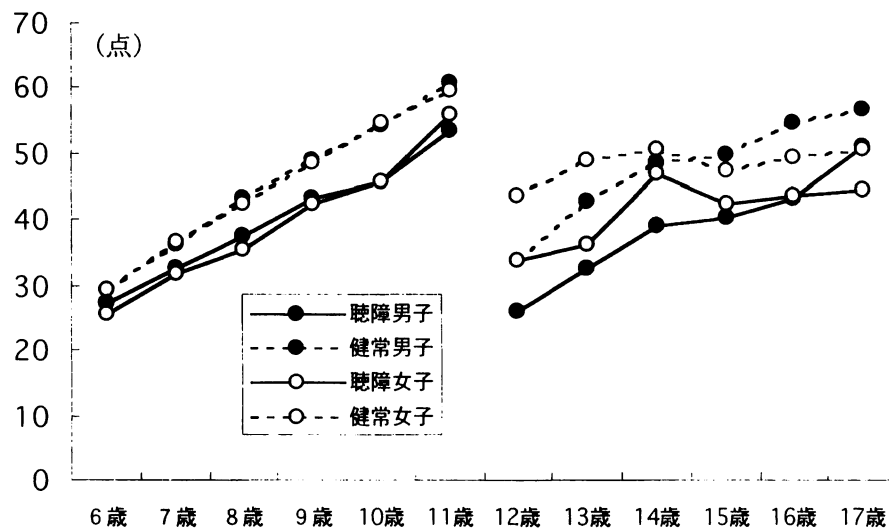


図 88 加齢に伴う新体力テスト合計点の変化

表28 聴覚障害児と健常児の体格、体力・運動能力の年齢別平均値・標準偏差と有意差検定結果（小学校）

項目	年齢	男子			女子			有意差検定結果		
		\bar{X}	SD	N	\bar{X}	SD	N	聴障男子-健常男子	聴障女子-健常女子	
身長 (cm)	6歳	117.40	5.89	76	115.58	5.43	69	NS	NS	
		116.89	5.00	1113	116.19	4.74	1113			
	7歳	123.26	5.64	79	121.07	8.44	70	NS	NS	
		122.63	5.20	1104	121.74	5.22	1089			
	8歳	127.94	5.97	100	126.22	7.77	75	NS	NS	
		128.24	5.42	1115	127.55	5.39	1107			
	9歳	132.93	6.85	122	131.34	6.65	86	NS	*	
		133.62	5.79	1108	133.71	5.93	1105			
	10歳	139.18	7.75	136	138.91	8.82	109	NS	*	
		139.08	5.91	1101	140.75	6.63	1102			
	11歳	145.18	8.92	144	146.81	7.92	84	NS	NS	
		145.13	7.02	1118	147.04	6.79	1116			
	体重 (kg)	6歳	22.17	4.64	76	20.87	4.14	69	NS	NS
			21.74	3.35	1095	21.31	3.26	1115		
7歳		24.39	4.56	79	23.75	5.12	70	NS	NS	
		24.09	3.78	1088	23.69	3.68	1076			
8歳		28.85	7.52	100	26.80	6.21	75	NS	NS	
		27.53	5.25	1114	26.80	4.54	1094			
9歳		30.84	7.47	122	28.50	6.78	86	NS	*	
		31.02	6.24	1096	30.26	5.42	1089			
10歳		35.17	9.18	136	34.42	9.39	109	NS	NS	
		34.51	6.84	1093	34.82	6.77	1088			
11歳		38.98	9.24	144	40.62	8.35	84	NS	NS	
		38.68	8.21	1108	39.31	7.56	1112			
握力 (kg)		6歳	9.07	3.72	52	8.12	2.71	55	NS	NS
			9.37	2.70	1065	8.75	2.45	1065		
	7歳	10.00	3.19	60	9.63	3.19	52	*	*	
		11.24	2.60	1052	10.62	2.47	1040			
	8歳	11.82	3.14	73	10.13	3.80	57	*	*	
		13.02	2.96	1076	12.06	2.86	1078			
	9歳	13.14	4.11	89	11.91	3.96	57	*	*	
		15.22	3.41	1085	14.28	3.38	1076			
	10歳	15.82	4.50	124	14.46	4.52	97	*	*	
		17.49	3.90	1072	16.93	4.07	1070			
	11歳	18.58	4.91	128	17.93	4.86	77	*	*	
		20.51	4.79	1083	19.36	4.50	1078			

項目	年齢	男子			女子			有意差検定結果	
		\bar{X}	SD	N	\bar{X}	SD	N	聴障男子-健常男子	聴障女子-健常女子
上体起こし (回)	6歳	10.20	6.28	51	9.00	5.38	54	NS	NS
		10.87	5.34	1115	10.27	4.93	1113		
	7歳	13.21	4.57	57	10.94	6.28	52	NS	*
		13.10	5.30	1102	12.35	5.09	1089		
	8歳	13.93	5.90	72	12.56	5.75	54	*	*
		15.36	5.50	1111	13.96	5.06	1107		
	9歳	16.09	5.70	85	14.31	6.26	55	NS	*
		17.04	5.66	1116	15.59	4.74	1111		
	10歳	17.84	5.57	114	15.73	6.05	93	NS	*
		18.65	5.72	1109	16.82	5.12	1116		
	11歳	18.63	5.81	120	16.85	7.32	68	*	*
21.07		5.31	1128	18.33	4.66	1122			
長座体前屈 (cm)	6歳	27.85	6.60	53	27.36	9.25	55	*	NS
		25.29	6.92	1123	27.38	7.20	1122		
	7歳	26.85	7.10	60	27.25	7.51	51	NS	*
		27.17	7.22	1111	29.68	6.97	1100		
	8歳	29.28	7.84	68	31.24	8.91	54	NS	*
		29.14	6.81	1119	31.50	6.92	1115		
	9歳	29.75	7.26	91	29.29	9.86	62	NS	*
		30.92	6.86	1119	33.35	7.00	1111		
	10歳	31.64	7.22	118	32.32	8.61	96	NS	*
		32.67	7.61	1109	36.03	7.95	1116		
	11歳	33.54	8.82	124	36.31	10.81	75	*	NS
34.91		7.54	1128	37.98	8.02	1123			
反復横とび (点)	6歳	24.57	6.07	60	22.98	6.47	55	*	*
		26.58	4.99	1100	26.00	4.57	1104		
	7歳	27.35	6.91	62	23.94	7.95	50	*	*
		30.04	5.79	1091	29.07	5.08	1081		
	8歳	30.74	8.11	73	27.91	7.86	57	*	*
		33.96	6.66	1105	32.37	5.70	1102		
	9歳	32.11	7.66	96	31.31	7.26	64	*	*
		38.12	6.89	1111	35.88	6.47	1100		
	10歳	37.01	8.38	120	32.99	6.62	92	*	*
		41.71	6.80	1097	39.50	6.27	1104		
	11歳	37.78	8.10	123	36.45	8.44	69	*	*
44.88		6.51	1123	41.53	5.65	1115			

項 目	年 齢	男 子			女 子			有意差検定結果	
		\bar{X}	SD	N	\bar{X}	SD	N	聴障男子-健常男子	聴障女子-健常女子
20m シャトル ラン (回)	6 歳	12.91	9.09	32	9.97	4.51	32	NS	*
		15.38	7.39	1097	13.70	5.75	1100		
	7 歳	14.71	7.20	31	15.03	9.36	31	*	*
		23.71	11.35	1090	19.51	8.26	1076		
	8 歳	22.52	14.95	46	17.44	11.38	32	*	*
		33.16	16.08	1110	24.80	11.08	1097		
	9 歳	28.63	15.38	49	24.19	13.54	37	*	*
		40.61	17.84	1119	31.43	12.82	1099		
	10 歳	30.42	16.13	79	25.80	14.15	60	*	*
		48.26	19.88	1102	38.68	15.73	1112		
	11 歳	40.16	19.72	90	34.86	18.34	44	*	*
58.44		20.64	1126	46.06	16.47	1121			
50m 走 (秒)	6 歳	12.86	2.06	73	13.31	2.14	65	*	*
		11.65	1.04	1110	11.93	1.05	1114		
	7 歳	11.51	1.92	69	12.61	3.71	65	*	*
		10.83	1.01	1110	11.01	0.83	1088		
	8 歳	11.59	3.73	93	12.19	5.00	64	*	*
		10.16	0.84	1101	10.50	0.82	1101		
	9 歳	10.72	1.66	110	11.18	2.17	77	*	*
		9.75	0.82	1109	9.99	0.73	1095		
	10 歳	10.20	1.41	130	10.55	1.54	106	*	*
		9.36	0.80	1090	9.62	0.78	1110		
	11 歳	9.85	1.75	140	10.04	2.10	80	*	*
8.91		0.76	1119	9.25	0.65	1113			
立ち幅とび (cm)	6 歳	107.12	23.72	68	96.62	26.38	60	*	*
		114.61	18.64	1118	105.59	17.49	1119		
	7 歳	116.03	20.77	67	109.08	28.86	60	*	*
		127.08	17.04	1108	117.38	16.68	1095		
	8 歳	124.53	24.91	86	118.48	25.96	65	*	*
		138.65	18.19	1114	128.12	17.92	1112		
	9 歳	135.13	18.45	108	120.55	28.83	65	*	*
		145.49	18.62	1110	136.92	18.00	1107		
	10 歳	144.31	30.06	126	133.29	23.11	94	*	*
		153.47	19.32	1100	145.26	19.61	1095		
	11 歳	156.91	30.30	134	150.05	30.57	77	NS	*
166.54		20.38	1118	154.28	19.34	1109			

項 目	年 齢	男 子			女 子			有意差検定結果	
		\bar{X}	SD	N	\bar{X}	SD	N	聴障男子-健常男子	聴障女子-健常女子
ソフトボール 投げ (m)	6 歳	7.71	3.13	59	5.39	1.91	56	*	NS
		9.16	3.36	1115	5.83	1.93	1117		
	7 歳	9.34	4.62	59	6.81	3.56	53	*	NS
		12.37	4.37	1106	7.61	2.33	1089		
	8 歳	11.85	4.34	87	8.13	2.85	64	*	*
		17.08	5.91	1116	9.55	2.95	1104		
	9 歳	16.52	6.85	99	10.03	4.00	62	*	*
		21.42	7.10	1116	12.31	3.73	1100		
	10 歳	18.30	7.58	124	13.25	6.04	95	*	*
		25.20	7.88	1105	14.80	4.81	1111		
	11 歳	23.25	8.95	130	16.48	6.39	73	*	NS
		30.42	9.00	1126	17.19	5.38	1112		
合計点 (点)	6 歳	27.26	9.29	31	25.85	7.40	33	*	*
		29.46	6.06	1011	29.38	6.14	1026		
	7 歳	32.76	6.52	29	32.04	10.04	27	*	*
		36.35	6.71	1022	36.65	6.27	990		
	8 歳	37.60	8.80	45	35.77	10.67	31	*	*
		43.32	7.41	1046	42.44	6.98	1036		
	9 歳	43.24	9.50	45	42.38	11.30	34	*	*
		48.97	7.93	1051	48.82	7.19	1026		
	10 歳	45.71	9.82	75	45.96	9.94	56	*	*
		54.33	8.42	1031	54.76	8.46	1027		
	11 歳	53.45	10.92	89	56.20	11.95	41	*	*
		60.90	8.40	1060	59.86	7.79	1036		

上段：聴覚障害児、下段：健常児

* $p < 0.05$

表29 聴覚障害生徒と健常生徒の体格、体力・運動能力の年齢別平均値・標準偏差と有意差検定結果（中学校）

項目	年齢	男子			女子			有意差検定結果	
		\bar{X}	SD	N	\bar{X}	SD	N	聴障男子-健常男子	聴障女子-健常女子
身長 (cm)	12歳	150.89	10.05	86	149.16	6.93	60	*	*
		153.46	7.94	1382	152.35	5.75	1370		
	13歳	158.29	7.98	120	152.06	7.83	88	*	*
		160.86	7.70	1388	155.23	5.16	1391		
	14歳	162.87	8.16	117	156.18	7.63	92	*	NS
		165.58	6.33	1399	156.76	5.02	1406		
体重 (kg)	12歳	43.28	9.84	86	43.58	9.68	60	NS	NS
		44.66	9.11	1363	44.10	7.26	1350		
	13歳	50.26	11.19	120	45.90	9.17	87	NS	*
		50.09	8.94	1366	47.44	6.95	1374		
	14歳	53.76	11.88	117	52.58	12.30	91	NS	*
		54.41	8.56	1378	49.90	6.66	1384		
握力 (kg)	12歳	21.93	7.54	85	19.27	4.99	55	*	*
		25.38	6.60	1339	22.39	4.43	1311		
	13歳	27.70	7.95	116	21.34	6.60	87	*	*
		31.92	7.46	1346	24.75	4.49	1349		
	14歳	31.75	8.68	116	25.48	6.39	90	*	NS
		36.99	7.28	1328	26.12	4.66	1342		
上体起こし (回)	12歳	20.70	6.08	82	16.80	5.62	50	*	*
		23.30	5.16	1400	19.25	4.97	1387		
	13歳	23.25	6.43	115	19.96	5.70	83	*	*
		26.79	5.69	1402	21.44	4.95	1409		
	14歳	25.38	7.35	103	21.24	5.67	83	*	NS
		28.49	5.78	1404	21.85	5.52	1408		
長座体前屈 (cm)	12歳	37.07	8.01	83	38.19	11.08	54	NS	*
		38.53	9.09	1398	42.10	8.69	1391		
	13歳	37.75	9.26	113	38.46	11.32	84	*	*
		43.83	9.51	1403	44.26	9.20	1410		
	14歳	40.58	10.86	104	42.61	10.73	80	*	*
		46.49	9.82	1404	45.67	9.91	1408		
反復横とび (点)	12歳	40.17	8.24	86	35.63	9.01	52	*	*
		47.80	6.45	1384	42.87	5.54	1376		
	13歳	44.71	8.57	114	37.95	8.15	85	*	*
		51.34	6.57	1387	44.83	5.80	1396		
	14歳	45.50	10.64	115	42.28	6.85	85	*	*
		53.14	6.83	1392	45.20	5.89	1396		
20mシャトル ラン (回)	12歳	41.10	18.19	29	30.94	13.88	17	*	*
		67.74	21.33	765	50.40	17.90	778		
	13歳	52.32	25.07	41	29.68	10.83	28	*	*
		82.72	22.70	782	57.28	19.07	797		
	14歳	72.64	23.82	28	43.12	19.89	26	*	*
		89.69	23.54	773	56.80	20.30	786		

項目	年齢	男子			女子			有意差検定結果	
		\bar{X}	SD	N	\bar{X}	SD	N	聴障男子-健常男子	聴障女子-健常女子
持久走 (秒)	12歳	511.98	133.39	46	366.77	85.61	31	*	*
		422.03	55.73	794	299.77	39.32	808		
	13歳	446.11	107.96	62	330.73	65.15	45	*	*
		388.07	53.27	777	287.34	39.41	745		
	14歳	427.71	99.95	73	341.86	98.73	51	*	*
		375.44	47.70	782	291.37	39.36	787		
50m走 (秒)	12歳	9.78	2.32	83	10.27	1.73	54	*	*
		8.47	0.74	1389	8.98	0.64	1373		
	13歳	9.04	2.34	112	10.19	1.95	79	*	*
		7.97	0.74	1398	8.80	0.69	1395		
	14歳	8.33	1.40	109	9.14	1.04	79	*	*
		7.60	0.61	1379	8.80	0.75	1403		
立ち幅とび (cm)	12歳	162.98	32.15	83	146.48	31.40	52	*	*
		182.35	22.49	1384	164.63	21.96	1385		
	13歳	177.94	40.01	113	145.79	28.68	84	*	*
		200.16	23.53	1383	170.32	21.99	1394		
	14歳	194.58	31.67	105	161.29	27.41	80	*	*
		212.61	23.24	1370	171.35	22.07	1387		
ハンドボール 投げ (m)	12歳	14.49	4.83	76	11.09	4.01	45	*	*
		19.29	4.53	1391	12.53	3.44	1384		
	13歳	16.85	5.65	110	10.92	4.31	75	*	*
		22.06	5.03	1399	13.92	3.76	1403		
	14歳	20.04	6.83	101	13.31	3.79	78	*	*
		24.29	5.38	1401	14.56	3.98	1407		
合計点 (点)	12歳	26.18	8.49	67	34.15	12.61	33	*	*
		34.04	8.01	1286	43.67	9.19	1264		
	13歳	32.65	10.62	95	36.41	12.66	63	*	*
		42.89	9.55	1292	49.06	10.14	1301		
	14歳	39.18	13.63	87	47.02	12.64	56	*	*
		48.89	9.47	1257	50.58	10.75	1289		

上段：聴覚障害生徒、下段：健常生徒

* $p < 0.05$

表30 聴覚障害生徒と健常生徒の体格、体力・運動能力の年齢別平均値・標準偏差と有意差検定結果（高等学校）

項目	年齢	男子			女子			有意差検定結果	
		\bar{X}	SD	N	\bar{X}	SD	N	聴障男子-健常男子	聴障女子-健常女子
身長 (cm)	15歳	166.20	7.34	126	153.66	14.62	95	*	*
		168.50	5.63	1405	157.11	5.07	1390	*	*
	16歳	167.49	7.08	161	154.46	6.35	128	*	*
		169.89	5.80	1421	157.43	5.22	1418	*	*
	17歳	168.40	6.89	110	154.57	7.20	79	*	*
		170.57	5.66	1427	158.08	5.28	1402		
体重 (kg)	15歳	56.51	12.22	125	51.96	9.99	94	*	NS
		59.40	9.30	1387	51.44	7.38	1360	*	
	16歳	56.89	10.88	161	50.16	8.18	125	*	*
		61.28	9.13	1402	52.48	7.14	1386	*	*
	17歳	59.44	11.37	110	50.02	9.24	78	*	*
		62.28	8.79	1402	52.69	6.98	1367		
握力 (kg)	15歳	34.28	7.96	123	24.48	5.22	98	*	*
		39.74	6.59	1182	25.83	4.60	1192	*	*
	16歳	35.58	8.16	161	24.00	4.79	139	*	*
		42.25	6.70	1214	26.92	4.75	1207	*	*
	17歳	39.15	8.28	117	23.15	6.01	85	*	*
		43.72	7.18	1203	27.64	5.10	1204		
上体起こし (回)	15歳	24.94	5.43	109	19.98	5.51	90	*	NS
		28.42	5.71	1228	20.55	5.79	1243	*	
	16歳	26.04	5.45	138	21.48	5.83	124	*	NS
		30.41	5.89	1264	21.66	6.29	1258	*	
	17歳	28.47	6.61	93	22.30	6.09	74	*	NS
		31.42	6.26	1250	22.15	6.20	1243		
長座体前屈 (cm)	15歳	41.12	10.49	117	42.37	1.63	94	*	*
		48.40	9.95	1229	45.89	9.97	1244	*	*
	16歳	41.63	10.91	152	42.38	10.21	133	*	*
		50.85	10.29	1266	47.20	9.86	1261	*	*
	17歳	45.80	10.36	106	43.40	11.60	81	*	*
		51.55	10.45	1253	47.97	10.06	1249		
反復横とび (点)	15歳	47.94	7.29	122	41.37	7.97	94	*	*
		53.37	6.80	1212	44.64	5.86	1227	*	*
	16歳	48.50	8.99	153	41.73	7.64	132	*	*
		55.02	7.10	1246	45.07	6.15	1246	*	*
	17歳	51.02	10.71	115	42.60	8.22	82	*	*
		55.79	7.17	1238	45.18	6.14	1234		
20m シャトル ラン (回)	15歳	68.00	26.89	32	35.27	15.54	26	*	*
		81.98	23.85	580	46.87	17.14	570	*	*
	16歳	78.92	29.28	38	47.28	20.61	29	*	NS
		89.81	26.87	623	49.92	19.28	608	*	
	17歳	87.37	28.89	27	38.39	12.43	23	*	*
		93.17	26.27	603	49.31	18.94	581		

項 目	年 齢	男 子			女 子			有意差検定結果	
		\bar{X}	SD	N	\bar{X}	SD	N	聴障男子-健常男子	聴障女子-健常女子
持久走 (秒)	15 歳	417.42	92.84	76	339.38	64.54	58	*	*
		381.12	51.66	679	306.54	41.38	701		
	16 歳	398.07	90.01	103	328.56	65.89	81	*	*
		368.91	53.36	687	305.63	44.12	699		
	17 歳	402.06	93.80	70	323.04	53.52	45	*	*
		365.87	52.76	697	303.70	47.82	721		
50m 走 (秒)	15 歳	7.99	0.96	118	9.33	1.44	89	*	*
		7.54	0.69	1226	9.02	0.76	1229		
	16 歳	7.70	0.96	156	9.22	1.05	126	*	*
		7.34	0.56	1247	8.97	0.81	1241		
	17 歳	7.49	1.22	113	9.27	1.21	81	*	*
		7.26	0.60	1247	8.93	0.82	1230		
立ち幅とび (cm)	15 歳	202.14	30.18	115	156.97	26.10	89	*	*
		220.07	23.57	1200	167.99	22.54	1223		
	16 歳	207.93	28.11	136	157.40	27.70	121	*	*
		225.64	23.40	1231	169.64	23.72	1235		
	17 歳	219.52	27.42	95	160.17	27.90	75	*	*
		230.45	22.63	1230	172.72	22.20	1228		
ハンドボール 投げ (m)	15 歳	20.89	6.45	116	13.60	4.48	88	*	NS
		24.94	5.52	1228	14.30	4.11	1242		
	16 歳	21.13	6.20	142	14.02	4.62	125	*	NS
		26.69	5.41	1262	14.64	3.97	1259		
	17 歳	24.23	6.73	102	14.51	4.38	78	*	NS
		27.33	5.51	1250	14.98	3.85	1237		
合計点 (点)	15 歳	40.37	11.19	98	42.47	12.70	76	*	*
		50.12	9.39	1123	47.67	10.35	1128		
	16 歳	43.44	11.73	126	43.73	12.30	101	*	*
		54.79	9.74	1128	49.69	11.18	1141		
	17 歳	50.99	11.40	79	44.47	12.81	60	*	*
		56.70	9.72	1150	50.74	10.98	1132		

上段：聴覚障害生徒、下段：健常生徒

* $p < 0.05$

表 31 有意差検定結果一覧表

年齢(歳)	性別	身長 (cm)	体重 (kg)	握力 (kg)	上体起こし (回)	長座体前屈 (cm)	反復横とび (回)	20mシャトルラン (回)	持久走 (秒)	50m走 (秒)	立ち幅とび (cm)	ボール投げ (m)	合計点 (点)
6歳	男子	NS	NS	NS	NS	*	*	NS	/	*	*	*	*
	女子	NS	NS	NS	NS	NS	*	*		*	*	NS	*
7歳	男子	NS	NS	*	NS	NS	*	*	/	*	*	*	*
	女子	NS	NS	*	*	*	*	*		*	*	NS	*
8歳	男子	NS	NS	*	*	NS	*	*	/	*	*	*	*
	女子	NS	NS	*	*	*	*	*		*	*	*	*
9歳	男子	NS	NS	*	NS	NS	*	*	/	*	*	*	*
	女子	*	*	*	*	*	*	*		*	*	*	*
10歳	男子	NS	NS	*	NS	NS	*	*	/	*	*	*	*
	女子	*	NS	*	*	*	*	*		*	*	*	*
11歳	男子	NS	NS	*	*	*	*	*	/	*	NS	*	*
	女子	NS	NS	*	*	NS	*	*		*	*	NS	*
12歳	男子	*	NS	*	*	NS	*	*	*	*	*	*	*
	女子	*	NS	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
13歳	男子	*	NS	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
	女子	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
14歳	男子	*	NS	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
	女子	NS	*	NS	NS	*	*	*	*	*	*	*	*
15歳	男子	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
	女子	*	NS	*	NS	*	*	*	*	*	*	NS	*
16歳	男子	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
	女子	*	*	*	NS	*	*	NS	*	*	*	NS	*
17歳	男子	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
	女子	*	*	*	NS	*	*	*	*	*	*	NS	*

* P<0.05 健常群が聴覚障害群を上回る。

(注) 6～11歳はソフトボール投げ、12～17歳はハンドボール投げ。

【参考文献】

文部科学省 (2004) : 平成 15 年度 体力・運動能力調査報告書」

岡本三郎 (1994) : 聴覚障害児童生徒の体力特性. 平成 6 年度筑波大学修士論文.

奥田体育賞会編 (1978) : 全国聾学校体育のあゆみ.104-136.

大河原潔、藤田千代、佐々木正人、伊藤忠一、井野省三、金子 修、福光英彦、松沢 正、桜井 博、及川 力、奈良 隆、山崎栄美子、後藤邦夫、笠見知史、浜田志朗、立川 博、古橋良男、齊藤秀元、香川邦生、

山本昌邦 (1985) : 盲学校・聾学校及び養護学校における体力・運動能力に関する基礎的調査研究 (その 2)

筑波大学学校教育部心身障害教育研究分野

大河原潔、藤田千代、佐々木正人、伊藤忠一、井野省三、金子 修、福光英彦、松沢 正、桜井 博、及川
力、奈良 隆、山崎栄美子、後藤邦夫、笠見知史、浜田志朗、立川 博、古橋良男、斉藤秀元、香川邦生、
山本昌邦（1986）：盲学校・聾学校及び養護学校における体力・運動能力に関する基礎的調査研究（その3）。
筑波大学学校教育部心身障害教育研究分野

第6章 通常の学校における聴覚障害児童・生徒への支援

近年の聴覚障害児童・生徒の通常の学校への進学増加に伴い、通常の学校における彼らへの教育的支援には多様な措置、手段が取られるようになってきている。本調査では現在の状況を明らかにする目的で、主に教科での情報保障のために「教育補助員」のような何か特別な措置を取っているか、及び体育の授業等の場面で指導者がどのような配慮を聴覚障害児童・生徒に対して行なっているかを尋ねたので、その概要を報告する。

1 小学校における支援

(1) 補助員、介助員等による支援

『聴覚障害児の在籍する通常の小学校の中には、「教育補助員」を配置して各教科での情報保障（要約筆記や手話通訳）を含む学校生活全体のサポートを行ない、教育効果を挙げている例があります。貴校では在籍する聴覚障害児の教育のために、上記の「教育補助員」のような何か特別な措置を取っておられますか。』という質問をした。

回答を寄せた135校のうち、補助員（あるいは指導員）の措置があると回答した学校は3校（3市2県）であった。このうち、2校は市指導員ないしは市が雇用という記載が見られたため、自治体が財政措置を講じて支援していると考えられるが、他の1校はどのような扱いなのか不明であった。

聴覚障害児への支援は、ほとんどが難聴学級担任や通級教室担当者による支援によるものであった。形態としては手話通訳とノートテイク（あるいはパソコン要約筆記）が主であった。

なお、参考のため、回答があった各学校の内容を表32に示す。

(2) 体育等における支援

「体育の時間や運動会の練習のような活動の時に、指導される先生は聴覚障害児に対してどのような配慮をなさっていますか。」という質問をしたところ、137校から回答があった。主な回答は以下の通りである。

難聴学級担任が児童とともに授業（運動会を含む）に入り、手話通訳などの支援をするという回答が40校（29.2%）あった。

また、「周囲の子どもたちが支援（伝える、一緒に行動する等）できるよう指導している」という回答に代表されるような同じクラスの健聴児童による支援も29校（21.2%）見られた。

その他の配慮事項を以下に記す。

- ・FM補聴器の使用。
- ・教師の（話を聞きやすい見やすい）前（の方）に配置する。
- ・口形が見やすいように光の射す位置、口の開き方、顔の向き、話す速度に注意する。
- ・スタートの合図とかを笛だけでなく、旗を使ったりする。
- ・授業のポイントを板書する。
- ・授業前と授業後に話をする（全体指導後に個別に指導する）。
- ・教師の動作（身体の動き）を大きくし、理解の助けにする。

なお、参考のため、回答があった各学校の内容を表32に示す。

2 中学校における支援

(1) 補助員、介助員等による支援

『聴覚障害生徒の在籍する通常の中学校の中には、「学校生活支援員」を配置して各教科での情報保障（ノートテイクや手話通訳）を行ない、教育効果を挙げている例があります。貴校では在籍する聴覚障害生徒の教育のために、上記の「学校生活支援員」のような何か特別な措置を取っておられますか。』という質問をした。

回答を寄せた38校のうち、支援員の措置があると回答した学校は5校（2市2県）であった。このうち、4校は市が「教育補助員を要望に応じて配置してくれる特別な措置をとってくれる」という記載が見られたため、自治体が財政措置を講じて支援していると考えられるが、他の1校はどのような扱いなのか不明であった。

聴覚障害生徒への支援は、ほとんどが難聴学級担任によるものであった。形態としては手話通訳とノートテイク（パソコン要約筆記を含む）が主であった。なお、朝礼、ホームルームや行事の場面において、通常学級のボランティア生徒による手話通訳及びノートテイク（あるいはパソコン要約筆記）が数件見られた。

参考のため、回答があった各学校の内容を表33に示す。

（2）体育等における支援

「体育の時間や体育祭の練習あるいはスポーツ系の課外活動のような活動の時に、指導される先生は聴覚障害生徒に対してどのような配慮をなさっていますか。」という質問をしたところ、37校から回答があった。主な回答は以下の通りである。

- ・生徒の正面に向かい、できるだけゆっくり、大きな声ではっきり話す。
- ・話の内容や指示が伝わっているか確認しながら授業を進める。
- ・黒板やホワイトボードへの板書、筆談やメモ等視覚的な補助手段を多用する。

小学校時代と異なり、難聴学級担任が児童とともに授業に入り、手話通訳などの支援をするという回答は、体育祭等を除いてめっきりと少なくなっている。

また、「周囲の生徒による支援」は小学校に引き続き行なわれている。

参考のため、回答があった各学校の内容を表33に示す。

3 高等学校における支援

（1）補助員、介助員等による支援

『近年、聴覚障害生徒の在籍する通常の中学校の中には、「学校生活支援員」を配置して各教科での情報保障（ノートテイクや手話通訳）を行ない、教育効果を挙げている例が徐々に増加しつつありますが、高校ではほとんど報告例がありません。そこでお尋ねしますが、貴校では在籍する聴覚障害生徒の教育のために、上記の「学校生活支援員」のような何か特別な措置を取っておられますか。』という質問をした。

回答を寄せた28校のうち、なんらかの措置があると回答した学校は2校（2県。いずれも県立高校）であった。どのような財政的措置なのかは明確ではないが、このような教育的支援が通常の高等学校で学ぶ聴覚障害生徒へ実施されることは、今後大いに期待されることである。

小学校や中学校と異なり、高等学校で学ぶ聴覚障害生徒への特別な支援は、あまり行なわれていないようである。何らかの措置があると回答した上記2校以外は、バックアップ体制が脆弱な印象が否めない。

なお、「クラスメイトによるノートテイクを行なっている」という記述が1件だけ見られた。

参考のため、回答があった各学校の内容を表34に示す。

（2）体育等における支援

「体育の時間や体育祭の練習あるいはスポーツ系の課外活動のような活動の時に、指導される先生は聴覚障害生徒に対してどのような配慮をなさっていますか。」という質問をしたところ、27校から回答があった。主な回答は以下の通りである。

- ・生徒の正面に向かい、できるだけゆっくり、大きな声ではっきり話す。
- ・黒板やホワイトボードへの板書、筆談やメモ等視覚的な補助手段を多用する。

「周囲の生徒による配慮、支援、サポート」という回答は5件見られた。

参考のため、回答があった各学校の内容を表34に示す。

表 32 小学校における支援状況

学校名	学校としての措置	体育授業時の配慮
1	取っていない	<ul style="list-style-type: none"> ・危険のないよう、常に目を離さない。 ・無理な動きはさせない。 ・すぐに支援できるような距離にいる。
2	なし	特になし
3	なし	<ul style="list-style-type: none"> ・水泳の時間は、教師の指示が伝わりにくいので、T Tの形態で、難聴児の補助をT 2の教師がやっている。 ・大きな声で、手ぶりなども交えて指示を出すようにしている。
4	なし	特になし。当日、出発の合図ピストルプラス赤旗で行ってもらう。
5	特になし	校内通級児の時、必要に応じて、担当者の可能な範囲で在籍学級の練習時間にサポートに入ることがある。
6	児童本人が手話を覚えることと、学級全体で関心を持ち理解が深まることを願って、月に1、2回放課後、手話ボランティア及び聴覚障害者から手話を習っている。 (手話サークル)	
7	教育補助員のような補助員を配置していないが、在籍児の為、教室ではスピーチプロセッサへ直接音が入るように、本人用のワイヤレスマイクを使用している。また、体育館、運動場では、アンプから音をワイヤレスマイクへライン入力できるような施設・設備保障を行っている。	体育の学習では、聴覚障害児学級担任と普通学級の担任が協力して行っている。主に指導する教員がワイヤレスマイクを使用している。スピーチプロセッサやワイヤレスマイクが使用できない水泳、すもう、運動会等においては、聴覚障害児学級担任が、筆記して伝えるようにしている。
8	要約筆記や手話通訳などの教育補助員はいないが、難聴学級担任が行っている。	難聴学級担任ができるだけそばについて支援している。
9	取っていません。	難聴学級担任が側にいて全体の指示を本人に説明したり、また、教師や児童を使つての模範演技やルールの説明をして、視覚でとらえてもわかりやすい説明を心がけている。
10	特になし	特になし
11	難聴学級担任が、手話通訳や、ノートを使つての学習補助を行っている。	難聴学級担任が通訳の為、常に付き添っている。
12	いない	そばについていて指導します。
13	一部の教科において、交流学級での学習は付き添い教師がノートテイクをしたり個別に指導したりしています。また、T・Tで教科指導をすることで、情報保障も行っています。	T 1は、教師の前に位置させ、口形が見やすいように光の射す位置、口の開き方、話す速度に配慮しています。 T 2は、聴覚障害児のそばに位置し、たずねてきたらかみくだいて伝えています。
14	取っておりません。	交流教室の教師や、全校で一斉に体育主任が指導をする場合、難聴学級担任が身振りやサインで通訳をしている。

学校名	学校としての措置	体育授業時の配慮
15	難聴学級在籍児童は1名ですので、難聴学級担任がサポートできます（FMマイク（補聴器）、指文字、手話など）	FM補聴器がルールの説明や運動会のダンスなどで大変役立っている。
16	児童1名が在籍です。担任がしています。	<ul style="list-style-type: none"> ・話しが聞けて、移動がスムーズにできているか ・授業前と授業後に話しをしている
17	取っていません。	非常に運動能力の高い子なので、運動面に関しては配慮をしております。
18	難聴学級担任が、国語と算数は個別に指導し、他の教科は交流学級で学習する。その際、難聴学級の担任がサポートする。	<ul style="list-style-type: none"> ・スタートの合図とか、笛だけでなく旗を使ったりする。 ・マイクより生の声を大きくする。 ・顔を向けて正面から話す。
19	教育補助員はつけていない。難聴学級担任が、交流学級での授業に入り、様子を見ながら必要な場合に補助に入っている。	特別な配慮は行っていない。
20	特になし。	<ul style="list-style-type: none"> ・手話で内容を伝えるようにして、配慮している。 ・交流学級担任が、体育は指導者となるので、できるだけ声でなく、サインetcを使って指示するように配慮をお願いしている。学級担任は、常に児童と参加し、内容は伝えるようにしている。
21	<ul style="list-style-type: none"> ・国語と道徳は難聴学級で1対1で担任が行う。 ・社会や総合学習、理科などは通常の学級で児童のとなりに難聴学級担任がついて必要なときその都度情報を伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童に口を見せ、ゆっくりしゃべるように心がけている。 ・児童の注目を教師の方に向けて指示をするようにしている。
22	1名の児童に難聴学級担任がついて、必要な支援を行っている。	<ul style="list-style-type: none"> ・要約筆記や個別に指示をしたりしている。様子を見て、あとで、個別に確認することもある。 ・授業のポイントは、体育館であれば、板書する。（ゲームのルールなど）
23		体育の時間には競技説明のとき、ゆっくり話したり（読話できるので）、スタート時には旗を振ったりと支援している。
24	教育補助員の配置はない。しかし在籍児童2名のうち1名は聴力レベルが100dB以上で、情報保障は必要不可欠であるので、難聴学級担任が通常のクラスの各教科において手話通訳等サポートしている。	<ul style="list-style-type: none"> ・指示はできるだけ口を大きくはっきりと、他の説明は難聴学級担任が手話通訳している。 ・運動会の行進等、リズム関係は初めに指で拍をきざみ覚えてもらい、運動技能に関することは、動作できっちり示すようにしている。
25	特になし。	特になし。
26	難聴学級が設置されており、常時難聴学級担任が学習補助や個別指導等に当たることができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・大きな声で話す。 ・必要に応じて動作化を交えて指示を出す。
27	難聴学級担任が手話、キューサイン、必要な場合は絵を描くなどで通訳している。	担任がTTについて通訳

学校名	学校としての措置	体育授業時の配慮
28	自校、他校共に教育補助員の措置はありません。	視覚（文字、色）からの情報の補償と近くにいる児童からの情報提供
29	ありません。	・図や絵を使って説明する。 ・スタートは音ではなく旗で合図する。
30	取っていない。	難聴学級担任も、体育の時間に、つくようにしている。
31	取っていません。	体育の時間は、他の児童（障がい児学級）との関係で難聴学級担任はついて入っていないので、特別な配慮はしていませんが、交流学級の担任が常に聞こえているか声かけをしてくれています。
32	「市指導員」の措置がある。	・指文字、かんたんな手話、身ぶりなどで、行く方向やする内容を示す。 ・周囲の子どもたちに「教師の指示が伝わっていないと考えられる時は、伝えてあげる」ことをふだんから話しておく。 ・難聴学級担任や指導員の聴障児への保障ができる空き時間があれば、指導に入って、ともに指導してもらうよう働きかける
33	なし。	担任がメモ用紙に書いて知らせたり、そばについている。
34	担任以外に補助教員一名（週12時間）	・FM補聴器の使用 ・黒板で説明する ・個人的に声をかけるなど
35	難聴学級として、主に、国語、算数、自立を難聴学級担任がみています。また、時間の許す限り交流学級の社会、理科、音楽、図工、体育にも、サポートにしています。	難聴学級担任がついていく時もありますが、ついていけない場合は、本人に分かるように説明しています。また、クラスの子にも、サポートしてもらえようグループ作りを考えています。
36	取っていない。	指示が伝わっているかどうか声かけをして確認したり、指導者の口元がよく見えるように、太陽の位置などを考えて、集合形態を変えるなど。また、話をする時に、近くに来るように声をかけ、指導者のそばで聞けるようにする。
37	「教育補助員」はいない。	運動会の練習は、学年全体で行うので難聴学級担任が、そばに付いて練習に支障のないようにコミュニケーションをとるなどの配慮をしている。
38	措置を取っていない。	交流学級で活動している時間になるので、顔を向けて口元を見せて話したり、太鼓を使って合図やリズムをとるなどの配慮をしている。難聴学級担任も指示を徹底させたり、集団演技等全体をそろえる時などは補助に入り個別に指示をしている。
39	「教育補助員」のような特別な措置を取っておりません。	・全体での指導が聴こえるように前方に位置づける。 ・全体指導後に個別に説明をする。

学校名	学校としての措置	体育授業時の配慮
40	特にないが、交流の教室に難聴学級の担任がついていくことがある。	スタートの合図に旗を使ったりたいこを使ったりしている。
41	取っていない。	・移動など分からない時には、担任やまわりの子が教えている。 ・全体指導後に個別に説明をする。
42	特別な措置はありませんが、難聴児が1名なので、全ての教科において難聴学級担任が要約筆記や手話通訳をしながらサポートしています。	特にありませんが、難聴学級担任が指導内容についてすぐその場で説明（筆談や手話で）しています。
43	要約筆記や手話通訳はつけていない。1人学級なので担任が指導支援をしている。	・聴覚障害児の方をむき、ゆっくり大きな口で話す。 ・指導される先生が全体指揮をされる時は、難聴学級担任が常に横にいてサポートしている。
44	・きこえ担任が国語（週4時間）、算数（週5時間）の個別指導を行うことにより、理解の補充を行っている。 ・場に応じて、要約筆記やT.Tの形でサポートしている。	活動時には班やグループで行う体制をとり、児童が他の児童と共に活動することによって、内容を把握しやすいようにしている。
45	校長が週4時間（国3、社1）、特別指導をしている。主に語いを増やす学習や、社会的な知識の拡大をねらって指導している。	大きな音や音楽やノイズが対象児の近くでならないよう配慮している。
46		・文字による情報（カード）を与えている。 ・他の児童に協力を促す。
47	別にありません。難聴学級という教室があります。	FM補聴器部分を取り、普通の補聴器のみで授業に参加している。なるべく友達の様子を見ながら行動するように、また担任の先生からよく見てもらうようにしている。
48	とっていない。	前列に並ぶよう配慮されている。
49	通級担当者が「要約筆記（主）」＋「手話通訳（従）」の情報保障を（必要な）児童に対して行っている。本人及び保護者のニーズ、受け入れ校の了解・要望、担当者の時間調整・・・各条件を満たすケースについて行うことにしている。	・予め教室で大体の内容について連絡しておく。 ・教師の話を聴取しやすいところへ移動させたり移動することを指導している。 ・できるだけカードなどで視覚的に情報を伝える。 ・モデルとなる子を2、3人行わせたあとで、番が回るようにする。 ・その他、子どもと話し合いながら必要なことを行う。 通級担当者が必要を判断したことを行ってもらう。
50	毎時間ではありませんが、週に1、2時間程、児童生徒支援加配が支援している。	・学習ノートを作り、学習内容を把握させている。 ・大きな声で少ない言葉で指示する。
51	在籍が1名ですので、交流学級での学習時には、ノートテイクという形で、（難聴学級）担任も参加しています。	在籍児童の障害の状況により、運動面では配慮が必要と主治医の方から指導を受けています。そのため、年度途中から現在のところ、体育の時間は参加しておりません。

学校名	学校としての措置	体育授業時の配慮
52	難聴学級担任が難聴児のそばに行って、情報を保障できるようにしている。	<ul style="list-style-type: none"> ・難聴学級担任が難聴児のそばにいること。 ・指導される先生は、ジェスチャーや絵、文字を使って、ポイントを説明してくれている。
53	特にありません。	<ul style="list-style-type: none"> ・水泳時の指示について、個別対応をしている。 ・運動会スタートの合図はピストル+手（視覚情報）で知らせている。
54	していない（本区の行政上、通常学級に在籍する児童への介助員等のサポート制度がとれません）。	<ul style="list-style-type: none"> ・全体への指示と同時に個別に話しかける。 ・級友の支援をつくる。
55	特に取っておりません。	全体に指導した後、本人の様子から分かっていないようであれば個別指導、そうでなければ他の子と同じようにやっています。
56	ない。担任（学級担任）や難聴学級担任がサポートしている。	<ul style="list-style-type: none"> ・わからない時は個別指導をしたり、友達同士で協力できるように指導したりしている。 ・必要に応じて難聴学級担任がサポートに入ったり、学級担任がその子に分かる合図（ex スタートの合図等）を送ったりしている。
57	ありません。	<ul style="list-style-type: none"> ・話がよく聞こえるように説明のときはそばに行く。 ・ボール運動のときは補聴器をはずさせるか、本人または学級の子どもたちに注意を促す。 ・特に低学年の在籍児童の場合は、担当者がT Tとして体育の授業に入るよう、時間割を組んでいる。また、運動会の練習も可能な限り担当者も出向いている。
58	昨年度までは難聴学級に児童が1名在籍していたが、今年度4月当該児童の希望により普通学級へと席を移し、難聴学級はなくなった。よって今年度は、普通学級の担任のみで指導にあっている。	<p>本校の対象児は、難聴の程度も軽く、他者とのコミュニケーションも比較的スムーズにとれるので、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・補聴器が水にぬれることがないように、 ・頭部に強度の刺激を受けることのないように、 ・できるだけ前方から声をかける（後ろからでも聞き取れますが）という程度の配慮で十分です。
59	難聴学級担任が通常学級での学習の際は、要約筆記でサポートを行っております。	体育の時間は、特別なことを行わず、友達からの情報収集の場としております。運動会については、難聴学級担任がそばにつき、サポートをしています。
60	特にない。	<ul style="list-style-type: none"> ・難聴学級において事前に連絡（行事関係） ・体育は一斉に指示した後、個別に声かけをしている。 ・行事のときには近くにいて伝達している。
61	なし。	児童の方に向けて、はっきりと口を動かして話す。あとは友達が伝えたり、友達に聞いたりして、自分で動いています。（本人も、運動の時には、「ぼくは、わかる」といって特別な支援を必要としていません。）
62	教育補助員はいないが難聴学級担任が情報保障（主にノートテイク）を行っている。	T 1は、特に配慮はしていない。難聴学級担任もT・Tの形で指導しているので、T 1の指示内容はノートテイクや口話で本人に伝えてスムーズに体育に参加できるようにしている。

学校名	学校としての措置	体育授業時の配慮
63	いない。(在籍がひとりなので)	身振りを大きくする。普段よりゆっくり発音する。など。
64	なし。	まわりの児童に、難聴児が気づかないでいる時は声がけをする様に指導している。
65	ありません。	<ul style="list-style-type: none"> ・特別なことはしていませんが、指示が入りやすいようにはっきり話したり、動作を交えたりはしています。 ・水泳指導の場合は機器をはずしてしまい、全く聞こえない状態になりますので、難聴学級の担任が授業に付き添いサポートします。
66	特別な措置は取っておりません。	<ul style="list-style-type: none"> ・指示した内容の確認をする(個別指導する)。 ・活動内容が聴覚障害に影響があるかどうか考慮する。 ・日頃から親しく一緒に行動できる仲間作りに心がけておく。
67	とっていません。	<ul style="list-style-type: none"> ・顔を見て、身振り手振りをしながら、大きな口ではっきりゆっくり話すように努めている。 ・友だちが、声をかけながら動作で確認するようクラスの子にお願いしている。
68	特に取っておりません。	<ul style="list-style-type: none"> ・水泳の時間は補聴器をはずし聞こえにくい状況にあると思うので、指示などわかっているか注意してみています。それ以外は特別なことはしていません。
69	取っておりません。	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ学習におけるサポート ・掲示物の活用 ・視覚情報と聴覚情報の提示(スケッチブックの使用)
70	特になし。	<ul style="list-style-type: none"> ・目を見て話す。 ・聴くことが困難な場合は、体に触れて、ゆっくり、はっきりした声で指示をくり返す。 ・周囲の友達が声かけをするように日頃から話しておく。 ・教師自身の体の動き(ジェスチャー)を大きくし、理解の助けにする。
71	何もない。	ピストルの代わりに旗を上げる等。
72	母親からの要望を受け、1児童は在籍学級にノートテイカーさんの補助があります。	特に体育だから、運動会だからということではなく、日常的な配慮と思う。
73	感音性難聴のため、音が歪んで聞こえる。聞き取りにくい時は助言をしている。また、長い話になると要点がとらえにくいいため、障担が要点を伝えたり、メモを渡したりしながら理解させている。毎日の学習ポイント(特に算数と国語)の宿題を出して学習内容の定着を図っている。	本人は運動が大好きであり、運動技能に優れている。スポーツ少年団に所属(サッカー部)し、土・日曜日は練習に励んでいる。授業の導入段階においてやり方やポイントをしっかりと聞くことを目標にさせている。理解できない時は助言をしている。
74	取っていない。	そばについて、注意事項を伝える。

学校名	学校としての措置	体育授業時の配慮
75	難聴学級の在籍児童なので、学級担任が常に付いて授業を受けている。指示が通らない場合は説明している。	体育が好きなので、意欲的に参加している。特別でいねいな配慮はしていないが、大きな声で指示を出している。通常校にいる難聴児は、大勢の中で自己を表現するのがとても苦手である。自分に自信がないと、実力（運動能力がよい）があっても、みんなから一歩常に引いていてそれが習慣になり、運動能力も伸びるものも伸びなくなっていくと思う。T Tの先生が付いていれば励ましや周りの子たちへの声かけができて、明るく楽しく体育ができると思う。また、幼い頃から、体をきたえている子は、自分に自信があつてどこであろうと伸び伸びとして、みんなにうまくかかわって能力を伸ばしている。
76	難聴学級が設置されているので、担任が全学習場面において指導及び補助をしている（在籍児1名なのでしっかりと指導できる体制になっている）。通常学級での交流学习においては、児童の横について要約筆記、口話及び手話・指文字、身ぶり等で情報を保障し、獲得できていない言語の意味を伝えるなどの学習補助も行っている。難聴学級では、1対1で児童に合った個別指導計画に基づいて指導を行っている。	全体指導する教員はFM補聴システムのマイクをつけて話す。また、ホイッスルには電子ホイッスル（Moltenの手で鳴らすタイプ）を用い、音を鳴らすときは、手を高く上げて上の方で鳴らすなど、視覚でも分かりやすいように配慮している。担任は児童の横について、話の内容のわからないところを要約筆記、口話、身ぶり等を使って情報を保障している。
77	特にありませんが、6年生児童のみ担当者が、交流教科のサポートをしています。	活動内容がわからなくてとまどっているときには、個別に伝えてもらっています。
78	難聴学級在籍児が1名のため、担任が常に情報保障にあたれる。周りの児童の手助けもあり、担任外での補助員の必要性はなし。	講話や指示は、そばで通訳するが、運動面についてはアドバイス（本人にわかりやすく話さないと、意味がわからないことがよくある。）はしてもそれ以上の配慮は特にしていない。
79	特になし。	<ul style="list-style-type: none"> ・笛などの音での指示は出さない。 ・動作を大きくする。 ・一斉に説明した後、個別に説明する。
80	そういった措置は現在ございません。	個別指導をし、二度三度念をおすようにしております。
81	特別な措置は行っていません。	スタートの合図を肩をたたいて教えたり、個別に技能のポイントを教えたりしています。
82	特になし。	きちんと耳に届くような声の大ききで話す。
83	行っていません。ぜひそのような措置ができたと思います。	なるべくその子の方を見て、話すようにしています。言葉だけでなく、動作も交えて説明するようにしています。
84	配置していない。（教育補助員を）	他の児童と別のことをやっていないか常に観察し、違っている時は、個別に指導する。（○さんは運動能力に優れ、リズムも教師の模範演技を見てできるので特別指導はしていない。）

学校名	学校としての措置	体育授業時の配慮
85	ありません。	<ul style="list-style-type: none"> ・指示が伝わっているか、常に確認する。 ・顔を向き合って話す、又聞かせる。
86	とっていない。	<ul style="list-style-type: none"> ・高学年生に対しては、水泳時の指導ぐらいで特別には必要ない。 ・低学年生に対しては、水泳時では保護者も自主的に参加してくれている。 ・在籍児2名に対して、指導者は指示がよく通るように心がけている。
87	いません。	視覚情報（合図、旗を振る）や肩をたたくなどの方法で補っている。
88	通級指導教室担当教員により、週4時間の巡回指導を受けている。通常学級の授業に入り、本児の横で支援、補助。主に傾聴態度の指導。	全体の指示の後、個別の指示をするように心がけている。または周囲の児童と組になって活動する内容を取り入れる。
89	本校では難聴児童1名と担任1名のため、体育、音楽、給食にも協力学級に行く時はいつもついていっている。	動作を多く入れたり、模範例を見せたりしてわからせるようにしている。
90	難聴学級在籍児童2名が同学年なので、交流学級での学習を含め学校生活すべてにわたり、難聴学級担任がそばにつける状況にあるため、補助員等特別な措置は取っていない。	<ul style="list-style-type: none"> ・全体指導の先生の指示を、難聴学級担任が通訳して伝えていている。 ・スタートの合図等は、目で見てわかるよう笛ではなく旗にしたり、表現運動のときの合図は大だいこを使ったりの配慮がある。2人組やグループの中では、子どもたちが合図したり伝えてくれている。
91	とっていません。難聴学級担任がその仕事をしています。	聴覚障害児を前の方におき、口を見せてはっきりと話すようにする。（説明のときなど）運動会とその練習では、FMマイクを使う。
92	国、算は、難聴学級での個別指導。社、音、総合は難聴学級担任又は他の障害児学級担任が横について情報保障。理は専科と交流学級担任によるT、T。それ以外は交流学級担任のみ。	<ul style="list-style-type: none"> ・全体指導の先生の指示を、難聴学級担任が通訳して伝えていている。口を見せて話す。 ・スタートの合図等は、目で見てわかるよう笛ではなく旗にしたり、表現運動のときの合図は大だいこを使ったりの配慮がある。2人組やグループの中では、子どもたちが合図したり伝えてくれている。伝わっていない場合は、周囲の子どもに（キューサイン等で）伝えてもらう。
93	取っていない。	<ul style="list-style-type: none"> ・学年体育では、全体指示を出さない先生が、指示を伝えるように配慮している。 ・運動会の練習では、難聴学級の担任や学年の先生が付いて、全体の指示や先生の話伝えるようにしている。また、近くの友だちに先生たちが付けられない時に、支援してくれるように頼むこともある。
94	教育補助員を市で雇用しています。	<ul style="list-style-type: none"> ・スタートの合図や指示は、サイン等で視覚的に情報を与えるようにしている。 ・学級指導の中で子供達が自然と情報保障でサポートするよう指導されているので、指示内容が難聴児童に伝わっているかどうか、まわりの友達が自然と確認している。

学校名	学校としての措置	体育授業時の配慮
95	取っていない。しかし1人学級なので難聴学級担任がサポートをしている。	難聴担任が、黒板に板書したり、近くに行って口話、動作等で指示された内容を伝えたりしている。
96	特別な措置は取っていません。	学年全体でやる時など複数のTがいる場合は、動きを見ていて遅れていたらそばに行く。広い所で話している時は、そばで説明を伝える。ほとんどの場合は、友達が支えてくれています。
97	特別な措置は取っていない。	普段はFMマイクを使用しているが、激しい動きやほこりが予想される場合ははずしている。話す時は、顔を見せ分かったか確認しているが、できてない時は、周りの児童が教えている。
98	普通学級児と共に学習している。担任としてできる限り、彼女の近くで話すようにしている。	<ul style="list-style-type: none"> ・できる限り、学習同様近くで説明したりしている。 ・マット運動時には補聴器に気を配りながらさせていた。
99	取っていない。	全体への指示などは、できるだけ本人の近くで顔が向くようにして、している。運動会練習などで担任が近くで指示できない時は、近くの子どもに一声かけておく・・・など。
100	取っていない。	<ul style="list-style-type: none"> ・ゆっくり大きな口形で正面で話す。 ・具体物を見せたり、ジェスチャーをして伝える。 ・伝える内容が複雑な場合は、紙に書いて提示する。
101	特になし。	特に行っていないが、見てわかるような説明と、友達の活動を見たり、プリントを見たりして分かるようになっている。
102	担任（難聴学級）がノートテイクを行っている。2ケース3年4年各週2～3時間。学生ボランティアを募ってノートテイクを行っている。2ケース4年各週2～3時間（5、6年生は比較的軽いので）	<p>他校の先生にもお願いしていること。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プールのルール、運動会の隊形移動など、長い話は室内で。 ・スタート等合図は旗を使用。プールでの合図は動作や標示板を併用。 ・伝える内容が複雑な場合は、紙に書いて提示する。実際にやってみせる。
103	在籍児童1名の固定制の学級なので、「教育補助員」の配置はされていない。	聞こえなくて、児童が指示などが理解できてない時がないか、常に目配りをしている。（難聴学級担任）
104	教科によりT・Tを配置し（「教育補助員」として）、筆記や口形で内容理解を図るようにしている。	<ul style="list-style-type: none"> ・ルールや活動についての説明を初めにしっかり行う。 ・号令などは笛（ピストル）と旗の両方を使っている。 ・水泳時は、特に詳しく注意及び説明を行い、安全に留意する。
105	取っていない。	担任の近くで話を聞くように指導。
106	いいえ。	気を配って様子をよく見るようにしている。
107	無し。	特に配慮していません。
108	難聴学級担任が、難聴学級以外の授業・活動についている（学級の児童が1人のため可能）。	グラウンドや体育館では、教室以上に聞き取りがむずかしいので、指示が伝わっているか確認している（横についている）。

学校名	学校としての措置	体育授業時の配慮
109	置いていない。難聴学級担任ができる範囲でサポートしている。	FM補聴器を使用。補聴器をはめていると危険性のある運動を行う時ははずさせて、個別指示を徹底させるようにしている。運動会の練習時は、難聴学級担任が補助について指導するようにしている。
110	していません。	1年生のプール学習のはじめに、補聴器のあつかい方や先生の指示内容について、個別に指導します。
111	取っていない。	<ul style="list-style-type: none"> ・大きな声でゆっくりと話す。 ・目を見て話す。
112	特別な措置は特には取っていません。座席は位置などは考慮しているが、他は本人の補聴器により、十分に自立して生活ができていますので、特に考えてはいません。	なるべく教師の前に座らせる、又は、クラス児童にあらかじめ指導をしてあるので、常にペアの様な形で、全員がサポートできる形をとっています。また、補聴器をはずす運動（水泳など）の時は、個別に呼んで教えたり、ホワイトボードを活用したりするようにしている。
113	難聴学級が本校にあるので一週間に4時間程度通級している。国語（発音、語い、意味調べ等）や算数（教科書にそって）を個別指導したり、その他の集団活動の内容について連携をとっている。	身長は高い方だがなるべく前の方に並ぶように配慮し、聞こえるかどうか、確認しながら指導している。周囲の友達にも、声をかけてあげるように協力を頼んでおり、皆とても親切であるし、本人も真面目に頑張っている。
114	ナシ。	FMをつけて指導。ない時は近くで再度伝える。
115	残念ながら（子ども達に申し訳ないのですが）特別な措置を取っておりません。本校では、特別支援教育介助員が導入はなされているのですが、聴覚障害児への対応がなされていないので、「教育補助員」が配置されると、とてもありがたいです。	<ul style="list-style-type: none"> ・運動会の練習（5年の組体操）では、可能な限り、難聴学級担任がつき、一緒に行った。 ・動きを図や言葉で説明したり、周囲の子どもたちが支援（伝える、一緒に行動する等）できるよう声をかけたり、指導している。 ・指示したことが理解できたかを確認する。 ・難聴児自身が周囲の児童を見て判断し行動する場面も多々ある。
116	取っていない。	近くで指示をしたり、個別指導をする。
117	<ul style="list-style-type: none"> ・担任は手話を使って学習活動を行っている。 ・教科書の内容を要約したものや、わかりやすく図や絵を添えて説明したものを掲示する。 ・交流校との活動時には、必ず介助員が付きそう。（介助員は少し手話を取得している。補助として口話やメモを活用） 	必ず、担任か介助員が付きそう。
118	いない。	補聴器をつけていない水泳の授業の時には、全体指導の指示を耳もとで伝えるなどをする。特にはずしていない体育の授業中は、後ろから声かけや指示をしないようにする程度。

学校名	学校としての措置	体育授業時の配慮
119	いいえ。	一番前や一番後ろは避け、全体が見渡せ、教員の声も聞き取りやすい場所（前から二番位のはし）にする。
120		特にありません。本人は運動能力に優れ、ねばり強く努力している。運動会などの開会式や閉会式での放送時において、きこえの担当教諭がつきそい、ききとりの補助をしている。
121	取っていない。	・体育の時間、笛や太鼓（タンブリン）の音で合図をするが、一般の子と同じ程度で特にはしていない。児童が困っているような時には、そばで話を聞き、対処する。 ・運動会ではピストルの音の影響を考えたが、イヤホンを本人が調節すれば問題ない様子なので、特別な配慮をしなかった。練習の時にピストルで様子を見た（一回）。
122	現在、取っている子どもはありませんが、来年度から取っていきたいと考え、保護者と話し合いを行っているところです。まだ、結論は出ておりません。今回のアンケートをきっかけに、在籍学級の担任の先生方の難聴児のとらえ方が、少しわかりました。毎年6月に、担任の先生方との話し合いの時間を設けて、理解していただけるよう努力してきたつもりですが、まだまだ足りなかったなあと、自分の取り組みの甘さを反省しております。本当によい機会をいただきました。ありがとうございました。	在籍校担任者会での話し合い（情報交換）では、体育に限らず、いつも、担任に注目し、よく顔を見て話を聞くように、指導してくださっていると、うかがっております。
123	特になし。	指導者の口元、体の動き方を見ているか確認する程度。なるべく対象児童の方を向き、大きめの声で話すようにしている。聞き取れない時は質問してくるようになったので、その場合はゆっくり、大きな口で対面して答えるようにしている。
124	特にありません。私が担任をしている子は、特別措置がなくても、日常生活に差しつかえありませんので、特に配慮はしていません。	現状を確認の上、私が受け持っている子は今のところ、特にありません。
125	生活全体のサポートは、難聴学級担任、クラス担任で行っており、補助員のような特別な措置は取っていない。	運動の仕方やゲームのルールなど、実際に目の前で教師や児童が実演させてみせている。
126	特になし（児童の通級教室担当者が、情報確保の補助を朝会、集会、特別学習等で随時行っている）。	・水泳・・・安全管理。 ・通常体育、運動会・・・FMマイク使用。
127	通級による指導。	視覚的な情報手段を活用する場合がある。（毎回ではない）

学校名	学校としての措置	体育授業時の配慮
128	取っておりません。	<ul style="list-style-type: none"> ・積極的な手話の活用。 ・事前に合図を決めておき、それを使用する。 ・メモ用紙、筆記用具を教師側が持参し、必要に応じて利用する（指文字、手話でも読み取れない言葉や言葉の意味などを書く。固有名詞が多い）。ただし、活動となるとまわりの動きについていかなければならないので、通じなかった言葉等メモして事後指導となることがある。
129	学級担任（難聴）がほぼ活動を共にしているため、特になし。	聞き取りにくさをカバーするために、聞こえのよい耳の方へ立ち、指示を出す。視覚的に補助もする。（絵カードや文字で）
130	「教育補助員」の形ではなく、聴覚障害児の学級「難聴学級」として、開設されているので、障害児学級の担任が1名いる。その担任が、どの授業にも入りサポートをしている。また、FMマイク、補聴器を使って、声がしっかり聞けるようにしている。	体育の時間は、指示が通っているかどうかの確認をしている。
131	特になし。	<ul style="list-style-type: none"> ・教師の目の前で話を聞かせている。 ・動きの手本を見せるようにしている。 ・個別にゆっくり手とり足とりで指導する時間を作っている。 ・CDやテープの音量に気をつけている。
132	いません。	<ul style="list-style-type: none"> ・口の形をはっきりと、明瞭な発音に心掛ける。 ・全体での説明には、できるだけ具体物や言葉を書いたカードを準備し、視覚的に説明を補足している。 ・全体の説明のあと、個別に補足説明する。
133	取っていません。	水泳指導時（補聴器の取扱い、個別に声を掛ける等）以外はしていません。
134	取っていない。	<ul style="list-style-type: none"> ・水泳時に配慮する（補聴器の取扱い、個別に指示をする） ・屋外（グラウンドなど）での活動の時、個別に指示したり、回りの子どもと一緒に行動してやれるようにたのんだりする。
135	特になし。	補聴器の管理（汗、水滴等）
136	特になし。	理解がむずかしい場合は、模範を示す。友達にアドバイス・指示をさせる。
137	難聴学級担任が各教科において、情報保障などのサポートを行っています。	体育の時間や運動会の練習などの時には、学級担任がFMマイクを使って、口元が見えるように、はっきり話をしたり、ルールの説明をしたりして、難聴学級担任が側にいて、分かりにくい時には筆記したり口頭で伝えたりしています。

学校名	学校としての措置	体育授業時の配慮
138	<p>教育補助員はおりませんが、難聴学級担任が聴覚障害児のいる通常学級に出向いて、T・Tの形で聞き取りの補助や内容理解のための支援を行っています（個別指導の他に）。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・事前に図で説明したり、聴覚障害児のわきについて一緒に活動したりします。 ・水泳時は、補聴器や人工内耳（外装部）をはずすので、プールと一緒に入り、児童につきます。 ・聴覚障害児が気づかないときには、聴覚障害児の前後、左右の児童が体に触れて知らせてあげるように指導しています。

表 33 中学校における支援状況

学校名	学校としての措置	体育授業時の配慮
1	聴覚障害生徒単独の特学を設置している。	指示は必ず正面にむかってできるだけゆっくり、大きな声で、はっきり話す。
2	個別指導による補充学習を実施	人工内耳の生徒に他のコートからボールが飛んでこないように体育館中央のしきりネットは常にひいている。
3	情報保障は難聴学級担任が行っている。 支援員等の配置はない。	できるだけ、聴覚障害生徒の方を向いて話す。話の内容が伝わっているのか確認しながら授業を進める、等の配慮をしています。
4	なし。行事（入学式、卒業式など）においては、OHPによる要約筆記をボランティアの方々に依頼。	指示が伝わったかどうかの確認をする。
5	取っていないが、きこえ担当が指導している。	していないと思う。
6	難聴学級担任が行っている。	黒板やメモ等視覚補助を多く取り入れている。
7	特にありませんが、教員の中に同障の先生がいらっしゃって聴覚障害生徒のなやみごと等の相談などをノートを通して行っています。担任としては助かっています。	生徒の近くで話をするようにしている。あと確認も何回か行い、本人がわかったという顔つきをしてくれることで終わらせる。
8	現在は一人学級で、通常の学級で生徒が学習する時間は、技能教科を除いて、難聴学級担任が手話通訳やノートテイクを行っている。集会等でも教師や生徒による手話通訳をとり入れている。支援員は置いていない。	<ul style="list-style-type: none"> ・動作をしたり、ホワイトボードに書いての説明をする。 ・大切な伝達はメモを渡す。 ・部活の友達による手話通訳。 ・運動会練習では、かけ声のかわりに肩をたたいて合図したり、難聴生徒の前に手本となる子を置いて理解させたりして、本人にわかりやすい工夫をしている。
9	言語学級で五教科は教科担任がそれぞれ個別指導をしているので、今のところ特別な措置を取っていません。	全体に指導や助言、説明をしたあとに、本人たちへ補足説明をしている。また、周囲の生徒も、聴覚障害生徒をよく理解しており、友達同士で説明している場面もよくある。
10	<ul style="list-style-type: none"> ・英、数の取り出し、個別指導。 ・他教科については聴力レベルに応じてTT。 	生徒たちは周囲の動きをよく見て同じように行動しています。他に、100m走等笛を使うような場面では旗にかえたり、身振りや伝えたり、視覚的な刺激にかえて指導を行っている。
11	国語、英語、数学の3教科においては、専科の教員が個別に指導を行っている。	目線を合わせて大きな口を開けて指示をしたり、必要に応じて板書等で説明を行ったりしている。又、わからないことは、自分から仲間に聞けるよう指導している。
12	取っておりません。（座席を前の方にする等の配慮はしている。）	他の生徒と同じ様に、何でも頑張っているのです。
13	いいえ。	また、他の生徒達には、障害について、話をし、理解を得るよう配慮している。
14	いいえ。	指示や号令の音量を大きめにする。指示内容が確実に伝わっているかどうかの確認。

学校名	学校としての措置	体育授業時の配慮
15	「学校生活支援員」等は配置していませんが、本校の教員が通常の学級での授業に、ノートテイクに入ることがあります。	<ul style="list-style-type: none"> ・活動については、特に大きな配慮はしなかった。 ・説明を行うとき、先生が2人の時は1人が横で確認している。
16	取っていません。	<ul style="list-style-type: none"> ・指示は、よく聴きとれていきますので、ゆっくり話すとか顔を見せて話すくらいです。 ・特別な大会に出場する場合など、個人的に確認してくれています。 ・雨の時は、補聴器をはずして、練習しています（陸上部）。
17	ない。	<ul style="list-style-type: none"> ・試技をよく見せる。 ・連絡は書いたものを渡す。
18		生徒の近くにおいてメモを取りそれを生徒に見せる。
19	校外学習時、行事時等、必要に応じて（難聴学級担任が）補足、補充をするよう努めている。「その時」のこともあるし、放課後等の自立活動の時間に行う場合もある。引率等に加われない時は、担任に個別に必要事項について話しておくこともある。	<ul style="list-style-type: none"> ・徒競走等、スタートの合図（視認できるよう）。 ・プール ○説明時（特にプール指導の時）、簡易筆談器（かきポンくん）を使用することもある。 <p>※担当教員により対応にかなりの違いはある（臨機応変）。が、上記のことは、年度当初、ひととおり難聴学級としてお願いするようにしている。</p>
20	「きこえ」の問題が本人の生活、学習など障害となっています。集団行動や集団の中での学習は積極的にいながらも、本人の弱い所などでは、抽出しております。	実技の前の説明に通訳や知識のサポートをしています。実技中も参加したりしておりますが、本人の自主的活動を尊重してあげています。
21	<ul style="list-style-type: none"> ・国語、数学、英語の授業は難聴学級担任が「教科の補充的指導」として取り出し授業を行っている。 ・理科、社会の授業ではボランティアの学生、保護者、要約筆記サークルの方々によってノートテイクの情報保障をしている。 	
22	○市では、「教育補助員」を要望に応じて配置してくれる特別な措置を取ってくれています。本校でも、各教科での情報保障（ノートテイクまたはパソコンテイクや手話通訳）を教育補助員の支援もうけて、教育効果をあげています。	本人が周囲の生徒の動きをみて、活動しているが、指示するときは、手話を使っている。個に応じた指導のときは、生徒の活動を見せながら、大きめな声で動作をしながら指導している。また、いっしょに活動している生徒に、聞こえにくさをフォローしてくれるように協力を頼んでいる。
23	教育補助員に聞こえる耳の方で解説してもらったり、口語筆記をして支援してもらっている。	<ul style="list-style-type: none"> ・説明のときはノートテイク。 ・指文字を使って会話できる生徒を常に隣に配置している。
24	補助員を1名、週3回お願いしております。	

学校名	学校としての措置	体育授業時の配慮
25	〇〇県立聴覚障害者福祉センター「△△」からの派遣で□□の方々にパソコンテイク及びノートテイクを、毎日、午前中の授業時間に支援していただいている。	・説明のときはノートテイク。 ・指文字を使って会話できる生徒を常に隣に配置している。
26	・国、数、英については、別室で（難聴学級教室）で、1対1の授業を行い、生徒の実態に合った授業をしている。 ・他の教科については、交流学級の授業に参加しているが、必ず支援のために教員がついている。	話しをしている人の口形やこれまでの経験から、ほとんど状況を理解できているので、一つ一つ支援を必要とする状況ではない。近くで様子を見ていて困っている時だけ声をかけるようにしている。友人や近くにいる生徒に聞いていることも多く、周囲の生徒にも援助をお願いしている。周囲の生徒の理解を深めていくことが大切である。
27	在籍学級の授業では、体育、技家以外は全てノートテイクによる情報保障をつけています。又、学活（HR）や集会場面（朝会等）では、通常学級のボランティア生徒によるノートテイクがあります。	話す時は難聴生がこちらの口に注目しているかを確認し、ゆっくりはっきり話すよう努めている。又、ルールの説明など、こみ入ったことを話す時は、筆談することもある。
28	なし。	現在、運動部活動（ソフトテニス部）に所属していて、部活動顧問の先生も、十分配慮していただいている。 （例えば、他の部員に難しい所は関りを持ってもらって、話の内容把握に努めている）また、スポーツ大会、体育の時間等は、簡単な手話や筆談をまじえ、連絡徹底を図っている。上記の「学校生活支援員」等の措置はありません。
29	校内通級生に関しては、難聴学級担任が学年行事等には、共に参加するので要約筆記等できうるかぎりの情報保障をするよう心がけています。	体育祭では、たとえば、ルールの確認をきちんとさせる、スタートの合図に気づくように練習をさせる。
30	取っていない。県立聾学校に教育相談を受ける（1年に2～3回）。	安全。理解。
31	支援員といった措置は取っておりません。担任またはその時間の担当教員がノートテイクに入り支援しています。	担任が補助に入ってノートテイク等で支援するとともに、バスケットボールの試合のように危険を伴う場合は、別メニューで練習させています。
32	教科で必要に応じてパソコン要約筆記による、ノートテイクを行なっている。また、朝礼や行事でパソコン要約筆記と手話通訳両方を、手話ボランティア部の生徒が行なっている。教員はその補助をする。	水泳や陸上でスタートの合図を手を振ることで行なっている。ダンスの練習など動作が難しいものに関しては、授業後個別で指導し、サポートしている。また、必要に応じ、ノートテイクをし、情報提供を行なっている。
33	難聴学級担任が協力学級に入り、情報保障（主に、五教科）、学習支援をしている。ノートテイクが中心。	・生徒の近くで、大きめな声で話すようにしている。 ・小学校の時から普通学級で過ごしているため、まわりの生徒が教えてくれることもある。

学校名	学校としての措置	体育授業時の配慮
34	難聴学級においては、国、社、数、理、英、音を難聴学級単独で授業を行なっている。技家、美、保体は、交流学級で授業を受けており、要約筆記の介助を、職員がしている。総合的な学習は交流学級で行ない、難聴学級担任が介助している。	<ul style="list-style-type: none"> ・口を大きくあけて、ゆっくり話す。 ・クラブ活動において、連絡事項はプリントを配布し、できるだけ詳しく書いて伝えている。 ・体育祭の練習では、要約筆記をそばで行なったり、空書、身ぶり、簡単な手話使用などで介助している。 ・体育の授業では、時には周りの生徒が伝えてくれるなどのサポートをしている。
35	難聴学級担任が集会時などにノートテイクをするが、今年度在籍生が2名いる関係で、該当学年の先生にノートテイクをお願いしている。	導入時の説明で、動作を入れて説明したり、活動が始まってから近くで観察し、伝わっていなければフォローしてもらっている。
36	いない。	安全を重視して本人を見て指示をする。補聴器の状態を確認する（雨天などのとき）。
37	取っております（ノートテイク）。	<ul style="list-style-type: none"> ・立ってしゃべる位置に注意する。 ・生徒がFMマイクを持っていて、使用を希望する場合は使用する。 ・体育担任から何か説明出来にくいことがあれば後でイラスト、マンガを書いて説明することもあった（難聴学級担任）。
38	特別な措置は取っておりません。	生徒によっては運動能力があり、勘で自然に動いています。指文字とか使って顔を見せたり、アイコンタクトをすることもあります。周囲の生徒たちがサポートしてくれる様に指導しています。
39	今は特にない。親は希望しているが、実際、教員がいないのでできない。	<ul style="list-style-type: none"> ・スタートの合図がわからないといけないので肩をたたく。 ・水泳の時配慮する。

表 34 高等学校における支援状況

学校名	学校としての措置	体育授業時の配慮
1	特になし。	ゆっくり話し、見本を見せてから、練習等を実施している。他には特になし。
2	特にありません。	目の前で大きな声で話す。
3	なしです。	説明時、FMマイクを使用。競技等、実技時は特になし。
4	なし。	口元がよく見えるように生徒の方を向いて話すようにしていることと、生徒になるべく前の方に配置。
5	体育以外の授業はFM補聴器を使用しています。特に「学校生活支援員」のようなことは、やっていません。	体育の時は、わからない時は、周りの人にたずねています。全くなさっていません。必要はありません。
6	取っていない。	言葉での説明だけでなく、図示するか、見本を見せて説明するようにしている。また、ペアや班編成についても配慮するようにしている。また、反面、特別扱いにならないようにもしている。
7	していない。	していない。
8	措置していない。	該当の生徒の方を向いて話しをしたり、年に何度か説明事項等がわかっているか、困った事が無いかなど聞くようにしている。
9	特になし。	正課体育（3単位）男子、女子、クラス別にて女子24名程の少人数のクラスで肢体不良や運動能力の低い生徒を中心に、体育委員任務を一部を責めて指導し、接近できるように毎時間15分間程はグループ指導（技量を含む）をしている。特別な授業展開は実施していない。
10	FMマイクを使用しています。	特に配慮はしていません。解らない時は周りの人に聞いたり、教えてくれる人がいます。
11	特別な措置は特に取っていません。	・周囲の生徒全員の協力をまず前提にして授業を行っている。 ・活動内容自体には、差をつけてはいない。
12	予算の関係上そのような特別措置はとっておりません。礼拝や講演の際には事前に原稿を用意してあります。ホームルームの伝達の際には重要事項を筆記して渡しています。	説明をする時に、できるだけその子に向かって行ない、そうでない場合は、その子に個人的にもう一回説明をする。口を大きくはっきり動かす。合図を動作を伴って行なう。シャトルランの時など音で動く場合には、その子の肩をたたいて合図するなどです。
13	全校集会時にはノートテイクのできる教員が傍らについて、フォローを行なっています。校長の話などは、プリント化したものを渡しています。英語は、別教室においてマンツーマンの指導を行なっています。（クラスの伝達事項は黒板に書くかプリントにするかして連絡もれのないよう心がけています。	本校の生徒は体育の授業に対しても非常に前向きであり、自分から積極的に話しかけてきたり、質問することができます。徹底しておかなければいけないことは再度その生徒に向かってきちんと伝えるようにしたり、プリントを示すなどしています。

学校名	学校としての措置	体育授業時の配慮
14	特別な配慮はしていないが、プリント配布、板書、手帳等により説明と正面に立ち、説明を心掛けている。(隣接している生徒の協力が大きい)	生徒の正面で説明する。模範を見せる。
15	特に取っておりませんが、授業等の担当教員が指導の中で配慮しています。	1年生の途中からテニス部よりラグビー部へ転部希望する。指導者側にもとまどいがありましたがデフラグビーの存在を知り、本人と両親の熱意とで許可しました。現状はこちらの心配は無用で仲間と全く同じメニューのハードの練習をやりとげてゲームにも参加しています。ゲームのレベルが上がった時、まわりといかに意志の疎通をはかれるかなど、大きな課題になるでしょう。
16	現在のところはとっておりません。	体育の授業、部活動に関しては仲の良い友人を1人付けてメモなどを利用して確認させている。教員に関しては大きく口を開け、ゆっくり大きな声で話をするように意識している。
17	インテリア科で実習時間に木工機械を使用するので、危険防止のため主要な機械に運転中は点灯する回転表示の赤いランプを設置しました。その他の特別な措置はありません。	聴覚障害の生徒は、整列のとき教員を見やすい位置に配置し、説明のときはできる限りその生徒の方を見て話す。周囲の生徒にサポートしてもらうことも大切。
18	特別措置を取っている。通常の授業では、学校補助員としてパソコン通訳を行ない情報の伝達を行なった。実習や体育ではTT制を用い、当人の安全を優先に考え補助についた。ただ、一般生徒と同じ効果(学習面)があったかについては完全であるとは言い切れないが、全日制の高校としては最大限に努力したつもりである。当人は(保護者も含めて)感謝してくれている。(と思っている)	事前の指導が一番大切であると考え、本人以外の生徒に対し聴覚障害生徒への配慮を促した。基本的には、指導者側の指示や、ルール、ホイッスル等は生徒同志で伝えるように授業を行なったが、特に問題はなかった。また、肝心な事はホワイトボードなどを使い、事前に連絡するようにした。
19	本校では、特に特別な措置を取っておりませんが、授業や本人との会話などにおいては、できるだけ大きく口を開けてゆっくり話すようにしています。また、携帯電話は持ち込み禁止にしておりますが、家庭との連絡がメールでしかとれないため、特別に所持を許可しています。	点呼のときは本人が担当教諭の口の動きを見て返事をするので特に問題はありません。他の説明のときも常に口の動きで内容を理解しています。動作の説明についても理解できます。本人と懇意なクラスメイトが常時ついており、時々説明を聞いている姿も見受けられます。これらのことにより今現在においては問題がないと思われます。
20	特別な措置はありませんが、教室内の座席の配置やヒアリングを伴う試験(ほとんど実施していませんが)の状況確認等には留意しています。	本生徒については、体育的活動の中で他生徒について行けないことは全くなく、事前の内容説明を聞いて理解できていれば問題はない。ただし、クラブ活動(バスケットボール部に所属)では激しい動きの中では周囲の声は聞こえず、応用技術の習得は他生徒より時間はかかる。配慮としては、技術説明と反復練習のくりかえし。

学校名	学校としての措置	体育授業時の配慮
21	現在、特別な措置を取っていない。	補聴器を着用しているが、できるだけ側で話すことにしている。水泳授業では補聴器が着用できなかったので、メモ書きを見せて指示をした。
22	本校には学校生活支援員はいませんが、クラス担任が相談等に応じております。現在はクラス内の座席の位置や英語のリスニングなどは本人との相談の上、配慮した対応をしております。また、全校集会時なども別室（放送室）で参加するようにしております。それ以外は一般生徒と同じ生活をさせております。	特別な措置は取っておりません。
23	本校では、そのような措置はとれていません。	なるべくゆっくり口を動かすことで指示や指導をしています。口の動きを読み取れるように努めていますが、要点などは個人的に紙に書いたりすることで確実に伝えていきます。
24	特になし。	体育の授業、部活動等特に配慮していない。
25	取っておりません。	説明時にわかりやすく伝えるような配慮をする程度であり、本人は普通の生徒と同じように活動している。
26	まなび支援教員制度（本年度のみ、本校の非常勤教員になる）を利用して8時間（1人の非常勤）と生徒本人の希望する教科8時間、合計16時間ノートテイクをしていただいています。その他、講演会等の特別な場合にも入ってもらう時もあります。ノートテイクは、複数の人に交代で入ってもらっています。	体育や本人の希望する部（〇〇）には、特別な支援教員はつきませんが、ルール等その時間の目標は黒板（ホワイトボード）や紙に書く、実際にやって見せる等の方法をとっているようです。
27	・生活支援員は設置しておりません。次年度以降で考えています。 ・クラスメートによるノートテイクを行っています。日直等が伝達をします。	
28	取っていません。	他の生徒と同じように指導をしています。特に不自由もありません。

まとめにかえて

今回、初めて聾学校のみならず通常の学校に在籍する聴覚障害児童・生徒の体格や体力・運動能力に関する調査を行なった。

小学校段階では高学年において有意差が生じる項目が多く、そのすべてにおいて通常の学校に在籍する聴覚障害児の成績が聾学校に在籍する聴覚障害児を上回っていた。ただし、合計点で有意差が認められたのは11歳の女子のみであった。

引き続き実施した中学校、高等学校での調査では、男女ともいくつかの年齢区分において数項目有意差が認められ、そのいずれにおいても通常の学校に在籍する聴覚障害生徒の成績が聾学校に在籍する聴覚障害生徒のそれを上回っていた。しかしながら、合計点において有意差が生じたのは14歳の女子だけであり、その他では一切有意差は認められなかった。合計点で体力・運動能力を評価するとすれば、女子に関しては通常の学校に在籍する聴覚障害児童・生徒の方が聾学校よりも少し優れ、男子に関してはほとんど差がないと言ってよいと思う。

各項目別の検討では、男女とも体格に関してはほとんど有意差は認められず、男女双方あるいは男女いずれか特定の項目に有意差が集中して認められる体力項目あるいは運動能力項目は見られなかった。このことは年代間の要因の方が大きかったことを意味するのかもしれない。

次に、今回の調査では体格や体力・運動能力にとどまらず、通常の学校における聴覚障害児童・生徒の支援状況についても調べた。研究代表者の力不足で十分なまとめができなかったが、各学校の実態を知っていただくこと（情報交換）が重要と考え、全文を掲載することとした。なお、掲載に当たり個人情報の削除に努めた。

今回の調査では全国の聾学校の先生方、難聴学級を担当している小学校・中学校の先生方及び通常のクラスの担任の先生方、高等学校の担任の先生方始め聴覚障害児童、生徒の教育に直接間接に携わっている多くの方々のご協力をいただいた。また、全国難聴児を持つ親の会には共同研究という形で多大のご協力をいただいた。ここに厚く感謝の意を表す。

かならずしも十分な内容ではないということは承知しているが、本研究が今後の聴覚障害児教育にいささかでも反映されることを期待したい。

研究代表者 及川 力
研究分担者 橋本 有紀
齊藤まゆみ
稲垣 敦

教育形態の違い（統合教育と分離教育）が聴覚障害者の体力や運動能力に与える影響

平成14年度～平成16年度日本学術振興会科学研究費補助金

（基盤研究C）研究成果報告書

課題番号 14580072

平成17年3月30日発行

研究代表者 及川 力

（筑波技術短期大学障害者高等教育センター教授）